

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

妖魔？……もしかしてクレイモア!?

### 【作者名】

Flaggile

### 【あらすじ】

え？俺、妖魔？クレイモアの？

覚醒者とかクレイモアじゃなくて？

妖魔ってやられ役じゃん、どうすんだよ俺……

とりあえず、頑張って生きるしかないか……

目標は平和に平穩に普通に生きたい！

ああ、でもあの子美味しそう……はっ、いかんいかん

そんな感じで妖魔になっちゃった男が主人公です。

妖魔なのに前世の記憶の所為で人間らしく生きたい、

そんな彼は一体どうなってしまうのか？

ほぼ皆無のCLAYMOREのssです。

突然思いつき、思いつきのまま書いています。

ギャグっぽいですが、基本シリアスです。

## 妖魔の誕生

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！」目が覚めると俺は妖魔だった」

な、何を言っているのかわからねーと思うが

おれも何をされたのかわからなかった……

神様転生とかトリップとかそんなチャチなモンなんかじゃねー

……とは記憶が無いから言えないのだが

さて、いきなりネタに走ってしまったが、残念ながら全て本当の事だ。

あれは数十分程前の事だっただろうか？

ふと目が覚めるとそこは森の奥深くだった。

鬱蒼と木々が生い茂りほんの数10m先も見通すことができない。

空からはうつすらと日差しが差し込んでいるのが分かる。

日の差す方向から考えるに今はお昼ぐらいだろうか？

心地良い風が身体を優しく撫で、木々をざわめかせる。

穏やかで安らげる環境。

時の流れすらいつもと違うように感じる。

森林浴するならば最高の環境だろう。

日頃のストレスから解放された大自然の中、些細な悩みなどぶっ飛ばしてくれそうなくらいだ。

実に良い環境だ。で、ここ何処？

というか、俺は誰？

何も思い出せないですけど……

そんな感じで周りを見回していたら頭の中にふと思い浮かんで来る一文があった。

我々妖魔は古より人々の側にあり人間共を糧として存在してきた。人間にとって我々妖魔は絶対的な上位捕食者なのである、と

そんな感じの認識が当然のモノとして意識の底の方にあるのだ。どうやって認識してるんだと言われると困るが、ただそれが正しい事なのだ、という疑う事のできない真実のように感じられる。

もう、この段階であれー？って感じだったんだが、そんな訳無いだろと思って自分の姿を確認してみた。

両手、両足、頭、基本的なパーツの構成は人間と同じだった。

しかし、口は大きく裂けており、歯が鋭く尖っていた。

そして瞳は金色に光り、瞳孔が縦に割れていた。

ついでに肌は青みがかった灰色……

「……クレイモアの妖魔かよ!？」

つい俺は大声で突っ込んでしまう。

今までの話から分かるかも知れないが俺は妖魔という存在について知っている。

具体的に言うくとクレイモアというマンガの敵として、だ。

その中で妖魔は人に成り済まして人を襲い喰らっていた。

そしてクレイモアと呼ばれる半人半妖の者達のみが妖魔を打倒できるとされ、クレアを中心としたクレイモア達の戦いを描いた物語だったと思う。

一体この知識が何なのかはよく分からないが、おそらく前世か何かの知識だろう。

前世の事なんか何も思い出せないから違うのかもしれないけど、ネット上でそう言った小説があった気がするし。

ネット上とかそんな事は分かるのに自分の事は何一つ分からないってどうなんだ……

いつまでも落ち込んでいても仕方がない。

気持ちを切り替えていこう。

さて、ここで問題となるのは妖魔は雑魚でしかないという事だ。  
ん？問題はそこじゃないだろうか？

いやいや、とりあえず何をするにしても生き残る事が最優先でしょう？

だったらこの弱肉強食の世界において強さって言うのは大事な事だと思っただけですよ。

まあ、雑魚とは言っても一般人からすれば途轍もない脅威だったよ  
うだし、物語の初期の方では妖魔相手でもわりとクレアは苦戦していた。  
た。

しかしだ、当初のクレアはクレイモア中で最弱の存在だということ  
を思い出すべきだろう。

クレイモアは妖魔の血肉をその身体に埋め込んだ半人半妖とでも  
言うべき存在だ。

しかし、クレアは妖魔ではなく最強の戦士だったテレサの血肉で戦  
士となった特殊体だ。

そのため力も弱く、速さも遅い、最弱の戦士だった。

そんな最弱の戦士だったクレアですら足手まといか人質が居る  
など特殊な状況以外で苦戦した事はなかった筈だ

この事から分かるのはクレイモアからすれば妖魔は限りなく雑魚  
でしかないという事だ。

実際に複数体の妖魔に囲まれてもあっさりとは皆殺しにしていた。

その上妖魔魔から見たらどうしようもないクレイモアをさらに越え  
た強さを見せつける覚醒者とか、それを越える深淵の者とか、深淵の  
者を倒す深淵喰いとかこの世界には化け物がゴロゴロ転がっている  
のだ。

ちなみに覚醒者ってのは戦士が自らの限界を超えて妖魔化してし  
まった存在の事を言う。

化け物みたいな外見に硬い装甲、驚異的な再生力、膨大な妖力と圧

倒的な強さを誇る存在である。

ましてや覚醒者を超える深淵の者とか……

「……無理だろ、「これ」

orz こんな感じで俺は崩れ落ちる。

まあ、救いと言って良いのかは微妙だがクレイモアは基本的に依頼が無ければ妖魔を倒さない筈だ。

それに覚醒者は妖魔を積極的に襲う事はなさそうだということだろうか？

こちらから積極的に喧嘩を売らなければ生き延びられる筈だ、そう信じる事にする。

……クレイモアの多くが妖魔を憎悪してる事とか根拠がほとんどないとかそう言った事からは目を逸らす事する。

そして、これは重要な事だが、まだこの世界がクレイモアの世界だと確定していない事だろうか？

そう、まだ俺は森しか見てないのだ。

クレイモアの世界ではないかと判断した根拠は頭に思い浮かんだ妖魔だって認識と自分の姿だけなのだ。

という事は自分が妖魔であると思いつくくらいクレイモアの妖魔大好き人間で、この格好も特殊メイクか何かの可能性もあるのだ！

……まあ、可能性は低そうだけど

そもそも自分がそんな痛い人間だと思いたくないけど……

できれば、クレイモアの居ない安全な世界であって欲しいなあ……何もしていないのに殺されたくないし

俺は平和主義者で穏やかな生活がしたいだけなのだが、それは可能なのだろうか？

まあ、とりあえず当面の目標は生き延びる事だろう。

何と言ってもここが一体何処なのかすら分からないのだ。

早く人里か何か見つけるんだ。そして、衣食住を確保するのだ。

「……「食」って、やっぱり人間なのかなあ」

一人呟く。

今の所腹は減っていないが、できれば人間を食べたくはないと思う。

どうも妖魔になった所為か人間を食料として見る事にあまり違和感はない。

だからと言って微妙に残っている前世？の感覚が人を襲うのはなあ、と言っている。

とは言え俺は自分を犠牲にしてまで他人を救いたいとか言う聖人ではないから、必要となれば襲ってしまいたいのだが……

できる限り人間でいたいと思う……既に妖魔なのだが

まあ、極力人間は襲わない方針で生きていきたいと思う。

「さて、ここ何処なのかな？本当に周り一面森しかないんだけど……」

こうして俺はとりあえず適当な方向に歩き始めるのだった。

ちなみにこの方向を選んだのは単にこっちの方が明るいような気がしたからだ。

何の手掛かりも根拠もないのだからどっちを選んでも大差ないだろうと思う。

こんな実質遭難しているのと変わりない状況だが、妖魔になった所為かさして問題とは感じずに俺は気楽に妖魔の体を色々試しながら歩いて行くのだった。

## 妖魔と商人

あれからどのくらい歩いただろうか？

未だに周りは一面の森である。

すぐ側で小川を見つけた時はこれに沿って歩けば人里ぐらいすぐ見つかるだろと思ったんだが…

昼も夜もほとんど休まずに歩き続けているのに全く森から抜ける気配がない。

おそらく既に丸二日ほど歩いたと思うのだが…

そしてこの二日間で俺は自分が人間ではない事を実感してしまった。

まず、食事がいらぬ。

一応小川を泳いでいた魚(生)を食べたりはしたが、全く腹が減らない、そして、一応人間以外の物も食べる事はできるらしい。

未だに本格的な空腹は感じていないのだが、魚(生)を食べたら腹が膨れた感覚はあったから、しばらくは通常の食事で生きていけるのではないかと思う。

次に、身体能力が凄い事が分かった。

まず、二日間ほとんど休まず歩いているにも関わらずあまり疲れていないし、全力でジャンプをしたら周りの木と同じくらいまで飛び上がる事ができたし、殴ってみれば木が折れた。

走れば信じられないくらい速かった。

これならオリンピックに出ても独走でゴールできるだろう。

正直、ちょっと妖魔舐めてた。

クレイモアでは雑魚だったから大した事ないと思ってたが、一般人からすれば化け物だって事を忘れてた。

そして、走るのが凄く楽しい。

何というか全力疾走するとすごい臨場感とスリルがあるのだ。

…調子に乗って木に激突して死にかけたりもした気もするがそんな事は気にしない！

体を変化させる事もできるようになった。

まあ、今の所爪を伸ばしたりできた程度だが…

問題は妖力を感じる事が全くできない事だろう。

これではクレイモアがどこに居るのか分からないではないか！

まあ、会った事もないモノを初心者が判別できる訳ないとは思っし、これからの成長に期待と言った感じだろう。

さて、そんな事を考えながら歩いていると道らしき物に行き当たった。

草が生え放題になっているが、僅かに轍の後らしき物が見える。

道らしき物の片方は森の中へと続いており、鬱蒼と茂った木々によってどこに繋がっているのか見通す事はできない。

もう一方の道は小川に並行するように続いているらしい、こちらも木々が視界を塞いでいるが、僅かに明るいような気がする。

選択肢は3つ

森へと続く道に行く

川沿いの道に行く

全く別の方向に行く

まあ、どうしようか悩むまでも無く だろう。

今まで歩いてきた川沿いだし、何か明るい気もするしというかとか選んだら元の場所まで戻る可能性もあるし、の全く違う方向に行くとか選ぶ意味があるのだろうか？

そんなこんなで川沿いの道をさらに歩いて行く、獣道のような道とは言え道があるため、

今までよりも遥かに歩き易く、轍の跡らしき物もあり、この先に人



がいる可能性が高いため俺のテンションもつい歌ってしまっほど上がっている。

「ふふふふ、ふふふつふふ、ふふふふ、ふふふふ…ん？」

気持ちよく歌っているながら歩いているとどこからかいくつかの足音が聞こえる。

どうやら人の集団が近くに居るらしい。

「おっ、第一村人発見か？」

久しぶりの人との接触到俺のテンションはさらに上がってゆき、足音がした方向へと俺は駆けていくのだった。

ほんの数秒ほどで歩いている商人らしき一団を見つけろ事ができた。

どうやら向こうはこちらに気が付いていないらしい。

「おーいー…こんにちわー」

早速声を掛けてみる事にする。

俺が声を掛けると驚いたようで、全員がこちらを振り向く。

さてこれからどうしようかな？とか俺が考えていると、一人がこちらを指さし、青い顔で叫ぶ

「ひい!! よっ、妖魔だー…に、逃げろー!!」

続いて比較的落ち着いた感じの年配の男が指示を出す。

「カタントの街まで逃げるぞーあそこまで行けばきつと助かる！重い荷物は捨てる！今は命を大切にすんだ!!」

同時に商人たちは悲鳴を上げながらも重い荷物を捨て、全力で逃げ始める。

「あっ！ま、待って…行っちゃった」

追いつく事は簡単だっただろうが、逃げられた衝撃で俺は呆然としてしまっていた。

その時ようやく自分が「妖魔」であり「人間」の敵なのだ実感した。

そしてその実感がなかったため妖魔の姿のまま商人達に声を掛けてしまった。

しばらく商人達に逃げられた事に落ち込んでいたがいつまでも落ち込んでいられない。

とりあえず、先に進む事にするが、目の前には商人達が捨てていった荷物がある。

悪いが折角だしこの荷物を漁らせて貰う事にする。

何と言っても自分、真っ裸で何も持っていないのだ。

文化的な生活をしてきた身としては服の一着ぐらい着たいのだ。

「…と、言っ訳で失礼しますっ」と

ちょうどよく男物の服が一式あったのでそれは貰っておく、他にも腰に着ける事ができる小物入れや地図、いくらかのお金などを拝借する。

どうやら反物を扱う商人だったようで色々な布があったが、俺は別に布何ぞ要らないので、適当に元に戻しておく、残った荷物は放っておいても良いのだが、どうせ同じ方向に向かっているのだし色々貰ってしまったお返しに街まで運んであげる事にする。

地図を見ても現在位置がよく分からないが、確か商人達がカタントの街へと逃げていったので、きつとこの先にカタントの街があるのだろっと思っ。

このまま街に向かいたい所なのだが、一つ重要な問題がある。  
この姿のまま街に向かえばさっきと同じような事が起こるだろう。  
そして、俺はどうやれば人間の姿になる事ができるのか分からない  
のだ。

「…はあ、色々やってみるしかないか…」

という訳で俺の人間の姿になるための特訓が始まったのだった。

side商人

俺の名はラドル、反物商を営んでいる。

いつも通り仲間達とカタントの街まで商品を運んでいる最中だっ  
た。

ふと気付くと遠くから陽気な歌が聞こえたんだ。

その時はそんな事気にしなかったさ、

きつとどこかの商人が大儲けして浮かれているだけだろうと思っ  
たからさ

まあ、出会いでもしたら話ぐらいしてみるつもりだったがな

で、また唐突に歌が止まったんだよ

俺達は何かあったのかな？と思っただけどやっぱり他人事だからな  
気にせず先を急いでいたんだよ

しばらくしたら急に後ろから

「いんちわ」

って怖ろしい声がしたんだよ！

俺達は急いで振り返ったよ

そしたらさ、あいつが、妖魔がニタニタと笑いながら涎を垂らして  
こっちを見てるんだよ

もう、あの時は恐怖で錯乱しそうだったよ

荷物運びで付いてきた新人レーキが叫ばなかったら俺が叫んでた

ね

とは言えレーキが思いっきり叫んでくれたから俺は少し冷静になる事ができたんだ

それで俺は言ったのさ

「カタントの街まで逃げるぞ！あそこまで行けばきっと助かる！重い荷物は捨てる！今は命を大切にするんだ!!」

てな、そりゃあ商品は惜しかったさ

でもあの時の選択は間違ってたと思っっているよ  
やっぱり命あつての物種だからね

その後？

荷物を捨てて後ろも振り返らずに全力疾走さ

きつとあいつも意表を衝かれたんじゃないかな

結局全員カタントの街まで無事に逃げれたんだからな

まあ、街に着いたら大騒ぎさ、すぐ近くの森に妖魔が居るってんだからな

戦える奴は全員招集されて夜も昼もなく警戒したよ

幸い数日経っても誰も森から来なかつたから、きつとどっか別の場所に行ったか、街の警戒を見て諦めたんだらうよ

まあ、俺達が知らせてなかつたらこの街も襲われてたかもしれないな

そういう意味では、街の役に立てて嬉しかったよ

とは言え俺達は大事な商品を失っちゃったから、

これからどうしようって途方にくれてたんだよ。

そうこうしてたら急に兵士に呼ばれたんだよ

で、行ってみたら俺達の商品があるじゃねえか！

何でもいつの間にか門の所に置いてあつたそうだな

きつと哀れに思った神様が助けてくれたんだらうさ

いくらか無くなってはいたが、全て失うのとは天と地の差さ

いや、この時ほど神様に感謝した事はないね

## 妖魔と老戦士

人間の姿になる特訓を始めた俺だったが、特訓は困難を極めた。だって、変身なんてよく分かんないんだもん。

多分爪を伸ばすとかの延長線上の技術何だとは思っただが…

結局できるようになるまでに5日も掛かってしまった。

とは言え実り多き5日間だったと思う。

まず、何をしたらいいか分からなかったから変化させられる爪から始めたんだ。

具体的に言えば、鋭く尖った硬い爪を丸く軟らかく変化させてみたんだ。

これも難しかったが2時間ぐらいでできるようになったな  
で、そこから初めてまず手を人間っぽくできるように頑張ってみたり、牙を歯に変えてみたり、髪の毛を生やしてみたり色々試したんだよ。

そうやってどうにかこうにかパツと見は人間ぽくなったんだけど、  
どうにも違和感があって細部まで弄ってたら時間が過ぎてたんだよな

それに長い時間人間の姿でいる事もできなかつたからそこら辺も改善の必要があったんだよね

まあ、疲れたら逆に硬化させてみたり、蹄作ってみたり色々遊んでた所為もあるが…

そんな事はともかく俺はやり遂げたんだよ！

どこからどう見てもごく普通の男の姿になる事ができたんだ！

…数時間毎に変身を解いて休憩する必要があるけどね

で、早速街に向かったんだ。

どこにあるのか正確な位置が分からなかったから適当に歩いていたら到着したのが真夜中だったんだ。

当然のごとく門も閉まってたから仕方なく持ってきてあげた荷物を門の横に置いて、また明日出直すことにしたんだ。

別に適当に扉を乗り越える事もできるんだが、そこまでする必要はないだろう。

…もし、見つかったら面倒だし

それにしても、荷物があの商人達の手に戻ると良いんだけどね

直接渡せば確実なんだろうけど、ここで目立ちたくはないからな

まあ、運が良ければ届くでしょ、

…所詮自己満足だしこれぐらいで満足しとくべきだろ。

で、夜も明けて翌日、寝坊してしまったため既に日も高くなっていたが、俺は意気揚々と街に向かったんだ。

一人門番こそ立っていたけど、どうやら自由に入っているらしい。

門を通る人達は軽く挨拶してあっさり門を通過しているからだ。

それに門番はあまりやる気がないらしく、通行人の女性と何か話している、

その片手間で通り過ぎた人を一目だけ確認する程度しか行っていないのだ。

…それでいいのか？門番…

「お疲れ様です」

門番に会釈しながら挨拶しそのまま自然に門を通過する。

先程までと同じように門番はこちらに軽く会釈を返して、そのまま女性のお喋りに戻ってしまう。

…本当に何事もなく通れちゃった、いいのか？これで…

自分で言うのも何だが結構怪しい人物だと思うんだが？

まあ、入れたんだし俺が気にするような事ではないのだろう。

それよりも、初めての街である。

前世？とは比べ物にならないが、それでもたくさんの方が行き交っ

ている。

何かの食べ物の屋台らしき物や、荷車に荷物を満載した商人、買い物している女性、様々な人がいる。

街独特の匂いがする。いい匂いとは言えない、華やかな匂いでもない、むしろ糞便の匂いも混ざり合っているため臭いとすら言えるのかもしれない。しかし、人が生きているという活気に満ちた匂いだっ

た。

そんな匂いを俺は胸一杯に吸い込む。

ああ、何て美味しそうな人間の匂いなんだろうか？  
老いも若いも男も女もまた違いがあるらしく少しづつ違うが、いずれも食欲を誘ういい匂いをしている。

折角だし一人ぐらい食べてみても…はっ!?違う違う!!そうじゃないだろ？

余りにも食欲をそそる良い匂いだったので一瞬我を失ってしまっていた。

気をつけなくては、あつ、あの子とても美味しそうだな〜じゃなくて!

ふう、どうやらすっかり意識を保っておかないといけないらしい。

…こんなんで大丈夫なんだろうか？不安になってきた…

「そこのお前ちょっと待て」

いつの間にか近づかれていたらしく、後ろから声を掛けられる。

振り向くとそこには鎖帷子に部分的なプロテクターを取り付けた眼光の鋭い老いた戦士がいた。

門番や警備兵とは装備が違うが、同じエンブレムを付けていることから街の兵士であると思われる。

さて、この老戦士は一体自分に何の用なのだろうか？

面倒な事にならなければいいのだが…

「ワシは」の兵士達の顧問みたいな事をやっとなるグリアという。お

主は旅人のようだがお前はどこから来たのだ？」

「えーと私ですか？…はい、私はその、ここから遙か東の地よりやって参りました」

「ほう、東の地から？黒髪と黒眼、黄色の肌をしておるがそのためか？」

「え、ええ、その通りです。私の故郷では皆このような髪と肌をしておりました」

し、しまった…何も考えずに日本人風にしてしまった…そりや中世ヨーロッパ風の世界だったら目立つわな…

それにしてもこのグリアとかいう老戦士、とんでもない使い手何じゃないか？

目の前に見えているのについての間に距離を詰められてるんだが

…

「ふむ、それで何故旅をしておるのだ？」

「は、はい、それは」

「…それは？」

ヤバい、考えてなかった…急いで考えるんだ。ここはクレイモアの  
世界でその世界でもおかしくない旅の理由、何か、何か無いか？

「…それは、人を探しているのです」

ラキと同じ理由にしよう！

「ほう、人を探しているのか」

「ええ、その通りです」

「どのような人物なのだ？お前が探している相手は」

「女性です。銀髪の」

「何!?銀髪の女だと？まさか銀眼の斬殺者か!？」



おおっと、想像以上に大きな反応だな、あまり考えずにクレアを探している事にしたんだが…そしてクレイモアの世界とほぼ確定、はあさて、ここからどう話を繋げていくか…

「いえ、クレイモアではございませぬ」

「…まあ、そうだろうな、あんな魔女を探す理由などあるまい。ふむ、所でその門にとある商人の荷物が置いてあったのだが何か知らぬか？」

言葉に力が籠った？ここからが本題って事か？

そして、その荷物ってどう考えても俺が今朝置いた奴だよな…ほっときゃよかったか？

「…荷物ですか？いえ、知りませぬね」

「…そうか、所でお主は今この街に着いたのか？」

「ええ、その通りです。今朝はまだ森の中でしたね」

ん？今一瞬目が？

「実はお主そっくりの者が荷物を置いていったという人物が居るんじゃないが、それに嘘はイカンの、それも直ぐにバレる嘘は」

「!?きつとその人の見間違いに決まっていますよ。それに私は嘘なんか付いていませんが？」

「ほっ」

ヒュンッ!!

グリアが動いたかと思うと首筋に剣が突き付けられていた。

妖魔となり強化された俺の視力を持ってすらほとんど見えなかった。

そして、見えているのに反応できなかった。

「なっ、何をするんですか!?!は、早く剣を退けて下さいー!」

「いいか?正直に答えろ、あの荷物を置いたのはお前で間違いないな  
」?」

断定、グリアには俺が荷物を置いたという確信があるようだ。

おそらく本当に目撃者が居たのだろう、全く気配を感じなかったからハツタリだと思ったんだが違うらしい。

…仕方ないか

「…あの荷物は俺が置いた。…これでいいか?」

「ふん、やっぱりか、最初からそう言えばいいのに下手な嘘付きやがって」

そう言いながらグリアは剣を首筋から退けるが、鞘には納めない。  
俺は首筋から剣が離れた事で安堵しへたり込んでしまう。

「あーあ、見られてないと思ったのにな」

「ん?…ああ目撃者の事が、そんなモン居ないぜ?」

えっ?このジイさん今何て言った?

目撃者何か居ない?

て事は今までの全部ハツタリ?

マジかよ…

「…ハツタリかよ、ていつか証拠も無いのにこんな事したのかよ?」

「ああん?証拠?んなモンより俺の勘がお前だっていつてるんだからいいんだよ、それよりお前何か隠してるだろ?」

「!?!…それも勘かよ」

「そっだ」

「…ああ、あるよ、隠し事ぐらい、あんたにだってあるだろ？ 隠し事の「しやーし」」

「まあ、お前が何を隠しているのか知らないがお前じゃなさそうだな」  
「…何がだよ？」

「お前は知らないかもしれないが、先日森で妖魔が発見された。そしてお前が妖魔じゃないかと少し思ってたんだがな」

そう言いながらグリアは空いてる方の手でボリボリと頭を掻く  
…当たってるし、このジイさん鋭すぎだろ…

「…そう言ってる事は今は違うと思ってるんだな。どうしてそう思ったんだよ？」

「あの荷物さ、「し」ら辺は交易路から外れているから人の往来が少なくてな、この街に来るには近くの村の連中か商人程度なんだよ

で、村か商人の連中なら自分の物にするか、拾ったって届け出るだろ？ この段階で善人なのに何かやましい事がある奴だって分かるんだよ、

話してみたらその通りのヤツで、こんなのが妖魔な訳ないだろ？」

「…はっ、言うね、ジイさん」

「さっきも名乗ったがグリアだ。お前は？」

「グリアさんね。俺は…」

そう言えば俺の名前って何だ？

まあ、前世の名前でいいか…女みたいって言われたからあんまり好きじゃないんだが仕方ない

「俺は零って言うんだ」

「レイか、良い名前だ。じゃあな、元気でやれよ」

「…捕まえないのか？」

「ふん、お前何か悪い事したのかよ？…事件が起こした訳でも無いのに捕まえるかよ」

それだけ言うと剣を鞘に納めグリアは去ってゆくその姿に俺は

「…なあ、グリアさん、俺を鍛えてくれないか？」

気付けばその声を掛けていた。

「鍛えてくれ、だと？」

「そつだ、俺を鍛えてくれないか？」

去っていくグリアさんに俺は自分を鍛えてくれるように頼んでいた。

技術が素晴らしいというだけの話ではない。

何と言ったら言いのだろうか、要は俺はグリアさんの事を気に入ってしまったのだ。

この人に教えて貰いたいそう思ったのだ。

「何で力を欲する？」

なぜ力が必要なのか、か

そりゃあ、生きていきたいのにそれが難しいからだろう。

俺の目標である穏やかで平和な生活を崩されないためには力が必要。

それだけだ。

原作介入なんかしたくもない、あんな化け物だらけの中に飛び込める訳がない。

「俺の目標のために必要だからだ」

グリアさんは俺の目をじっと見ている。

俺も視線を外さずじっと見つめ返す。

どれほど時間が経っただろうか？

「…いいだろう、だが一つ約束しろ、力に溺れるな」  
「はい!!」

そして俺はグリアさんの弟子になった。

## 妖魔と試練

はあ、はあ、はあ

俺は森の中を人間の姿で走っていた。

別に何かに追われている訳ではない。

自分の意思で走っていた。

しかし、しかしだ、どうも人間の姿になると身体能力が一般人並にならなく、

その状態で走る事は非常に辛い、しかし休む訳にはいかない。

ここまでくればそれは意地ではないが俺は走るのをやめる気はない。

最後までやり遂げるそれが課せられた課題なのだから

そもそもこんな状況になったのはグリアさんが最初の課題だ、とか言っ、課題をクリアしないと教えてやらねえ、とか言い出したからだ。

課題の内容は非常に単純だった。

” 隣の村まで行って手紙を渡して返事を受け取り帰ってくる事

”

これだけだ。

しかし、これには条件が二つ付いていた。

一つ目は走っていく事

二つ目は明日の昼までに戻ってくる事

この二つだ。隣町までは歩いたら往復1日半、返事を待つ時間などを考えると、半分の時間で運べという事だ。

妖魔の身体能力を使えばこの課題は簡単に達成できただろう。

しかし、グリアさんに言われたのだ。

「良いか？これはお前の忍耐力を見るために行く。休んだり歩いたりしてもいいが、時間には間に合わせてみる、お前の根性をオレに見せてみる」

こんな事を言われたら頑張るしかないだろう？

マラソンにバイク使うみたいで、妖魔の力を使うのはズルとしか思えないし、この人間の状態でグリアさんに認めてもらいたいのだ。

そんな訳で俺はひたすら森の中、走り辛い小道を走り続ける。

ゼエ、ヒュッ、ツゼツ、ヒュー

息も絶え絶えに成りながら俺は未だに走っていた。

既に日が沈み始め闇が視界を制限する。

あれから何時間ぐらい走ったのかなど既に分からない。

何故走るのかすら分からなくなっていたが、ただ、ただ走り続けていた。

その速さは既に歩いた方が速いのではないかと思うほど遅くなっていたが、それでも俺は走り続けていた。

「…あ、それは？」

向こう側に微かに灯りらしきものが見える。

遠いのか近いのかすら分からないが、ようやく見えてきたゴールに俺は尽き掛けていた体力を振り絞り走る。

どうやら、思いの外近かったらしい。

灯りがドンドン近づいてくる。

そして、ついに俺は村へとたどり着いた。

村人だろうか？

近くにいた男が一人俺に駆け寄ってくる。

「おい！大丈夫か？」

どうやら俺の事を心配してくれているらしい。  
仕事も終わってそろそろ寝るかって時間に顔真っ青で死にかけてるように見える男がほぼ歩くような速度とは言え走ってきたのだ。  
そりゃあ、驚くだろう。

「あつ、ああ、大丈夫、はあはあ、これ、手紙、ぜえ、村長に……」  
「手紙を村長に渡せば良いんだな！よく届けてくれた。これは確実に村長に渡してやる……」

何か、勘違いしてる気がするけど、もうダメ……  
そして、俺の意識は闇の中に飲まれていった。

目が覚めるとそこは見知らぬ部屋だった。  
俺は元の姿でベッドに寝ていた。

「……」は？ああつ、隣の村か……」

知らない天井だ、とかやってみたかったが、思い付いたときには既に遅かった。まあ、またの機会にしよう……あるのかは知らないが。

コンコン

そんな益体のないことを考えているとノックされる。

「ここの人かな？」

そんな事を思いながら返事をする。

「はい、どうも」

「あら、お目覚めになっていたんですね、では失礼し「やっぱりダメ！  
ちよっただけ待ってください！」「……？分かりましたわ」



何も考えずに返事をしてしまったが、よく考えなくても今の俺は妖魔だ。こんな姿を見せたらどんな騒動になるか分かったもんじゃない。

俺は急いで人間の姿になる。

ズルウ！パキイ！メメタア！

ふっつ、どうも人間の姿になる瞬間は気分が良くない。

もう少しマシにならないものか……

さて、人間の姿になったし、あまり待たせ過ぎるのもマズイだろう。

「すみません、お待たせしました」

そう言いながらドアを開ける。

「あら、今度はいいのかしら？」

そう冗談ぽく言いながら入って来たのは、身形こそごく普通の村人といった感じだが、立ち振舞いの端々に気品が感じられる老いてなお美しく、しなやかな強さを感じさせる中年の女性だった。

「え、ええ、お待たせしてすみませんでした。えーと、あなたは？おつとすみません。私はレイという者でカタントの街で兵士をされてるグリアさんの弟子（予定）です」

「あら、これはご丁寧にどうも、私はこのエルゾ村の村長の嫁のシレイラですわ」

シレイラさんはそう自己紹介すると見とれてしまうような優雅で美しい礼をする。

どう見てもこんな村に居るような人間には見えない。

見とれていた俺にシレイラさんが

「さて、手紙の配達ご苦労様です」

「いえ、訓練の一環でしたから何の問題もありません」

「ふふふ、あなたが死にそうになりながら手紙を届けて下さるものだから昨夜は大騒ぎでしたのよ」

「あっ、それは……すみませんでした」

どうやら、俺は緊急事態をカタントの街から伝えにきた伝令で、着いた瞬間倒れるほど急いで伝えなくてはいけない緊急かつ重要な手紙を持ってきたと思われていたらしい。

実際には単に妖魔どっか行ったみたいだから交易再開します、という重要ではあるがさして緊急でもない手紙だったらしいのだが……手紙の中には俺がグリアさんに弟子入りした事と、この手紙を届ける事が課題である事、届けた時の様子を知らせて欲しいなどと言った事も書かれていたらしく、混乱はすぐに納まったらしい。

どうやら俺のせいでお騒がせしてしまったようだ。

「それにしてもグリアさんが弟子を取るなんて思いませんでしたわ」

「……？ そうなのですか？ 優秀そうな方なので弟子入りしたい人は多いと思うのですが？」

「ふふっ、そうですね、弟子入り希望の方はたまに居られますね、何せ

あの聖都ラボナで兵士長をされていたような人ですからね」

「えっ！ ラボナの兵士だったんですか！？ グリアさんは」

「あら？ お知りでなかったんですの？ その筋ではなかなか有名だったとか……」

まさかグリアさんがラボナの兵士をやっていた事があるとは思わなかった。

確かに凄い腕をしているな、とは思っていたが……

それにしてもそんな人が何故この街に戻って来たのだろうか？

……歳だろつか？

「でも、それだったら、弟子入りしたい人も多いと思うんですけど？」  
「あの人が取らなかつたんですわ、根性が足りないとか言ってる、ふ  
ふっ、あなたは認められたようですけどね」

「あっ！そつだ、時間が!？」

そこから先の話は早かった。

既に村長が手紙の返事を書いてくれていたので、それを受け取り、  
朝食を御馳走になり、すぐにエルゾの村を出立した。

帰り道は順調に進んでいった。

……ただ一つの問題を除いて

さて、課題は「隣の村まで行って手紙を渡して返事を受け取り  
帰ってくる事」

これは問題ない、しっかりと達成した。

そして、この課題には二つ条件が付いていたのだ。

一つ目は走っていく事、これも問題ない。

二つ目は明日の昼までに戻ってくる事、これだ問題なのは

昨日はだいたい2時ぐらいにカタントの街を出発して7時ぐらい  
に到着したらしい。

所要時間は5時間といった所だ。

で、エルゾ村を出立したのは9時、行きと同じぐらい掛かるとする  
と到着は2時ぐらいになってしまう。

このままでは時間に間に合わないのだ。

シレイラさんにこの事実を聞かされた時はどうしようと思ったが、  
シレイラさんがえらく楽しそうに

「大丈夫ですわ」

なんて言っていて

「是非、朝食も食べていってくださいませ」

とか誘ってくるものだからつい朝食までしっかり食べてしまった。  
ああ、絶対間に合わないと言頭を抱えているとシレイラさんが楽しそうに笑顔で、

「この道をまっすぐ行けばきつと間に合いますわ」

とか言うので間に合わないかも知れないと思いながらもシレイラさんが教えてくれた道を走っているのだ。

……結論から言おう、俺は余裕で間に合った。

到着したのは11時半ぐらいだった。

グリアさんに聞いてみると、

「そりゃ、遠回りな道を教えたからな」

としれっと言われてしまった。ちょっとイラッと来てつい襲ってしまいそうになったが、どうにか我慢した。

まあ、とりあえずグリアさんの課題もクリアし、俺はグリアさんの正式な弟子となったのだった。

## 妖魔の日常

ハアッ！

清浄な朝の空気を気合いと共に踏み込み木刀を降り下ろす。毎朝の習慣となった朝練だ。

グリアさんに弟子入りしてから既に一月の時が経った。

その間に俺はグリアさんに朝と夕方に指導してもらいながら昼はグリアさんの手伝いとして巡回や門番など治安維持活動をしていた。

そして、今日も朝も早くから朝練をしているという訳だ。

ツカン

そんな軽い音を響かせ俺の降り下ろしはあっさりと捌かれる。

そして、返す刀で体勢を崩した俺にグリアさんの木刀が迫る。

踏み込んだ足で無理矢理制動を掛けながら、体を捻る。

ヒュルン！

眼前を木刀が通りすぎて行く

避けられるとは思っていなかったのか、わずかには驚きを瞳映すグ

リアさん

チャンスだ！

そう感じた俺は崩れた体勢からさらに無理に腕だけで木刀を振る。

当然威力なんてないようなモノだが、それでも当てたい。

……何せ未だにかすらせたことすらないのだ

ブンッ！

胴狙いで木刀を振る。

しかし、グリアさんは全く慌てることもなくスツと後ろに下がり危なげもなく木刀を避けてしまう。

そのまま、体勢を完全に崩した俺に対して木刀を容赦なく、しかし怪我しない程度に手加減して打ち込んでくる。

「ツツ、参りました……」

「うむ、初めに比べればなかなか動きが良くなったな」

「はいっ……」

「……とは言え無理な動きが多すぎる、動くときは常に先を意識して繊細に動くんだ。いいか無闇に大きく踏み込む隙ができる。踏み込むなら避けられたら自分に負けぐらいに考えておけ、いいな？ 後、最後のはイカン、あそこからはどうやっても先に繋がらん、足掻くにしても次に繋がる様にしろ……」  
とは言え諦めるよりはよほど良いかな？

「はい……」

少し褒められたと思ったたらその数倍説教されてしまった……

とは言え一月前に比べれば大分指摘される回数は減った気がする。

最初は木刀の持ち方から、走り方、歩き方、ありとあらゆる事を矯正されたもんだ。

少しはマシになってるらしいけど、絶えず指摘されているから実感がないな……

「さて、もう一本行くぞ？」

どうやら休憩は終わりらしい。

グリアさんとの朝練はランニングから始まり、素振りを行い、そして先程のような模擬戦を朝食の時間まで続ける事になる。

今日も既に何度打ち据えられているが、さらに一本増えるらしい。

……いや、今度こそグリアさんから一本取ってやる！  
そう覚悟を決め、木刀を構える。

「はいはい、おじいちゃんもレイさんもそこまで！御飯の時間ですよ？」

いざ勝負！と気合を入れた所でかわいらしい女の子の声が朝練の終了を告げる。

グリアさんの孫のアリスちゃんが来たらしい。

アリスちゃんはこの街でも特別においしそ……可愛い女の子で皆のアイドルみたいな存在だったりする。

彼女はグリアさんの家の家事全般を司っていて、グリアさんも彼女を溺愛している。

ちなみに今俺はグリアさんの家でお世話になっているのだが、アリスちゃんに手を出したら殺す、と真顔で殺気付きで言われた。

正直、最初に出会って問い詰められて剣突き付けられた時よりもよっぽど殺されるかと思ったよ……

まあ、アリスちゃんが呼びに来たら朝練は終了と決まっている。と言つか呼ばれないとグリアさんが延々続ける事になるのだが……

それで、最初の日にあまりに朝練が延び過ぎてアリスちゃんに怒られたのは良い思い出……グリアさんのションボリした姿も見れたし

アリスちゃんの手作り朝食を食べ終え、仕事場へ向かう事にする。

「それじゃ、アリスちゃん行ってくるね」

「行ってらっしゃい、レイさん……あっそうだ、お弁当作ったんです。お昼に食べて下さい」

そう言ってアリスちゃんはお弁当箱を渡してくれる。

「ありがとうアリスちゃん」

「いえいえ、レイさんが来てくれてからおじいちゃんも生き生きしているのだから」そありがとうです」

「ニコッと可愛く笑いながらそう言うアリスちゃん

「レイ…何してんだ！さっさと行くぞ…」

「っと、そろそろ行かなくちゃね、それじゃあお留守番はよろしくね」

そう言いながらアリスちゃんの頭を撫でる。

「もー、子供扱いしないでください！……お仕事頑張ってくださいね」

子供扱いされてむくれているアリスちゃんに見送られて俺は仕事場に向かうのだった。

詰所に到着し当直の兵士に挨拶した後、更衣室で鎖帷子を着込み制服を着用しレザーアーマーを身に付け装備を整える。

ごく普通に怨恨から兵士が襲われたりするから準備を怠る訳にはいかないのだ。

……この街は比較的治安が良い部類らしいのだが、それでもこの程度らしい

装備を整えて詰所の方に戻ると今日は街の巡回をしてくれとの事だったので、さっそく街の巡回へと向かう。

巡回とは言っても実質単に歩いているだけだ。

たまに怪しそうな人物を見つけたら話を聞く程度で、それ以外は悪ガキどものケンカやら悪戯を止める程度だ。

先輩曰く、巡回するのは巡回してる兵士が居るかもしれないって思わせ、犯罪を自重させるるために行うらしく、別に特別な事をする必要はないらしい。

そんな事を考えながら商店街を歩いていると、



「あっ！レイ君、良い所に来たね！ちょっと手伝ってくれないかい？」  
「いいですよ、それで何をすれば良いんですか、雑貨屋さんのオネエさん」

雑貨屋を営んでいる中年の女性に呼び止められる。

ちなみにオネエさんと呼ばないと不機嫌になって買物がし辛くなったりする。

詳しくオネエさんに話を聞くと、旦那さんがぎっくり腰で動けないから、代わりに重い荷物を運んでくれないか？との事だった。

街の巡回の仕事の大半はこう言った住民の雑用を手伝う事だったりする。

こうやって住民と仲良くなる事が捜査の秘訣だと別の先輩が言っていたので俺もできる限り手伝うようにしている。

サクツと雑貨屋さんの手伝いを終わらせたがそれからが忙しかった。

犬が居なくなったのを探したりとか荷物を道路にぶちまけたの拾ったり、商人に道案内したり、いろいろ起こったのだ。

まあ、その度にお礼言われてお礼の品だと言っていろいろ貰ってしまったりするから、気持よく仕事できるのだと思う。

こう言った助け合いの精神があるこの街に最初に来る事ができて良かったとつくづく実感する。

この街に来る事ができたからこそ妖魔ではなく人間らしく生きる事ができているのだと思う。

そうこうしている内に夕刻を告げる鐘が鳴る。

今日の仕事はこれで終わりだ。

詰所に戻り、今日起こった事を軽く報告する。

報告とは言ってもラインさんが奥さんと喧嘩してたから後で酒場で荒れるかもとかそんな話程度だ。

そんな感じで報告し、グリアさんは既に帰ったらしいので更衣室で

着替えてグリアさんの家に向かう。

アリスちゃんに戻った事を告げた後、グリアさんに声を掛け木刀を持って裏庭に向かう。

夕方の訓練だ。

とは言え内容は朝連とさして変わらない。

精々朝練では体をほぐす程度しか行わない柔軟をじっくり行う事と、素振りに型稽古みたいなのが混じったり、模擬戦の時に如何すれば良かったのか問われたりする程度だ。

まあ、全体的に量が増えると思っとけば間違いない。

夕方の訓練を終え、夜

既に日は落ち闇の帳が街を覆っている。

一部の兵士などを除き住民の大半は深い眠りの中に居る。

いわゆる草木も眠る丑三つ時、そっと家から抜け出し、妖魔の姿で一件の建物を目指す。

修道院だ。

妖魔の優れた五感を活用し気付かれないようにカギの壊れた二階の窓を通り修道院に忍び込む。

そして、とある部屋の前で近くに人が居ない事を確認してそっと入る。

俺はその部屋の中にあつた一本のビンを手取る。

「……………」  
「……」  
「……」  
「……」

俺は忍び込んだ時と同じように気付かれないように注意しながら修道院を抜け出す。

そしてそのまま街の外へと向かう。

街の外、少し離れた森の中で俺は盗んできたビンを開ける。

漂ってくる濃厚で芳醇な血の匂いに俺は我慢できずに一気に中身

をおもる。

この街で暮らし始めて一週間も経っていない頃だっただろうが、俺は強烈な飢餓感に悩んでいた。

たまに街を歩いていてみると人がおいしそうに御馳走が歩いているようにしか見えなくなってしまう時があるのだ。

このままでは不味い、人を襲ってしまいかねないと思った俺は人間の物であれば何でもいいのではないかと考えた。

と考へ、もしかしたら病院ならば何かあるのではないかと考へたんだ。

そして、調べてみた結果この街には病院などないし、この時代には輸血用の血など置いていないという事が分かった。

しかし、修道院で簡単な治療ならしてくれるという話を聞いた俺は一応行ってみる事にしたんだ。

このくらいの大きさの街だと修道院は様々な要素を併せ持っているらしく、医者としての役割もその一つらしい。

そこで、俺は強烈に飢えを刺激される風景に出合った。  
瀉血だ。

瀉血とは血を抜く事で病状を回復させる治療法の事で、昔はありとあらゆる病気に対して行われていた治療方法だ。

アメリカ初代大統領ジョージ・ワシントンの本当の死因がこれではないか？と言われてたりする。

その瀉血を修道士が行っていたのだ。  
俺は血の匂いでつい襲いかかりそうになる身体を抑えながら尋ねたんだ。

取った血はどうするんですか？とね、そしたらいっぱいになったら適当に捨ててると言われてね、これは貰うしかないと思っただんだ。

その時はどうにか我慢して夜にその修道院に忍び込んだんだ。

あの時は我慢できなくてその場で開けて飲んでんだが、酒で泥酔したみたいに気分が昂って少し暴れちゃったんだ。

危なく見つかる所だった。

それ以降はこうして森の中でひっそり飲んでるって訳だ。

……それに血に酔ってる状態だと酷く乱暴な気分になってしま  
うから近くに人が居たら襲っちゃうまいそれで怖いんだよ。

まあ、どうやら今の所は血を飲んでおけば最低限飢餓感を抑えら  
れるから、定期的に修道院に血を貰いに言ってるって訳だ。

正規ルートで貰えば良いんだが、こつこつ街でそんな事をしてる  
なんて、噂が立ったら何されるか分かったモンじゃないから……

その後俺は妖魔の姿のまま、今日の訓練の復習を行う。

もし、戦いになって追いつめられれば妖魔として戦う事になるから  
だ。

妖魔の状態でも十分に動けなくてはグリアさんに訓練して貰って  
いる意味がない。

そう考え実は毎日夜中に抜け出して訓練してたりする。

妖魔になった最大の恩恵はこの無尽蔵に近い体力だと思う。

人間としては比較的ハードな日常を送った後、こつこつ訓練して  
睡眠時間がホンの2時間程度でも全く翌日に疲労が残らないのだから。

そんな事を思いながらも俺は訓練を続けるのだった。

## 少女の出会い

いつも通りの日常、

ようやくそう言える程度にはおじいちゃんとの二人暮らしに慣れてきた。そんな時の事だった。

おじいちゃんがあの人を、レイさん連れてきたのは私の生活はここ数年で大きく変わっていた。

始まりはお父さんの死だったわ。

妖魔に喰われたわけでも殺された訳でもなくあっさりと事故で死んでしまったらしいの。

お母さんが死んでしまう少し前にそう教えてくれたわ。

きっと、お母さんは自分が私を残して逝ってしまうことを理解していたのだと思うの。

自分が知っていることを時間の限り教えてくれたわ。

次の変化はお父さんが死んで、お母さんと悲嘆にくれていた時に、おじいちゃんが帰ってきてくれた事。

おじいちゃんは聖都ラボナで兵士を勤めていたのよ。

聖都を守るなんてスゴい仕事だよな

でも、怪我してしまって兵士として勤められなくなってしまったの。

それで、兵士を鍛える教官みたいな事をしていたらしいのだけど、お父さんの死を契機に戻ってきてくれたの。

こっちの方が街を守る役に立つ事ができるって教官みたいな事をこっちでもやるんだって言ってたわ

……おじいちゃんはラボナでは限界を感じたからだって言ってるけど、きっと私達の為、なんだろうな……

まあ、おじいちゃんが戻ってきてくれたお陰で暗く沈んでいた家中が少し明るくなったわ。

その次に大きな変化が起こったのは、おじいちゃんが居る生活に慣れてきて、ようやくお父さんの事を胸に納めておく事ができるようになった頃だったわ。

カタントの街で流行り病が猛威を奮ったの。

街の三分の一の人が倒れ、その内の半分の人と二度と会うことができなくなかった。

街から人通りがなくなり街は死んでしまったかのように静まりかえったわ。

そして、お母さんはその六分の一に入ってしまった。

お母さんは私にいろいと言い残し、泣きながらごめんね、と掠れた声で言ったわ。

そんなお母さんを抱き締める事も私には許されず、死に行くお母さんを見守る事しかできなかった。

お母さんが死んで泣きじゃくる私をおじいちゃんは優しく抱き締め、頭を撫でてくれたわ。

おじいちゃんとの二人っきりの生活、

でも、私はお母さんが死んだ悲しみに浸る事すらできなかったのよ。

おじいちゃんが家事を全くできない事が分かったからね。

おじいちゃんの料理はかろうじて食べられるものの、下拵えも何も考えずに適当にぶつ切りにして全てを鍋に突っ込んで煮込むだけで、甘い物と苦いものが微妙に混ざりあい、煮すぎて崩れた物と後から入れたためにまだ生の物があるという有り様だったわ。料理だけじゃないのよ？掃除をすればする前より散らかり、洗濯すれば服が破けるなどとても見ていられなかったわ。

それで、すぐに私が家事は全部やるようになったわ。

でも、それが良かったのだと思うの

ウジウジと悩む暇もなく忙しく家事をしている内に自然にお母さんの死を乗り越えられたのですから。

もちろん、今でもお母さんの死は悲しいわ、でもね、私は決して世界で一番不幸なんかじゃないの

だって、私はまだ生きてるんですから、流行り病では若い人も多く亡くなったわ、いえ、体力が無い分死んだ人は多かったと思う。

たくさんの人が死にたくないのに死んでいった、私と同じぐらいの年の子も居た。家族が全員死んだ子も、自分が死んでいく子も。

その中で私は死ななかつたし、おじいちゃんも居たのだから……

いろいろ問題も起こったけどおじいちゃんとの二人っきりの生活も軌道に乗ってきた頃、近くに妖魔が出たって話が出たのはそんな日の事だったわ

おじいちゃんは大丈夫だって言ってたけど、一人で出歩くなとか誰か訪ねてきてもらわなくなくて良いとか警戒していたわ

いつもはどこことなく寂しそうでつまらなそうなおじいちゃんがその時生き生きしていたように見えたのが印象的だったわ

やっぱり、おじいちゃんは戦う人なのだ、と思ったの

それで、それから数日街を封鎖していたのだけど、どうやら大丈夫そうだっていう事で門を開放したのよ

封鎖中は大変だったわ、食料品は売り切れだわ、街の人は殺気立ってるわで、すぐに封鎖が解除されて良かったと思うわ

街の人は妖魔はどこかに行ったのだろうと、もう安心していたけど、おじいちゃんだけは違ったわ

見た事も鋭い眼光で街の見廻りをして、門で入ってくる人のチェックも綿密に行っていたわ

警戒しすぎだって言われてたみたいだけどそれでもおじいちゃんは止めなかつたわ

それからすぐの事だったわ

おじいちゃんが突然男の人を連れて帰ってきたのは

私はとても驚いたわ

だって、今までおじいちゃんが誰かを家に連れてきた事なんか無い

のだから

話を聞いてみるとおじいちゃんに弟子入りしたって言うじゃない！

これも驚いたわね、おじいちゃん弟子を取る気は無いつて何人か追いつ返してたんだもの

その上、住む場所が無いから家に住むって言うじゃない、そう言う事はもっと早く伝えて欲しいわね、こっちだっている準備する事があるんだから！

でも、レイさんが良い人だったから助かったの、部屋の掃除とか自分で全部ささっとやってくれたから私がやった事はそんなに多くなかったの

レイさんが良い人だつて言う事はすぐに分かったのだけど私はレイさんが何故か怖かったの

ふふっ、笑ってくれても良いわよ？

今思えばそんな事ないって分かるのだけど、当時の私はレイさんが怖かったの

まるで、私と同じ人間じゃないみたいなのがしてたの

きつと、こちら辺では見ない黒髪黒眼に彫りの薄い顔をしていたからだと思っわ

レイさんとの共同生活が始まったのだけどレイさんは凄かったわね

家事全般をほぼ完璧にこなすし、私が知らない事をいっぱい知ってたわ

見た事もないけどとても美味しい料理を食べさせてくれたりもしたわね

そうやって少しずつ仲良くなっていったのだけどそれでも私はレイさんの事が苦手だったわ

不思議だけどレイさんが近くに居ると何か不安な気分になったのよ

今思うと……いえ、何でもないわ

とにかく共同生活は順調だったの



朝、おじいちゃんとレイさんが起きだして朝練を始めて、私が朝ご飯を作る。

私は、素振りをするレイさんが好きだったわ、目の前を見ているように何か遠くを指してひたすら愚直に木刀を振り続けるレイさんが、でもこれは別に恋愛感情ではない、と思う。

何か困難な目標に向かって届かないと分かっているのに進み続けている、そんな気がするの

朝ご飯を作っている最中についてじつと見てしまつて、何度かお料理をダメにした事もあったりしたわね

模擬戦でボロボロになりながら立ちあがるレイさんの姿を見て、急いで朝ご飯を完成させるの

だつて、朝ご飯ができないと二人ともずつと訓練しているのよ？信じられる？

朝ご飯ができたなら、タオルを二人分用意して呼びに行くの  
それで、軽く汗や汚れを拭いたら一緒に朝ご飯を食べるの  
皆で「いただきます」って言うの

これはレイさんの故郷の風習らしいわね、何でも食べる物に感謝するのだとか……

おじいちゃんがその精神を気に入ったらしく、食事の前の新しい習慣になったの

朝ご飯の間は静かなのよ

最初にレイさんが今日も美味しいねつて言った後、黙っちゃうのよね

レイさんもおじいちゃんもあまりしゃべらない人だから、話すのは私だけつて事もあるわ

まあ、そうか、とかそれでとか一言だけだつたりするのだけど……

食べ終わつたらレイさんが食器を片づけてくれるわ

来た最初の日からごく自然に片づけ始めてたわね、手際も良いしレイさんって一体どんな生活してたのかしら？

私はその間におじいちゃんとレイさんのお弁当を作るの  
それで、おじいちゃんとレイさんが家を出る時に渡すのよ  
おじいちゃんは無言で頷くんだけど、レイさんは笑顔でありがと  
うって毎朝言ってくれるのよ

おじいちゃん達が行った後は家事の時間よ

洗濯して、お掃除したら、あっという間にお昼よ

お弁当と一緒に作った私の分を食べたらお隣のサリーおばさんの  
家に行くの

サリーおばさんは機織りの達人で、私も教えて貰っているの

しばらく機織りをしながら他の生徒さんやサリーおばさんとお  
しゃべりしていると

いつの間にか夕方になってるのよね

時間って短いわよね？

夕方になったら解散でそこからそのまま買い物に行ったのよ

その日は良いお魚が安く売っていたからそれをメインにキノコと  
か野菜とか選んでいたの

そしたら何やら外が騒がしいのよね

気になったから様子を見に外にでたのよ

そしたら、急に引っ張られて気付いたらナイフを突き付けられてた  
のよね

驚きすぎちゃって私完全に固まっていたわ

そしたら兵士が何人か走ってきたのよ

その中にレイさんも居たわ

「なっ、アリスちゃん!? つく、貴様あ、その子を放せ!!」

「それ以上近づくなー!」いつがどうなってもいいのか!」

そう言っって犯人はナイフを私の首に近付けたのよ

ようやく驚きが抜けてきて、そしたら恐怖が込み上げてきちゃって

私絶叫しちゃったわ

「きゃあああああああああああ!!!」

でも、それが良かったみたいで、犯人の気が私に逸れた一瞬の隙を衝いて、レイさんがナイフを弾き飛ばしてくれたの

それで、そのまま私を犯人から取り返してくれたのよ

「怖かったね?でも、もう大丈夫だから」

そう言っってレイさんは私の頭を優しく撫でてくれたわ

その視線はとても優しく慈愛に満ちていたわ

でも、ちよつと待っていてね、そう言っって犯人に向き直った時にはその面影も無かったわ

鋭く怒りを秘めながら冷静な目で犯人を見ていたわ

逃げる事を諦めたのか怯えた様子で身形の良い紳士風の犯人は手当たり次第そこら辺にある物を投げてきたの

でも、レイさんはそれを避ける事もせず近づいて、一撃で伸してしまっったわ

「さて、アリスちゃん、大丈夫かい?」

そう問われたので頷きを返すと

一緒に詰所に行く?と尋ねられたので大丈夫と返す。

「そっか、じゃあ一緒に帰ろうか?」

そう言っって、犯人を他の兵士に任せると私を送ってくると告げて戻ってくる。

べつやら、一緒に帰ってくれるらしい

「私なら大丈夫なのに……」

「一応さ」

「そっか、じゃお願いしてもいいかしら？」

「謹んでお受けします、お嬢様」

そんな事をレイさんが言う物だから私は笑ってしまったわ

釣られるようにレイさんも笑っていたわ

それから家に帰って、おじいちゃんに怒られて、心配されたわ

ふふっ、それで、レイさんが守ってくれるわって言ったらおじいちゃんったら不機嫌そうな顔で黙るのよね

それで、ならいいって言って去るうとするから、おじいちゃんも守ってくれるでしょ？って聞いたたら、当然だって少し赤い顔で言ってくれたの

この日から私はレイさんを本当の意味で家族だと思えるようになったのよね

それまではお客さんだったのが、居るのが当然の家族になったの

……あんな秘密を隠してるとは思ってもみなかったけどね？

## 妖魔と秘密と少女

「おい、皆聞け！こいつは妖魔だ！俺は見たんだ！昨日のよる妖魔と  
なったコイツを!!」

「な、なに!?!」

広場に今までの活気あるざわめきとは別種の不安や不信を含んだ  
ざわめきが広がっていく、

俺は今日の前の汚い身形で不潔そうな中年男に弾劾されていた。

突然の事だった。

いつも通り街の巡回をしている最中の事だった。

広場に入り、何も異常がない事を確認していたら突然男が大声を上  
げたんだ。

俺が妖魔だ、と

俺が驚いて固まっている間、男は俺を弾劾し続けた。

修道院に入っていく妖魔を見たとか、こいつの部屋から妖魔が現れ  
たとか好き放題言っていた。

問題はその全てが真実である事だろうか？

十分に気を付けていたはずなのにいつの間にか慣れて気が抜けて  
いたのだろうか、俺はコイツの存在に全く気付いていなかった。

とは言え、今更何を言っても遅いだろう。

「それで、俺が妖魔だって言う証拠はあるのか!?!」

「な、証拠だあ？俺が見たって言ってるだろうが!」

「……それは証拠とは言わんど、第一俺が妖魔だとして、おっ！認めん  
のか!?!……仮定の話だ。続けるぞ妖魔によるものと思われる死者何  
か出てないぞ?」

俺が言えるのはこれしかないだろう。

妖魔に襲われた人が居ない、すなわちこの街に妖魔は居ないという

結論に持って行くしかないだろう。

実際にコイツは見たんだろうし、その点で張り合ってもどうしようもないだろう。

それにどうやら聴衆は俺の味方らしい、俺の意見に同調してくれる人が結構いる。

「それにだ。修道院に入って行ったとか言ってたが、何しに行ったって言うんだ？……まさか、神様に祈りにでも行ったって言うのか？」

「そ、それは、知らねえよ、妖魔が何してるのか何か俺が知る訳ないだろ!？」

「ほう、修道院から何も訴えは出てないし、被害も出てない。きっと何かを見間違えたんじゃないか？第一どうしてお前はそんな所に居たんだ？」

「……そ、それは……」

「おい!!この騒ぎは一体何だ!」

思いのほか簡単に言いくるめられそうなので俺は内心安堵しながらさらに追撃を掛けようとしていたら、

集まっていた聴衆を掻き分けグリアさんが現れる。

突然この男が俺が妖魔だと言いだしたから被害も出てないし見間違いだらうと反論していた所だと正直に告げる。

正直ここでのグリアさん登場はあまり嬉しくないのだが嘘をついて後でバレたらさらにマズイ事になるだろう。

「レイ、こいつの事知ってるか？」

「いえ、記憶にありません。おそろくどこかで捕まえた犯罪者ではないかと」

そんな話をしていると聴衆の中の一人が大声で言う

「そいつ知ってるぞ!詐欺師のベンだ!確か先週捕まったとか聞いた

ぞ！」

「……そう言えば、先週そんな奴を捕まえたな……と言つ事はこれは逆恨みって事か？」

「……クツ、そ、それでも俺は見たんだ！コイツの部屋から妖魔が出てくるのを!!」

分が悪くなつた男が喚くがグリアさんに一睨みされて黙る。

「こつ言つ威圧感ではグリアさんには絶対勝てないと思う。」

それにしても先週捕まえたのは身形の良い、清潔感溢れる紳士だったような気がするのだが、一週間でここまで落ちぶれたのだろうか？

グリアさんが俺の方に向き直り静かに尋ねる。

「……で、レイ、お前は妖魔なのか？」

「いいえ、違います」

嘘をつく事に罪悪感を感じるが、ここで正直に言つ事はできない。

じつと、俺を見つめてくるグリアさんに俺は視線を逸らさず見つめ返す。

罪悪感から視線を逸らしてしまいそうになるが、そこは根性で我慢する。

……もし俺が妖魔だとバレたら、俺はどうなっても仕方ないと諦めもつくが、下手したらグリアさんやアリスちゃんにも迷惑を掛ける事になってしまうかも知れないのだ。

「……そうか、おい詳しい話は詰所で聞かせて貰おうか？」

「な、つ、捕まえるべきは俺じゃねえ、この化け物だよ!!」

「そこら辺も含めて詰所で聞いてやるから大人しくしろ！」

そつ言いながら男を連れていくグリアさん

「レイ！お前は巡回に戻りな！」

最後にそれだけ言い残しグリアさんは去っていった。  
残された俺に街の人達は災難だったな、とか俺は信じていたぞ、と  
か声を掛けてくれる。

それにそれぞれお礼を言った後、俺は巡回の仕事に戻るのだった。  
しかし、心の中は先程の事が重く押し掛かってくる。

「……俺はここには居られないのかな……」

そう小さく呟く

頭に浮かぶのはこの街に来てから出会った人達の事だ。

グリアさん、アリスちゃん、このまま俺がここに居たら迷惑掛ける  
かも知れない、

でも、それでも俺はここに居たいんだ。

ここに居たいそれがワガママなのだろうか？

ワガママなのだろうな……

それにさっきの男だ。

もし俺が居なければあんな事はしなかっただろうし、もしかしたら  
捕まる事すらなかったかもしれない。

そういう意味では良くも悪くも彼の人生に、人の人生に関わってし  
まっているのだ。

「……考えても仕方ない、か」

その日はそんな感じで仕事にならず、日課の訓練もそんな状態で  
やっても身に成らないと言われて休みになり夜になった。

さすがにあんな事があったからあまり外に出るべきではないと理  
性では分かっているのだが、無性に全力で身体を動かしたかった。

木刀を持って、街の外の森へと向かう。

いつもと違い人間の姿でゆっくりと歩いて行く、見つかったらどう  
しようと思いながらも歩みは止まらない。



結局誰にも呼び止められる事もなくいつも訓練をしている場所へと辿り着く。

無心で木刀を振り続ける。

ザワザワ

風が木々を不気味に揺らす。

そんな中俺はひたすら木刀を振っていた。

足りない

そんな事を思いながら妖魔の姿へと変化し今までと同じように、いや先程までよりも速く、重く、鋭く木刀を振る。

ヒュンッ、ヒュンッ

夜の森の中、俺が木刀を振る音だけが静かに響いていた。

バキッ！

不意に何かを踏み割ったような音が響く、誰がいる！

俺は自分の油断を後悔しながら声を上げる

「誰だ!?居るのは分かっているー出てこい!!」

周り全てを警戒する。

音がした方向だけに人がいるとは限らないからだ。

そして、同時にどう対処するかを必死で考える。

見られたらどうか、いや見られたと思うべきだ。

人の姿に戻るべきか？やめておいた方がいいだろう、今ならまた野良の妖魔だと思わせられるかもしれない。

いつその事……ダメだ、それは最終手段だ。

ガサガサ

人影が近くの茂みの中から現れる。  
現れた人影は小さい少女の物だった。

「!? なっ、アリスちゃん!？」

「……やっぱりレイさん何ですね？」

疑問の形ではあったがアリスちゃんは確信を持ってそう言う。  
どうやら、想像を超えた事態が起こっているらしい。

「……俺はレイなんかじゃない、って言っても信じてくれそうにない  
ね」

「はい、レイさんは……妖魔だったんですか？」

「……」

「……」

沈黙が痛い

……否定は無駄か、どうやらここが潮時らしい  
誤魔化す事もできそうにないし、アリスちゃんをどうにかする何て  
考えたくもない。

本能が襲えと言ってきたとしても、俺は絶対にアリスちゃんを  
襲う事はしない、したくない。

なら、解決策は一つだろう、俺がこの街を去れば良いのだ。  
グリアさんやアリスちゃん、街の人達と過ごした充実した時間が思  
い出される。

涙が溢れそうになるが必死で我慢してアリスちゃんに別れを告げ  
る。

「驚いたかい、俺が妖魔で、怖ろしいだろ？大丈夫だ、すぐに居なくな  
るから、いまさらだけど今までありがとう、楽しかったよ」

それだけ言い残し俺はアリスちゃんに背を向け立ち去ろうとする。

トットトットツ、ガシッ

不意に後ろから抱き締められる。

アリスちゃんが俺を抱き締めてくれているらしい。

「……馬鹿な事、言わないで下さい、これでさよならなんてイヤです  
！」

「……でも！」

「でも何もありません、レイさんは妖魔でした。でも妖魔でもレイさんのままでした！ひたすら愚直に剣を振る真面目で傷つきやすい、そんな人のままでした！」

「……アリスちゃん……ありがとう」

「レイさん、せっかく知り合えたのにこんな所でさよならはイヤです  
！」

「……俺はここに居ていいのかな？」

「居て下さい、レイさんの居場所はここです、他の場所何かに行かないで下さい！」

俺はホロホロと静かに涙を流しながら、アリスちゃんを抱き締める。

アリスちゃんが俺を先程よりも強く抱き締めてくれる。

妖魔として目覚めて二カ月弱、俺はどつやらここで生きていて良いらしい。

## 妖魔と殺人事件

妖魔ではないかと疑われ、アリスに妖魔である事がばれてから早1年が過ぎた。

最初の方こそ、いつ自分が追い出されるのかとか、いつの間にか自分の正体が街中に広まっているのではないかと疑っていたが、そんな事は全く起こらず変わらぬ日常が続いていた。

変わった事と言えば、アリスとの距離が近くなった事だろう。

とは言え表面上はあまり変わらない、せいぜい、俺がアリスと呼び捨てにするようになったり、アリスがレイお兄ちゃんと呼ぶようになった程度だろうか？

……ああ、急に呼び方が変わった所為でグリアさんが俺の事をジトツとした目で見てたな、しばらくしたら元に戻ったが……

アリスは俺が妖魔である事を知ったにも関わらずほとんど態度が変わらなかった。

これには俺の方が戸惑ってしまった。

だってそうだろう？

家族と思っているような人が実は人を喰う化け物だったんだ、裏切ったあの言われても仕方ないと俺は思う。

それなのにアリスは責めるどころか慰めてくれたのだ。

アリスが幼いというのは理由の一端ではあるだろうが、アリスが優しいのだろう。

……俺の様な化け物を受け入れてしまう程に

まあ、そんなこんなで俺はもう手に入れる事ができないのではないかと思っていた何でもない日常を生きる事ができている。

一度失い、また失うかとも思った、このいつ崩れるかも分からない崩れやすい日常、だからこそ俺は全力で生きていた。

そして、今日もまたいつも通りの日常が続いてくれと祈っていた。

……生憎、神様は俺が嫌いらしい。

俺は今分厚く頑丈そうな石とこれまた太く頑丈そうな鉄柱に囲まれた部屋、いわゆる牢屋と呼ばれる場所に居た。

「……はあ、何でこんな事になったんだか……」

ぼやいてみるが、何が起こったかなんて分かっていた。何せ自分から牢屋に入るって言ったのだから

あれは、今日の昼頃だった。

そろそろお昼にしようかな？なんて詰所で待機しながら思っていた時の事だった。

太った中年のおばさんが青い顔をして詰所に飛び込んできたのだ。宿屋を営んでいる……確かバーバラさんだっただろうか？

宿屋と言うのはこの街の中で酒場に次いでかなり問題がよく起る場所だし、何か事件でも起きて、その対処を頼みに来たのだろう。とは言え顔色が悪いから面倒な事になりそうだな、これは昼食いそびれたなとか俺は呑気に思っていた。

その時はそんな程度の認識だった。

まさか、街中が大騒ぎになって俺も追いつめられるような大事件だとは思ってもみなかったんだ。

「大変なんだよ！はやく来ておくれよ、人が私の宿屋で！血の中に倒れてるんだよ！それで机が壊れてるんだよ！アルタラ産の高いヤツなのに、何だかね腹が搔つ捌かれてて、中がね、大変なんだよ！とにかくいいからはやく来ておくれよ！」

「まあまあ、落ち着いてください」

混乱して捲し立てるように話すバーバラさんの話をまとめてみると要は客の一人が殺された、そう言う話らしい。

俺と詰所で待機していた他の兵士はバーバラさんに水を一杯渡して落ち着かせ改めて話を聞き、現場の宿屋へと急行した。

そこは既に野次馬で囲まれており、巡回中に駆け付けたらしい兵士が宿屋の中に野次馬を入れないように立っていた。

どうやら、周りにいたほぼ全ての兵士が集まっているらしい。

バーバラさんの話を聞いたりした関係で出遅れてしまったらしい。

俺達は野次馬を掻き分け、その兵士に声を掛ける。

「お疲れさん、中の様子はどうなってる？」

「今、中で隊長とグリアさんが仏さんを見ています。」

そう言つと、周りに聞こえないように声を抑えながら

・

「……………どうやら妖魔が出たみたいです」

そう告げる。

俺は動揺をどうにか抑えながら詳細を尋ねるがどうやら知らないらしく、グリアさんに聞いてくれと言われてしまふ。

宿屋に入ると中では隊長とグリアさんが何か深刻そうな顔でヒソヒソと話し合っていた。

ときおりありえん！とか馬鹿な！とか隊長が声を荒げている。

「隊長、グリアさん、状況はどうなっているんですか？」

「レイか……………言葉でどう言ったって仕方ねえ、とりあえず見て来い……………覚悟だけはしけおけ」

それだけグリアさんは告げると二階を指さす、どうやら現場は二階らしい。

それにしても1年以上もこの仕事をやっている俺に対して入ったばかりの新人にするような警告をするとは、よっぽど現場は酷いのだらう。

二重の意味で覚悟を決めなければいけないようだ。

一つはもちろん悲惨な状況を見る覚悟、

そしてもう一つはおそらく飛び散っているであろう美味しそうな死体に飛びつかない覚悟だ。

この仕事で初めて死体を見た時はついフラッと食べに行きそうになっってしまった。

その時の行動を若干不審がられたが、初めて死体を見て衝撃を受けたのだからと判断されたから良かったが危うかった事は間違いない。

正直真剣に転職を考えたものだ。

……結局、この仕事を続ける事にしたのだが階段をゆつくりと上がり、現場を見に行く。

現場からは美味しそうな血の匂いが漂っていたため簡単に見つかった。

無惨だった。

部屋に入ると惨状が目に入る。

同時に五感全てが旨そうだ、喰えと訴えかける。

頭は惨いと思い、身体は旨そうだと感じる。

何回体験しても身体と心の不均衡が不快だ。

部屋中に飛び散った血、壊れた家具、そしてその中心におそらく男であろう死体があった。

断定ができないのは頭を挽ぎられたあげく顔が潰され、腕や足も潰され、腹の中の詰め込まれているため、人相どころか骨格すら判別する事が難しかったのだ。

「お前さんはこの惨状をどう判断する？」

一緒に現場に上がってきたグリアさんが俺に対してそう問う。

俺はその問いかけに対して、もう一度今度はじっくりと観察する。

死体を見るだけでおぞましく、そして食欲をそそられるが、我慢して観察しているといくつかの事が分かる。

「おそらく犯人は最初に被害者を殺し、その後に死体を弄んだのではないでしょうか？この離れた位置にある頭部を見て下さい、身体と頭部の位置から判断するにまず頭部を切り落とした物と考えられます。また頭部が潰されていますが、この傷跡から見ると殺された後に付けられた傷の可能性が高いと思います。ある意味被害者にとっては幸いだったのではないのでしょうか？……何の慰めにもならないですが……」

この無惨な状況に何の意味もない言葉をつい付け足してしまふ。  
グリアさんは何も言わず黙って先を促す。

再び観察していく……どうも、明らかに死体の量が足りない。  
……なるほど、わざわざ持ち去る訳がないから妖魔が喰ったのだらうと考えたのか

「……死体の量が明らかに足りません、特に内臓が……この事から犯人は妖魔もしくは妖魔の被害であると偽装しようとしていると考えられますが、おそらく妖魔です」

「……やっぱりお前もそう思うか……」

やはりグリアさんはこの殺人事件が妖魔によるものだと判断しているのだらう。

……その推測はおそらく当たっている。

傷口の断面が粗いのだ、まるで力任せに挽ぎ取ったかのように……  
そんな事がただの人間にできるとは思えない。

そして、最大の理由はこの部屋から臭ってくるのだ、同族の臭いが！

そして、一つ言えるこの犯人は俺が絶対に捕まえなくてはならない。  
い。

もちろん許せないと言う思いは強いが、理由はそれだけではない。

このまま犯行が続けばクレイモアを雇う事になる。

それは、この日常が終わる事を意味するだらう……



だから、自分のためにもこの事件の犯人を俺が捕まえなくてはいい  
ない。

そう、俺は静かに決意を固めるのだった。

## 妖魔と殺人事件

妖魔によるものと思われる殺人事件が発生して一日

俺は他の兵士と共に詰所に戻り情報の整理を行っていた。

会議には事態を重く見た隊長によって町長を含む何人かの有力者が集まっていた。

俺はグリアさんに一番死体の事をよく把握できていた、との理由から有力者への説明役を任されていた。

一方、有力者達は信じられないといった風な顔で会議に参加していた。

かろうじて町長は積極的に議論に参加し意見を述べていた。

とは言えその意見の端々に妖魔であって欲しくないという意思が垣間見えていたが……

「……犯人は普通の人間には不可能な方法で被害者を殺害しています。」

「……待て、それは絶対に人間には不可能なのか？道具を使えばできるんじゃないか？」

町長が疑問を投げかける。

「確かに不可能ではありませんが、かなりの大きさになると推測され現段階で発見できていないためその可能性は低いと判断しております。」

「また、人体の一部―主に内臓―が遺体には存在せず、我々は喰われたと判断しています。」

「何らかの理由で持ち去った可能性は？」

再び町長が疑問を投げかける。

「……内臓はきれいに無くなっていました。そこまでして内臓を持ち去る理由があるでしょうか？もちろん私には想像もつかない理由から持ち去る可能性もあるため調査は続行しています」

俺がそう告げると有力者達は各々呻き声を上げたり、ヒソヒソと近くの人物と話し合うが。特に異議は出なかった。

「……それではこの事件の犯人は妖魔である可能性が高いと言う事でもよろしいでしょうか？」

議長役を務めていたグリアさんがそう締めくくる。

「待った！我々はどうすればいいのだ!?それにいつその犯人は捕まるんだ！」

有力者の一人がそう叫ぶように言う。

そつだそつだと他の有力者達も頷いている。

どうやらようやく妖魔がこの街に居る事を認めだが、今度は自分の身の安全が気になり始めたらしい。

黙って議論を聞いていた隊長に視線を投げると、隊長が一つ頷き、立ちあがり言う。

「皆さん、落ち着いてください。犯人は我々が全力を上げて捕まええます。皆さんはいつも通りの生活を行ってください。大丈夫です。皆さんは我々が守ります」

隊長の自信有り気な言葉に有力者達はとりあえずの落ち着きを取り戻す。

とは言え皆不安そうな表情を隠そうともしない。

今回黙ったのもまだ妖魔と確定していない事と自分の身が危険であると言つ実感がないからだろう。

事件が続けばすぐに暴走を始めてしまう事は目に見えていた。

とは言え隊長には一応の目処が立っているようだった。

宿屋の客がまず襲われた事から、妖魔は街の外からやってきた可能性が高く、宿屋の宿泊客や関係者に化けている可能性が高いと踏んでいたのだ。

それから数日後、事態は最悪の方向に進展を見せる。

新たな被害者が出たのだ。

被害者は路地裏に住んでいたと思われるホームレスの男だった。

俺達はその殺人が行われた事を全く察知する事ができなかった。

全力を上げて関係者を尾行していた事が裏目に出てしまったのだ。

この事件が発生した事で宿屋の関係者は全て白である事が確定したのだった。

同時にこの事は容疑者が全く分からなくなった事を意味していた。

俺はこの結果を当たらないで欲しいと願いながらもある程度予想していた。

取り調べの最中に関係者全てと会ったが誰からも妖魔であるという気配を感じる事ができなかったからだ。

俺はこの事が自分に妖魔を感知する能力が無い所為、または相手の妖魔が隠れるのがうまいためであると判断していたのだが、残念ながら外れてしまったようだ。

さらに2件目の事件が発生した時、俺は比較的側に居た筈なのに全く察知する事ができなかった。

これは俺の妖魔を察知する能力が低い事を意味しており、これからも何事もなく生き延びていく事が困難である事を示していた。

妖魔の気配が察知できないと言う事はクレイモアや覚醒者の気配を察知する事も困難である可能性が高いからだ。

発覚した事実には俺の気分は落ち込んでいたが、今は落ち込んでいる場合ではなく、どうにかする手段を考えなくてはいけなかった。

事件が再び起きてしまったからにはクレイモアを雇う可能性が高くなったと言つ事だからだ。

さらに数日、捜査に進展はなく

確実に迫るタイムリミットと見つからない手掛かりに俺は苛立っていた。

そんな俺を気遣ってくれたのか、長期戦になりそうだから、と言つ理由の下、家で休息を取っていた。

とは言え気持ちばかり焦ってしまい、ろくに休む事もできずにリビングで酒を飲んでいた。

「クソっ！」

思いつきり机を叩くが、手が痛くなるだけで何も起こる事はない。

……いや、どうやらアリスを心配させてしまったらしい。

アリスが静かに近寄って来て俺の隣りに腰を下ろす。

「レイお兄ちゃん……大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

俺はそう答えるがアリスは全く信じていないようだ。

実際、俺は追いつめられており、このままでは近いうちに崩壊する事が分かっているためとても大丈夫とは言えない状況なのだから、アリスには嘘が通じないらしい。

「……レイお兄ちゃん、どこか行っちゃっの？」

不安そうにアリスが囁く

俺は黙って安心させるようにアリスの頭を撫でながら言う。

「大丈夫だ。俺はどこにも行ったりしないから、必ず犯人は捕まえる

から」

アリスの頭を撫でながら俺は改めて決意を固める。

この日常を失ってなるか、と

そんな俺の様子に少し安心したのかアリスは微笑んで、じゃれついてくる。

俺はしばらくそんなアリスとじゃれたり他愛のない事を話したりする。

不意にドアを叩く音がする。

誰だ？

この家に訪ねてくる人は少ない。

元から少なかった上に今では、人の口に戸は立てられず妖魔が出ると言う噂が広まっているためやってくる人など居ないと言っている。

警戒しながら、玄関へと向かい、誰何する。

「……誰だ？」

「兵士のセネルです。町長達と呼んでいるので呼びに来ました」

声の主は同僚の兵士の物だった。

町長が呼んでいると言う事だったが、また何か説明して欲しい事でもあるのだろうか？

そんな事を思いながら、アリスに用事ができた事を告げ出かける。

確か町長達は今日も無駄な会議を行っていたはずだ。

そう思いセネルに確認してみると会議場に向かって欲しいと告げられる。

会議場に到着すると会議場にはおかしな雰囲気を感じていた。

一見すれば静かなだけなのだが、何か狂気を感じるのだ。

何かイヤな感じを受けながらも入らない訳にもいかないので入室する。

入室した瞬間に部屋に居た全ての人間の視線がこちらを射抜く。  
その事に動揺しながらも俺は

「……兵士レイ、やって参りました。御用との事ですが何かあったの  
でしょうか？」

そうやってきた事を告げる。

部屋の中にはギラギラとして僅かに狂気を感じさせる目をした有力者達と、悔しさからか俯いているグリアさんと隊長が居た。

「……………」

イヤな圧迫感のある沈黙が続く、少しでも物音をたてた瞬間全てが崩壊しそうな、そんな痛い沈黙

沈黙に耐えきれなかったのかグリアさんが苦悩に歪んだ顔で俺に  
対して告げる。

「……お前さんが妖魔であるという疑いが掛かっている」  
「なっ!?!」

グリアさんの言葉を契機に爆発したかのように他の人物も一気に  
声をあげ始める。

「お前が殺したんだろ!?!」

「まさか、兵士の中に妖魔が居るなんて……………」

「この人殺し!」

「知ってるぞ! お前が妖魔だって弾劾した相手を捕まえた事を!」  
「権力を使ってもみ消していたのか……………」

俺に対して罵声が浴びせられる。

だが、少しだけ状況が分かってきた。

要はこの人達は、俺が妖魔なのだと言っ事にしては安心したいのだろっ。

その標的として俺は選ばれてしまったのだろっ。

最近この街に住み始めたよそ者で、ちよっど妖魔じゃないかと言っ疑惑を掛けられた事のある俺がちよっど良かったのだろっ。

そして、この流れをグリアさんや隊長は止めよっとしたが力及ばずと言った所だろっ。

まさか、このタイミングとは思っていなかったが、街中の人から責めらる可能性は考えていたから、思いのほか冷静さを保ててはいる。しかし、想像以上に心が痛い。

守ってきた人から拒否される、その事がこんなにも心にクル事だとは俺は思っていなかった。

幸いグリアさんを含めごく少数ではあるが、俺を気遣っってくれる人がいる事が救いだろっか……

俺に対する罵声はどんどんエスカレートしていく、今ではどうやって見せしめにするのかまで話が進んでいた。

このままでは俺は殺されてしまっ。

グリアさんもそう思ったのか議論を止めよっど動きだそうとしてくれていたが、俺が止めるよっに目配せをする。

ズダンッ!!

俺は目の前の机をブツ叩く

突然響いた音に今まで激しく罵っっていた者達が驚き動きを止める。

その隙に俺は声を張り大声で宣言する。

「黙れ!!俺はお前達が安心するために無駄死にするつもりはない!!」

その剣幕に押されたのかほとんどの人間が黙る。



「では、キャンセルというのだー」

町長が一瞬で動揺を抑え問いかける。

俺は一気に普通のトーンに声を戻し答える。

「要は安心できればいいのでしょっつ。」

そう言っつて見回すと、何人かが頷いている。

……正直な事だ。まあ、下手に意地を張るよりよっぽどマシだが

「私は今から牢屋に入ります。そして、24時間監視することにすればどついでしょっつか？」

俺はそう提案する。

動けなくなるのは痛いけど、それ以上にここで暴発されても困るのだ。

もし、俺が殺されてしまえば、おそらく妖魔の姿に戻るだろう。

そうなれば、全く問題は解決していかないにも関わらず安心してしまっただろう。

それはアリスやグリアさん、お世話になった皆を危険にさらす事だ。

そんな事は避けなくてはならない。

ならば、ここで俺が牢屋に入るといふ提案が一つの妥協点だと考えられる。

俺が捕まっている間に新たな殺人事件が起これば俺は無実と判断されるだろう。

クレイモアを呼ばれる可能性も高いが、そこは賭けるしかない……  
そして、ざわざわと有力者達が話し合った結果、町長は

「この者を牢屋に連れていけー」

そう兵士達命じられた。  
そして、俺は自らの意思で牢屋に閉じ込められる事となったのだ  
た。

## 妖魔と殺人事件

賑やかだった街を恐怖のどん底に叩きこんだ連続殺人事件、それは妖魔による犯行としか考えられないものだった。

被害者が宿屋の客だった事から犯人は当初旅人の可能性が高いと考えられていたが、全員の潔白が証明されてしまう。

信用を失う兵士達、そして暴走し始める有力者達、そんな彼らに妖魔の嫌疑を掛けられた俺は身の安全を確保するために牢屋に入る事を自ら提案したのだった。

こうして牢屋に入る事になったが、正直やる事があまりない。

せいぜい今までの事や事件について振り返るぐらいしかやる事がない。

こうして久方ぶりに落ち着いた時間を持てたのはいつ振りだろうか？

この街に来てはや1年と少し、思い返してみると常に全力疾走していた気がする。

初めの頃は、殺される恐怖や迫害される恐怖から逃れるために我武者羅に強くなるうと訓練ばかりだった。

その成果も出始めた頃妖魔である事がバレかけて、アリスとの距離が近づいた。

それからだろう俺がこの街を真剣に守りたいと思うようになったのは

それまで兵士をやるのはグリアさんの勧めと実戦経験を少しでも積みたいと思ったからだだったが、あの事件からはこの街が俺の第二の故郷だと思えるようになったんだ。

そんな大切な街が今危機に瀕している。

どうにかして事件を解決しなくてはならない、俺には事件を解決し得る力があるのだから……

事件について思索を続けて1日程

じつくりと時間を掛けて事件を思い出ししていく、

ほんの些細な事でも追及していく……牢屋の中だから大した事はできないのだが、御蔭で事件の輪郭と本質がはっきりしてくる。

その中で気づいた事がある。

俺が牢屋に入る事になった会議だ。

会議場に入る時、俺はイヤな感覚を感じた。

当時、俺はそれを妖魔だと疑っている事による会議場の中に居た人達のプレッシャーだと思っていたのだが、

よく思い出してみると俺は他に良く似た感覚を知っている。

つい最近感じた物だが、あまり頼りにならない上に滅多に感じない感覚、そんな物がこの場で感じられる訳が無いという先入観

そうした物が合わさって気付かなかったのだろう。

……あの感覚は妖魔による物だろう。

ならば結論は単純だ。あの会議場には妖魔が居た。

あの会議場にいたのは町長、隊長、グリアさん、街の有力者達、全部で15人ほど、この中に妖魔がいる。

あの時は入ってすぐに入口の側で糾弾されたから近づかなかったが、もう少し近づけば分かるはずだ。

……問題はせつかく犯人が絞り込めたのに動けない事だろう。

残念ながら隊長やグリアさんも容疑者に入っている事から安易に協力を要請する事も憚られる。

最低でも伝言では無く直接会って確認した上で協力を要請しなくてはいけないだろう。

と言う事は話を信じてくれそうなグリアさんにここに来て貰わなくてはならない。

グリアさんならいずれ来てくれるだろうが、できるだけ早く伝えるべきなのだが……

どうやって来て貰うか？

単純に監視している兵士に呼んでいたと伝言して貰うか？

……それで大丈夫だろう、妖魔は成り済ましているだけで単独のは

ずだ。

そんな事を考えているとどこからか小さく壁を叩く音がする。

「…………誰だ？」

監視に気付かれないように静かに問いかける。

「私よ、アリス」

「アリス？ どうしてこんな所に…………」

どうやらやって来たのはアリスだったらしい。

声が聞こえたのはこの牢屋唯一の光源である出窓の方向だった。

アリスは出窓の外から声を掛けていているらしい。

ちらりと自分を監視している兵士の方をみるが、二人でトランプを置いて全く気付いていないらしい。

…………同僚としてその態度はどうかと思うのだが、今回は助かった。

ゆっくりと監視に気付かれないように出窓の方向に移動する。

とは言え逃げ出そうと思っていると勘違いされても困るので、怪しくない程度に外をちらりと覗く。

外には修道院とその墓地、そしてアリスの姿が見える。

手を軽く振り、いつまでも外を見てたら怪しいので声が聞こえやすい位置に移動し、床に座り込む。

「…………どうしてって、レイお兄ちゃんが心配だったからに決まっているでしょ」

「……………そうか、ありがとうアリス、でも心配はいらないよ、すぐに出る事ができるから」

そう俺が言つとアリスはそう、とだけ小さく答えて何か逡巡しているような雰囲気ですんでしまふ。

そんなアリスに声を掛けようと口を開きかけた時、アリスが言う。

「……ねえ、レイお兄ちゃん、本当にレイお兄ちゃんじゃないんだよね？」

僅かに泣きそうな声で絞り出すようにそうアリスは言う。

……そうか、アリスは俺が妖魔だって事を知っている。

もしかしたら俺が……何て事をずっと不安に思っていたのだろう。

それなのに家ではそんな不安を感じさせる事もなく俺の事を氣遣ってくれていた。

俺はできるだけ優しい声でアリスに言う

「大丈夫、俺じゃない。犯人は別に居る。……それに食べちゃいたいぐらいかわいいアリスが無事なんだから、俺じゃないよ」

最後は冗談めかして言ったが自分の本心だ。

まだ、人間の側に立っているが、もし妖魔となってしまうたらきつと一番にアリスを襲ってしまうだろう。

……冗談めかしたとは言え俺の本心だ。これでアリスが俺を嫌ってしまっても仕方ないだろう。

自分でもいつアリスを襲ってしまうのか分からないのだから、悲しいがアリスの安全を考えれば嫌ってくれた方が良くとさえ言える。

「ふふふっ、もうレイお兄ちゃんったら、かわいいなんて、恥ずかしいじゃない」

アリスはそんな事気にもしていないようだった。

その様子に俺は心の底から安堵する。

アリスにとって良くはないと理解はしているが、俺にとってアリスは既に居なくてはならない人物なのだ。

「……本心なただけだな」

「えっ？何か言った？」

ぼつりと呟くがどうやら聞こえなかったらしい。

「いいや、何でもない……それより一つ頼まれてくれないか？」

「私に頼み事なんて珍しいわね？それで何すれば良いのかしら？」

俺はグリアさんをできるだけ早く、しかし不自然にならないように呼んで欲しいという事を伝える。

アリスは俺の頼みを何も聞かずに受け入れてくれた。

そして、しばらくの間どうって事のない雑談をし、アリスは帰っていったのだった。

「……ありがとうアリス」

俺は一人誰も聞いていない牢屋の中で万感の想いを込めてそう呟く

音は余韻も残さず冷たい壁の中に吸い込まれたのだった。

夕刻、たまに来る見張りの兵士以外誰も来ない牢屋の中、

俺は再び思索に耽っていた。

とは言えその内容は事件の事からアリスとの思い出に変わっていったが……

そんな時、二つの足音がこちらに近づいてくるのが聞こえた。

一人は監視の兵士の物だが、もう一人、この僅かに片足を引き摺るような特徴的な足音は……

「よう、レイ元気にしてるか？」

「グリアさん！来てくれたんですね」

グリアさんだった。

グリアさんは以前任務中に足に大怪我を負ってしまい、その後遺症から現役を引退したのだ。

それにしてもこんなに来てくれるとは思っていなかった。

……それにグリアさんは妖魔ではない

これだけ近づいても何も感じられないのだ。

違う可能性の方が高いとは思っていたがやはり確認が取れると安心できる。

……さて、これで問題はどうやって会議場に居た人達が怪しいと伝えるか、だ

グリアさんに下手な嘘は通じない。

ならば、正面から突破するしかないだろう。

「……アリスがお前が呼んでるって来たんだがホントか？」

見張りの兵士に一人で大丈夫だ、と向こうに行かせた後、声を潜めて俺にそう尋ねてくる。

「ええ、伝えたい事があります」

俺は正直に自分には妖魔を感じる力がある事、そして、会議場におそらく妖魔が居たという事を伝える。

言えない事が多くて嫌になるが、今回の件に関係がある事だけを伝える。

「妖魔を感じる力、か……銀眼の魔女みたいなもんか？」

「いえ、それよりも遥かに弱い物みたいですね、手が触れられるぐらい近くまで近づかないと分からないですから」

クレイモアの特徴を思い出しながらそう答える。

グリアさんはそうか、とだけ答えると黙って考え込む



俺が言った事を信用するかどうか考えているのだろう。

「それで、お前はどつすねばいいと思っつ。」

しばらく考えた後に俺にそう尋ねる。

「……護衛、という形で監視を提案してはどうでしょうっか？」

「なるほど、もし反対する奴がいたら怪しい、という訳か……やってみて損はないか、どうせ見廻り以外何もできていないんだからな」

そうニヤリと笑いながらグリアさんが言う。

グリアさんは任せとけとだけ言うって何も聞かずに帰ってしまっ。きつとすぐに実行に移してくれるのだろう。

翌日、グリアさんが結果を伝えに来てくれた。

グリアさんが護衛の話提案した所反対したのは町長と隊長、他の人物は諸手をあげて賛成したらしい。

隊長はただでさえ足りない兵士を護衛の形で割いたら余計に捜査が遅くなると主張し、

町長は自分を守るよりも街の住民を守るべきで護衛を付けるのなら見廻りを増やすべきだと主張していた。

両方ともがいかにもそれらしい理由だった。

護衛の話はグリアさん自身も実施はきついと考えていたため、あっさり町長と隊長の意見を受け入れ引き下がったらしい。

その時、有力者達が護衛を付けるべきと食い下がったらしいが、町長に諭されてどうにか引いたらしい。

そして、グリアさんは密かに信用できる部下を集め、隊長と町長を気付かれないように護衛という名目で監視するように命令したらしい。

もし、妖魔ではなかったにしても保身よりも街の事を考えていた人物と言う事なのだから守る価値は十分にあるとの事だ。  
そして、夜事態は急展開を見せるのだった。

## 老戦士と妖魔

sideグリア

その日の夜事態は一気に進展する。

町長を見張っていた兵士の一人から連絡が入ったのだ。

町長が密かに屋敷から抜け出した、と

俺はその報告を聞くとすぐに隊長に報告の伝令を出し、同時に集められるだけの部下を集め急行する。

町長が妖魔である可能性が非常に高いと判断したからだ。

それにしても、まさか本当に町長が動くとは……

レイが嘘をついてたらずぐに分かるから、嘘をついていないのは分かっていたが、それとその情報が正しいかは別問題だと思っていたのだがな

それにしてもレイか、何か隠してるから俺が監視してやろうと思っただんだがな、今はもう家族の一員だ

まあ、アリスに手を出したらタダじゃおかねえがな

だいたいの方向に向かっていると白い狼煙が断続的に上がる。

あれは、監視させていた兵士からの連絡だ。

……ただし緊急の、だ

何かあったに違いない、それも緊急の知らせを出さなくてはいけないような事態が……

あの方向は修道院か……

俺は万が一に備えてさらに戦力を整える事を決断する。

部下の一人を呼び責任は俺が取るからと指示を与え行かせる。

修道院に到着した時には既に戦闘は終わっていた。

最悪な事に町長を監視させていた兵士はやられてしまったらしく、倒れて苦痛に呻いている。

とりあえず生きている事が救いか……

そんな事を思いながら部下に警戒させる。

この惨状を作り出した元凶が近くに居るはずだからだ。  
警戒しながら比較的傷が浅そうな負傷者に近づく

「おい、大丈夫か！誰にやられた？」

「……………うっ、町長は、妖魔、でした……………すみません、不意を衝かれてしまいましたが、た」

「そうか、分かった。良くやってくれた！」

クソっ、俺がちゃんと町長が妖魔である可能性を伝えとけば……………イヤ、あの段階ではこうするしか……………

ぎゃああああああああ!!

俺が少しの間考え込んでいると後方から悲鳴が木霊する。

いつの間にか後ろを取られてしまったらしい。

振り向きながら剣を抜くとそこには連れて来た部下の一人が腹を押さえ蹲っていた。

どうやら背中から刺されて腹まで貫通しているらしく、背中ではゆっくりと赤い染みが広がっていた。

すぐ側にはその傷を負わせたであろう下手人がニヤニヤとイヤな笑いを顔に張り付け立っていた。

右手が異常な程に肥大化し、爪が長く鋭く伸びていた。

その先からはポタポタと液体が滴っている。

……………あの鋭利な爪で一突きにしたのだろう。

町長の顔をしているが、纏う雰囲気明らかに違う。

これが妖魔、か……………

長い事兵士をやっているが妖魔を見たのは初めてだ。

俺ですらその強者の雰囲気呑まれかけている。

部下達に至っては完全に呑まれてしまっているらしい、固まって動いていない。

「……お前ら！気合入れる！俺達は兵士だ！！俺達の手で守るぞ！」

俺の声に反応して僅かに精神状態が好転したらしい。

とは言え未だに動きは硬く、この状態で戦わせるのは自殺行為だろう。

「……俺がやるしかないってか？」

小さく呟く

老い先短いこの身、命何ぞ惜しくもねえが

果たして俺にコイツが倒せるのか？

「ギギギ、俺とやるうってのか？愚かな、人類の捕食者たる妖魔に人の身で挑もうなんてな！」

ミシミシと音を立て、町長だった身体が膨張していく、

それに伴ってただでさえ強かった威圧感がさらに威圧感が増してゆく

変化が終わったそこには体長2m近くある巨大な化け物が立っていた。

口は大きく裂けており、歯が鋭く尖り、瞳は金色に光り、瞳孔が獣のように縦に割れていた。

ギシャアアアアア!!!

妖魔が咆哮を上げてこちらに急接近してくる。

速い！そう思いながらもどうにか対応して剣を構える。

初撃は妖魔、振り上げた爪を叩きつけるように俺に対して振り下ろしてくる。

半歩下がりながら爪の軌道に剣を合わせる。

爪と剣が擦れ合い金属音を立てながら爪が剣を滑って行く。  
重い！

爪の攻撃を逸らしてそのまま反撃するつもりだったが想像以上に攻撃が重い、一撃受けただけで腕が痺れてしまった。

これではいつまでも受ける事などできない。

「ハッ！受けられねえってか！なら避けるまでだ！」

先程と同じように爪を振り降ろしてくる妖魔に対し今度は回避を選択する。

紙一重で妖魔の攻撃を見切り、そのまま妖魔の腕を斬りつける。

まるで木でも切っているかのような硬い感触で僅かに傷つけた程度で断ち切る事には失敗する。

グオオオオオオ!!!

痛みに咆哮を上げ、妖魔は一度俺から距離を取る。

その瞳には先程まで感じられた油断の色が抜けていた。

「ちっ、っっからが本番ってか？来いよ化け物！」

そう言うと同時にこちらから斬りかかる。

右、左、上、下、流れるような動作で連撃を繰り返す。

妖魔も守ってはいるものの対応しきれていないらしく全身に傷が蓄積していく。

苛立ったのか妖魔は強引に連撃に割り込み爪を振り上げる。

そんな強引な手が通用する訳もなくあっさり避ける事ができる。

さて、このまま伸びきった腕を切り落としてやろうと思った瞬間爪が伸びる。

全力で身を振り避けようとするが、後遺症の残る足が言う事を聞いてくれない。

トスツ、そんな軽い音がした。  
視線を下に降ろすと妖魔の爪が俺の腹に突き刺さっていた。

「ハッ、伸びるなんてありかよ……」

それでもどうにか剣を振ろうとするが、妖魔に蹴り飛ばされてしま  
う。

ゴロゴロと転がり、木に全身を打ちつけようやく止まる。

……クソ、ここまでなのかよ  
意識がチカチカと明滅する。

そんな臆な意識の中、今まで半ば固まっていた部下達が俺を庇うよ  
うに立ちほだかるのが見える。

「……逃げろ」

そう言ったつもりだが、声になったかどうかわからず怪しい

部下の一人が決死の覚悟で斬りかかるが、あっさりとかわされその  
まま裏拳で吹っ飛ばされる。

バカヤロー、一人でいくな、全員で一氣にいけ、そう思うものの身  
体が思うように動かない。

また、一人妖魔に斬られた。

……クソが

「グリアさん!!!」

最後の一瞬にアイツの声が聞こえた気がする。

そこで俺の意識は限界を迎え真っ黒に染まり途切れてしまったの  
だった。

## 妖魔と殺人事件

「142、143、144、145、146、147、148、149、150ッ！……ふう、次はスクワットでもするか……」

牢屋に入ってから2日間、俺は暇を持て余していた。

最低限、伝えるべき事をグリアさんに伝えた俺にできる事はもうほとんど何もなかったからだ。

外ではグリアさんを初めとする気の良い同僚達が事件解決に奔走しているはずだ。

なのにこの中に居てはできる事などほとんど何も無い。

必死に思考を巡らせて新たな気付きを探す事もいい加減やり尽くした感があった。

自分にできる事はやり尽くしたはず、それでも、いや、だからこそ俺は焦燥感に駆られていた。

強大な敵がすぐ側に居るのに手を出す事ができない。

……例え身近な人達が犠牲になろうとも助けに行く事すらできない、そんな状況が俺を焦らせる。

そんな落ち着かない状況でやる事もないから、俺はひたすら筋トレを行っていた。

スクワット、腹筋、腕立て、背筋、懸垂、素振り（棒は貸してもらった）、ランジ、カーフレイズ、リバースプッシュアップ、レッグレイズ  
e t c ……

思いつく限りの筋トレをやった。

ちなみに筋トレやった事ない人には聞いた事もないようなのが混じっているが、いずれも道具なしでできる筋トレだったりする。

昔、学生だった頃肉体改造なんてやってみた事があるから知っているのだが、こんな所でやる事になるとは思いもしなかったな……

ひたすら筋トレをやり続けているが、いつ何が起こるか分からない状況だ。



動けなくならない程度には手加減しながら、軽い筋トレを延々続けるという事をやっていた。

「298、299、300と、さて次は何やるかな……ん？」

かれこれ3週目のスクワットを終わらせ、汗だくの身体を拭きながら次に何をやるかを考えていると慌ただしく誰かが走ってくる音が聞こえる。

何か起こったのかと耳をすましていると、やって来た誰かが見張りの兵士に何か告げながらも足を止める事無くこちらに向かってくる。

「……おい、待……それ……本当……!？」

「本当だ、……から……アイツを……」

僅かに聞こえてくる声からは状況がよく掴めないが、やはり何か起こっているらしい。

やってきた誰かと見張りの兵士が何か言い合いながら近づいてくる。

やってきたのはグリアさんの部下の一人で、この前、俺を呼びに来た兵士のセネルだった。

同僚の中で足が速いからこう言った仕事をよく任される……本人はこんな雑用みたいな仕事、と不満のようだが

「レイさん！おやっさんからの命令です。牢屋から出て私に付いて来て下さい」

「……何があったんだ？」

「詳しい話は後です。事態は急を要しています。説明は移動しながらします」

そう言うので、俺は急いで準備をする、とは言っても単にそのまま牢屋から出るだけだったが……

牢屋から出たら、セネルがフル装備が必要だと言つので牢屋に隣接している詰所に移動する。

そこで、鎖帷子を着込み制服を着用しレザーアーマーを身に付け支給品の安物の長剣を手にする。

自分の剣が欲しいが、どうやら街の中心部に近いいつもの詰所に置いてあるらしい。

「……これで我慢するしかないか」

そう呟き、待っているセネルの元へ向かう。

待ちかねていたセネルに遅いですと文句を言われながら、走って修道院に向かう。

修道院に向かう最中にセネルから町長が夜遅くに抜け出した事、尾行していた兵士から緊急の狼煙が上がった事などが伝えられる。

まさかこんなにあっさりと尻尾が掴めるとは……せいぜい怪しい人物を絞り込むぐらいの効果しかないと思っていたのだが、運よく容疑者を特定できてしまったらしい。

「……皆、無事でいてくれよ」

そう静かに呟く

グリアさんもだが、他の同僚達が心配だ。

相手が妖魔となるとグリアさん以外の兵士が戦力になるかどうか怪しいからだ。

グリアさんにしても不意打ちを食らえばあっさりとやられてしまう可能性がある。

正面からならそれなりにやってくれろと信じているが……

修道院に近づくとつれて豊潤で香り高い血の匂いが強く匂って来

ていた。

その事に不安を覚えながらも俺は必死に走る。

ようやく修道院に辿り着いたとき、そこには傷を負い呻きながらも動けないらしく倒れている同僚達がいた。

そして、その奥では数人の兵士が妖魔と相対していた。

今、この瞬間にも負けてしまいそうなくらい劣勢だった。

急いで加勢しなくては！

そう思い妖魔に向かって駆けていく

今なら妖魔は後ろを向いているから不意を衝けるかも知れないそう思い静かにしかし素早く接近していく

その途中でまた一人妖魔の爪で兵士が斬られてしまう。

クツ、全力で向かっていれば助けられた……？

そんな自責の念で同僚が斬られた事からつい目を逸らした先で俺はさらなる衝撃を受ける。

血塗れで今にも死んでしまいそうな傷を全身に負ったグリアさんが居たのだ。

「グリアさん!？」

呼びかけるが反応はない。

まさか死んで……？

イヤ、そんな事はない！まだ助かるはずだ!!

俺はそう思いながらも心臓を掴まれたような気分になる。

それでも、今この瞬間はまず妖魔を倒さなければならぬ！そう思い妖魔に再び妖魔へと向かう。

どうやら叫んでしまった事で俺の存在に妖魔と同僚達が気付いたらしい。

「レイー！来てくれたのか!？」

「ギギギ、雑魚がまた増えた。何人増えても無駄無駄、お前ら全員死ぬんだよ、ギシシシ」

「……つるせえ、グリアさんをやったのはお前か？……許さねえ」

俺は激情に身を任せて妖魔に向かって突撃する。

途中でセネルや他の同僚に止められたような気がするが、そんな事よりもグリアさんを傷付けた妖魔が許せなかった。

グリアさんが居なければこの街でこんな風に過ごす事はできなかった。

そんな恩人を傷付けたのだ、この妖魔は許せる訳がない。

全力で踏み込み全身全霊を込めて長剣を振り降ろす。

今までで剣を振って来た中でも最大の威力を秘めていたであろう一撃、だがあっさりとかわされてしまう。

グリアさんの教えを守らず隙も見えていないのに激情に身を任せ初めから大ぶりをしてしまったからだ。

体勢を崩した俺を妖魔は思いつき蹴飛ばす。

俺はなすすべもなく蹴飛ばされ修道院の扉を打ち破り、聖堂の中に飛び込み、いくつか椅子を巻き込んで転がりようやく止まる。

「……ギンシッ、何だあ？アイツ、俺に蹴られに来たのか？ギンシシ」

遠くから微かにそんな妖魔の声が聞こえるが全身を酷く打ちつけた所為でしばらく立ち上がれそうにない。

外から剣戟の音と悲鳴が聞こえてくる中、俺は言う事を聞かない身体を動かそうと四苦八苦していた。

ようやく少しは動けるようになった頃、剣戟の音はいつの間にか止んでいた。

そして、壊れた扉をさらに破壊しながら巨大な人影が修道院の中に入ってくる。

妖魔だ。

外に居た仲間達は全員やられてしまったのだろう。

……俺が無謀に突っ込んだ所為で余計な被害が!?

「クソッ……反省は後だ！今は冷静になるんだ」

そう自分に言い聞かせ無理矢理気を静める。

そういつた事もグリアさんには教えて貰っていた……実践はまだまだできていないが

「ギシギシギギ？生きてるとは思ったが元気そうだな？」

後は止めを刺すだけと思っていたのか妖魔は俺が立ちあがり剣を構えているのを見てそう言う。

「ハッ、お前が弱いだけだろ？」

「……」撃で吹っ飛ばされてよく言うな、ギギギ

「お前、修道院の人間はどうした？」

強がりついでに煽ってみるが妖魔は全く動じた様子がない。

どうやら即、止めを刺そうとは思っていないようなので時間稼ぎついでに気になっていた事を尋ねる。

どうにか剣を構えているとは言え、まだ若干痺れが残っているのだ。

それに、時間が経てば援軍が来る可能性が高いはずだ。

「ギシシシ、見られちゃったから殺したよ」

あっさりとそう言い放つ、

本当は静かに一人だけ喰うつもりだったのにあの兵士達の所為で全員殺る羽目になっちまった、そう妖魔は続けて言う。

その事にまた怒りが込み上げてくるがどうにか押さえつける。

……予想はしていた事だし、ある意味俺にとってもありがたい事だからだ。

「お前、何か美味くなさそうだな？」

そんな事を妖魔が呟く  
俺が妖魔だからだろう

俺も目の前にいる妖魔がとても不味そうに感じる。  
そして、何より強烈に感じる妖魔の気配、何故今まで感じられなかったのか分からないくらいにはつきりと感じられる。

同時に他の感覚も鋭敏になっていくらしく、修道院の中には生きて  
いる人間が誰も居ない事も分かる。

俺は何も答えないうまま妖魔の姿へと変身する。

漂う血の匂いがより鮮烈に感じられる。

飛び散った肉が例えようも無い程に美味そうだ。

……だが、まずはアイツからだ

「ギギギ!? 貴様、同類だったのか!」

無言で妖魔を斬りつける。

不意打ち気味かつ今までは比較にならない速度での斬撃に妖魔  
はあっさりと腕を斬り落とされてしまう。

グギャアアアアアアアアアアア!!

聞くに堪えない耳障りな絶叫が聖堂に木霊する。

俺は真つ二つにしてやるうと思ったのに避けるから腕だけになっ  
てしまった。

舌打ちをしながら続けて頭に向かって振り上げる。

が、妖魔はバックステップでどうにか回避し、そのまま逃走しようと背中を見せる。

「ハッ、逃がすかよ」

逃げ足はどうも相手の方が速いようなので剣を妖魔に向かってブン投げる。

技術もなにもない、力任せの投擲だったが妖魔の胴体に直撃し妖魔はバランスを崩し倒れる。

俺はゆっくりと近づき剣を引き抜く

安物の長剣は投げた衝撃で折れてしまっていたが、止めを刺すぐらいはできるだろう。

そう考え折れた剣を振り上げる。

「ちよっ、待つ、俺達、仲間じゃ……」

妖魔が戯言を言っているが一切気にせず剣を振り降ろす。

グゲツ？

そんな情けない断末魔を残して妖魔の頭部は真っ二つに斬り落とされる。

勝利の余韻もなく俺はすぐに人間の姿に戻りグリアさんの元へと向かう。

修道院の扉を抜けた瞬間、突然声を掛けられる。

「へえ、珍しいね？人間を助けるために妖魔を倒す妖魔なんて……まるで小説みたいだね？」

そんな事を軽い調子で言われる。

その内容もそうだが、声を掛けられた瞬間から冷や汗が止まらな

い。

声を掛けてきた相手が圧倒的な妖気を放ち始めたからだ。

声の主を探しているところ、こっち、こっちと声を掛けられる。

声の主は木の枝に腰掛け、こちらを満面の笑顔で見つめていた。

いつから見ていたのだろうか？そこには銀色の髪、銀色の眼、白い

マントを羽織り、大剣を背負った女、クレイモアが居た。

自分よりも遥かに強い、そう感じさせるクレイモアに恐怖を感じながらも問いかける。

「……お前は何者だ？何故ここに来た？」

「私？私はあなた達の敵よ？何でここに来たかって？探ってたら、街の中に居るのにいつまでも人を襲わない妖魔がいるじゃない、で、その妖魔が別の妖魔と戦い始めたりなんかしているから見に来たのよ、要はあなたを見に来たの」

どうやら依頼されてここに居る訳ではないようだが、相手はクレイモアだ折角見つけた妖魔を見逃す事はないだろう。

そう思い、じりじりとクレイモアから距離を取る。

ただでさえ勝ち目がないだろうに今は全身ボロボロで武器もまとももない、こんな状況で勝てる訳がない。

なら、逃げるしかないだろう……どれだけ絶望的だろうと

「あらっ、逃げるの？」

ッ気付かれた！

その瞬間に全力で大地を蹴り、逃走を開始しようとする。

が、いつの間際に近づかれたのか気付いた時には首に手を回すように抱きとめられてしまっていた。

一見まるで恋人同士がじゃれているようにしか見えないが、この体勢ワンアクションで首を折られる!!

間近に迫った死の恐怖で冷や汗すら出ない、声も出せずに震えていると

「ふふふ、あの人まだ生きてるみたいだけど？」

そう言いながら女はグリアさんを指差す。



「えっ？……本当だ……よかった」

良く見てみると本当に僅かだがグリアさんの胸が上下しているのが見て取れる。

とは言えこのまま放っておけばいずれ死んでしまっただろう。

迅速な治療が必要だ。

俺は無意識の内にグリアさんの方向に向かおうとする。

「ふーん、やっぱり助けに行くんだ？」

その声に俺は今どんな状況にあるのかを思い出す。

「頼む、俺は……どうなってもいいから、グリアさんをあの人を助けてくれ」

死ぬのは怖い、だがそれ以上に恩人であるグリアさんに死んで欲しくない。

その一心でクレイモアに懇願する。

「イヤ」

しかし、にべも無く断られてしまっつ。

それでも、諦めきれずに言葉を続けようとするがその前にクレイモアの女が、

「あなたが助けなさい。ふふふ、この場は見逃してあげるわ」

そう言い

俺を開放する。

そしてまたね、とだけ言い残してクレイモアは一瞬で去っていく

呆然とそれを見送る。

……どうやら助かったらしい

そんな安堵にへたり込みそうになるが、気力を振り絞ってグリアさんと仲間達に応急処置を施していく

応急処置を施している内によくやく援軍が到着する。

俺は最低限の報告を隊長にすると同時にスイッチが切れたように倒れてしまう。

いい加減体力も気力も限界だったのだ。

この街に来て初めての重大事件はこうして終わりを迎えたのだった。

## 審判者の興味

わたしの名はジェシカ、組織の戦士、いわゆるクレイモアだ。

組織や仲間からは審判のジェシカなんて呼ばれている。

ナンバーは5、正直私はナンバーに相応しい実力を持っているとは言い難い。

正面から一対一で闘ったなら一桁上位勢は当然の如く、8、9でも勝てるとは言い難いだろうし、10番台でも苦戦は免れないだろう……さすがに負けるとは思わないが

まあ、回復が得意というわけでもなく、強力な必殺技も持たない、そんな戦闘力の高くない私が上位ナンバーであるのは私の能力が影響している。

私は妖気感知能力に優れている、というよりそれしか能がないと言っても過言ではないだろう。

その所為で私は組織の眼なんて役割を任されている。

私は自分の役割が好きではない。

妖魔や覚醒者の情報収集だけなら良いのだが、仲間の監視なんて仕事もたまにやらなければならぬからだ。

監視対象では無くとも広い範囲を見て回る事になるから仲間の死や覚醒なんてものも視てしまう事になる。

そしてあえなく散っていった中には肅清なのか、格上に挑まされて全滅なんて事も何度かあった。

私の報告で分かっている筈なのに、だ。

妖魔が大量に集まっている妖魔の巣とでも呼ぶべき場所を敢えてスルーするように配置と依頼を操作していると分かった時はつい笑ってしまった。

そこまで組織はするのか、と

組織を維持するためには定期的に妖魔討伐の依頼が必要だ、というのは判らないでもないのだが、それでも気分が良いものではない。

それにその巣にしても私が気付かない内にいつの間にか妖魔の数

が増えている。

私は女の妖魔や子供の妖魔なんて見たことないしそれらしい妖気を感じたこともないのだが……

そう考えるともしかして、妖魔は……

まあ、所詮人間の敵は人間という事なのだろうか？

単に知り過ぎれば疑心を生み不幸を呼ぶという事なのだろうか？

……考え過ぎである事を祈るばかりだ。

他の仲間みたくひたすら妖魔を憎み戦い続ける、そんな戦士の方がどれだけ気楽だった事だろうか？

下手にこんな妖気感知能力を持ってしまったためにこんな事で悩む事になるのだろうか。

普通の攻撃型か防御型になりたかった……

攻撃型か防御型か、その分岐点は戦士となる時に抱いていた感情らしい。

妖魔に襲われた時に相手を殺す事を考えるか逃げ出す事を考えるか、これが重要らしい。

しかし、生憎と私はひたすらに人間に裏切られて組織に入ることになった。

男ができただけで愛してたし愛されてたと思ってた母に裏切られた時は絶望したもんだ。

それから信じて裏切られて、流れ流れて組織に売られた。

故に他の同期のような殺したい程の憎悪も逃げ出したい程の恐怖も知らない。

そんな妖魔に対して特に何も感じていなかった私はどうなるのだろうか？

憎悪と恐怖を知らなかった私だからこそ感知に優れた戦士となったのかも知れない。

正直、あまり嬉しい話ではないが……

組織の眼として様々な事を見てきた。

組織にとって不都合な事も知っている。

だからだろうか、最近組織が私を排除したがっている気がするのだ。

組織から回される依頼が達成できるかどうかギリギリの任務が増えていくように感じる。

……いや、単に次世代の目が育ってきたから、今まで格下が主だった任務が普通の扱いになっただけなのだろう。

まだ、達成する可能性がある任務しか任されていないのだから……どちらにしろ扱いが悪くなったのは事実という訳だが……

アイツを見つけたのは、そんな風に自分の最期を真剣に考えなくてはいけなくなった頃だった。

最初は新たな妖魔が街に住み着いただけだと思っていた。

だから全く気にせずいつも通りに組織に報告しただけだった。

それから何度か街のある方向を探查したはずだが記憶にはない。

単なる妖魔、それも弱い個体など一々記憶していられる程私は暇ではないのだ。

次にアイツの存在を認識したのは組織の黒服にカタントの街に本当に妖魔が居るのか、と確認された時だったな、私からすればその街に居ることは明白なのに疑われてるみたいで不快だったので覚えてる。

詳しい話を聞くとカタントの街に妖魔が居座ってからそれなりに時間が経つのに一向に依頼を出す気配がないので何か特別な事情があるのではと調査したらしい。

そしてその調査でも全く被害が見つからないから妖魔の存在自体が疑われたという事らしい。

その時はよほど巧妙に隠蔽しているのだろう、という結論を出した記憶がある。

これ以来だった。私がこの謎の妖魔を調べ始めたのは

幸い私はこういった調査に特に向いた能力を持っていた。

私の感知能力は距離も深度も優れているが、それ以上に遠距離にいる対象を深く知ることに優れていた。

この点だけは次世代の目にも決して負けることはないと言い切れるだろう。

その分感知できる範囲がかなり限られている。

イメージとしては細い糸状の感知範囲を遠くまで伸ばしている感じだろうか？

その糸が触れている範囲の事はよく分かるがそれ以外は全く分からない、そんな感じだろう。

そんな自分の特性を生かして私は仕事の合間合間に暇を見つけては謎の妖魔を観察していたんだ。

最初はごく一般的な妖魔だと感じられていたんだが、ある時違和感に気付いたんだ。

この妖魔はまるで人間のような喜怒哀楽を常に示していた。

もちろん妖魔にだって喜怒哀楽は存在する。

しかし、だ、それは妖魔として妖魔らしい活動―例えば人を喰っている時や襲っている時―をしている時に限られている事が多いのだ。

普通の人に化けている妖魔は、その周囲に対する反応を脳を喰った人間のそれをほぼ自動で再現しているだけで、妖魔自身の感情としてはつまらないな、程度しか感じていないのだ。

それなのにこの妖魔は常に感情の起伏がしっかりと感じられる。

街の中に居る筈なのに、常に妖魔の状態であるかのように感じられるのだ。

そんな事はありえる訳ない。

と言う事は、この妖魔は人間に化けながら、人間としての生活を満喫しているという事になる。

それに気付いた時からだろう私が本当にこの妖魔に対して興味を持ったのは

それまでは、精々不快な気分の原因である狡猾な妖魔を確認してみるか、程度の興味だったのだが、仕事を放り出して見ていたくなるく

らしいの興味を惹かれる存在へと変わったのだ。

妖魔でありながら人の中で人よりも人らしく生きようとしているその姿に私は興味を惹かれたのだ。

直接見る事は任務の性質上できなかつたが、それでも妖気を感じるだけで多くの事が分かる。

……いや、下手に直接見るよりも感じる方がよほど多くの事が分かるのかもしれない。

そして、驚いた事にどうやらこの妖魔は人を食っていないらしい。段々と妖力が痩せ細ってしまっている事から分かる。

一応、そのペースは非常にゆっくりである事から何らかの対策を施しているように感じられる。

なぜなら毎晩のように妖魔化した後にほんのわずかだが妖気が回復しているからだ。

この時に何らかの方法―死体でも漁っているのだろうか？―で補給しているらしい。

とは言え元々微々たる回復量に加えて、その後の訓練だろうか、妖力を大きく消費してしまっている事からほとんど意味をなしていない。

なぜこの妖魔は人を襲わないのだろうか？

私には分からないが、その頑なで真っ直ぐな意志はまるでこの妖魔は自分が人間であると無言で訴えているように感じられ、組織の黒服や母と比べるべくもないほど好ましいものに感じられた。

こうして私は段々と厳しくなっていく任務をこなす傍らで彼の事を見つめていた。

そんな日々がしばらく続いた頃だった。

彼のいる街の近くで任務があつたのだ。

離反したナンバー7アビゲイルの粛清

組織の戦士が離反する事は珍しいがたまに発生する事だった。

今回は戦士として限界が来ているのに死にたくない、と逃亡したらしい。

組織の対処も大概は肅清として戦士を送るといふ事が常だった。

今回はそれなりに上位のナンバーと言ふ事もあり、私の他にナンバー14ベラ ナンバー28シェリル ナンバー41ダイアナと人数だけは揃っていた。

おそらく、覚醒する可能性を考えての編成だろう。

私の経験上でもこの類の離反者は追いつめられると死よりも覚醒を選ぶ傾向にあるからだ。

そして、覚醒する可能性を考慮しても一見すれば十分な戦力が揃っているように見える。

しかし、その内実は直接的な戦闘力の高くない私に覚醒者討伐の経験のない中堅が二人、戦力になるとは思えない下位ナンバーと不安が拭えない。

もし覚醒させてしまった場合、普通にやればまず勝ち目はないだろう。

……これは邪魔者を一掃しようとしているのだろうか？

さて、普通にやれば勝てないと言ったが、要は普通にやらなければいいのだ。

……正直に言えばこの方法は取りたくなかった。

とは言え正面から挑んだ場合覚醒させてしまう可能性が高い。

そして任務を放り出して逃げる事も死ぬ事も私には選択できない。ではどうするのか？

私は悩んでいた。

結論から言おう。

私達はナンバー7アビゲイルを無事、肅清することに成功した。

覚醒させる事もなく、もっと言えば妖力解放する暇も大剣を抜かせる事もなく、暗殺した。

結局私は正面から戦士として挑む事を選択できなかったのだ。

その決定をした時、若いヤツは文句を言っていたが幸いナンバー14ベラは賛同してくれた。

なので反対していたナンバー28シェリルとどうするか迷ってい



たナンバー41ダイアナ置き去りにして一人で任務に挑んだ。

自分ですら正しいと思っていない事を他人に強制できる程私は強くない。

それにこの類の任務なら私にとっては少人数の方がやり易いといった事情もあった。

暗殺自体はスムーズに進行した。

もう既に何度も繰り返し返した工程だ。

今さら大きな問題を起こす訳がない。

妖気を抑えてアビゲイルに気付かれないように近づき、眠ったのを遠距離から確認した。

その後に妖力同調で感知能力を誤魔化す。

そして、ベラが一撃

それで終わりだった。

あっけなく首を落とされナンバー7だった戦士は死んだ。

アビゲイルは死んだ事にも襲われた事にも気が付く事なく眠りの中で死んでいった。

戦士として死ぬ事も選択させてもらえず、遺言を遺す事もできずに私達に殺されたのだ。

何度行っても慣れる事のない後味の悪い仕事だった。

そしてこれが私が審判のジェシカなんて呼ばれている理由だ。

表向きは妖力同調により動けなくした妖魔の首を一撃で刎ねる姿がまるで妖魔に審判を下しているように見える、と言つ事らしいが、実際はこうして暗殺者じみた事を実行する事から付いた通り名なのだ。

この通り名を聞く度に私は自らが犯した罪の重さに潰されそうになる。

だが、私はこれまで殺してきた者達に謝る気などない。

謝ってしまったらその者達の死を否定する事になるからだ。

……所詮、これも感傷でしかないが、譲れない私の想いだ。

私は今まで殺してきた全てのモノを背負って生きていくしかない

の  
だ  
ろ  
う。

そんな感傷に浸りながら私はアビゲイルの死体を埋葬し、その場を去るのだった。

## 審判者の興味

元仲間の粛清という後味の悪い任務をこなした後、私はカタントの街に向かっていた。

と、言うのも任務の後に黒服と会ったのだが

「今、お前に任せるような任務はない。この地方の妖魔どもの調査でもしておけ」

とか言われてしまったのだ。

そして

「次の連絡は1週間後だ」

と伝え、さっさとどこかに行ってしまったのだ。

しかし1週間も時間を与えられたが、この地方の調査なんて2、3日もあれば完了してしまう。

要は時間を持て余しているのだ。

ナンバーが上がるに連れてこう言った中途半端に持て余す時間が増えてしまう。

ナンバー相応の敵まで移動している事と負傷したり死んでしまった時のためにスケジュールに余裕を持たせているからだろう。

私は後方から支援に徹する事が多いため負傷する事は少ない、だからこうして時間を持て余してしまう事が多くなってしまう。

「趣味も持たない、つまらない存在よね……」

そう呟き、では余った時間をどうするかと考える。

思いついたのは以前から気になっていたカタントの街の妖魔を一目見に行くことだった。

あの妖魔の事を考えると後味の悪い任務のせいで沈んでいた気分も良くなる気がする。

きつとあの妖魔の妖気から感じられる人間らしい生活が人間だった頃を思い起こさせ、遠からず死ぬ運命を忘れさせてくれるからだろう。

「それにしても別の妖魔か……」

カタントの街に向かうと決めた時から街の方向を探查しているのだが、あの妖魔とは別の妖気を街に感じるのだ。

そして新たにやってきたらしい妖魔は人を襲う普通の妖魔らしいのだ……まあ、あんな変な妖魔が何匹も居る訳がないのだが

それにしても変な妖魔は普通の妖魔に対して怒っているらしい。

……変な妖魔とか普通の妖魔とか分かりづらいな、人を襲わないおかしな妖魔をあのお魔、普通の妖魔は雑魚でいいだろう。

さて、あの妖魔は雑魚に対して怒っている。

何故か？

ここからでは分かる事は少ないが、雑魚が人を襲っているからだろう。

今の所、あの妖魔と雑魚が接触した気配はないからだ。

直接会った事が無いのに怒りを覚えると言う事は雑魚の行動が原因だと考えられる……昔からの知り合いとかだったら別だがな

そしてどうもあの妖魔は妖気を探るのが苦手らしい。

怒って探しているにも関わらず未だに発見できていないのだ。

それも結構近くに雑魚がいる場合でもその存在に気付く事ができていないように感じられるのだ。

……まあ、これは仕方ないと言えるだろう。何せ妖気を探るにはそれなりに経験を重ね、コツを知らなくては困難だ。

実際、訓練の過程でこれができないヤツは結構いる。そう言うヤツでも妖気を探る訓練や自分達の妖気を操る訓練をしていく内に段々と上手くなるもんだ。

だから、面識はなく妖魔の行為に対して怒っていると考えるのが妥当だろう。

……さて、雑魚の行為に対して怒っていると考えた時可能性は二つある。

一つ、狩り場を荒らされた怒り、即ち自分が折角静かに忍び込んでこれからゆっくりとばれないように襲うつもりだったのにそれを御破算にされた事に対する怒りだ。

この場合は残念ながら一体の妖魔は私が狩る事になるだろう。私のはあの妖魔が単なる狡猾なだけの妖魔であって欲しくないと思っ  
ているが、それが外れだったのなら容赦するつもりなどさらさらない。  
私の八つ当たりでしかないが狩らせて貰おう。

組織の方針からすると報酬もなしに勝手に妖魔を狩るのは推奨されて  
いないが別に禁止もされていない。

実際、多少遠回りになるのが妖魔を見つけ次第全て狩り尽くす戦士  
もいる。

……そう言った戦士は何故か早死にする事が多いのだが

まあ、私が狩ってしまったても問題はないだろう。

組織に黙っておけば良いだけの話なのだ。

と言うか私達に報酬なしで妖魔を狩らせないために出来る限り遭  
遇しないようにわざわざルートを設定している組織の方針何ぞに従  
う気はない。

……とは言え積極的に逆らう気もまた無いが

そしてもう一つは本当にこの街の住人として仲間が殺されたと思っ  
ている場合だ。

ありえない、そう思うと同時に私はこの可能性を信じたいと思っ  
ていた。

そして、ようやく街が見えてくる。

事前に確認した地図によればあの妖魔が居る街の名をカタントと  
言うらしい。

街に到着したのはまだ日も高いそんな時間だった。

いつもの移動速度であれば到着はもっと遅くなる筈だったのだが  
どうやら張り切り過ぎたらしい。

折角早く到着したのだ。

そう思い私は早速あの妖魔を見に行く事にする。

銀眼の魔女がやって来ただけの騒ぎにはしたくないので、ロープを深く  
被り外からは容姿が判別できないようにする。

特に今この街では妖魔が暴れているのだ。

戦士がやって来た等知れたら助けしてくれたの、面倒な事になるのが  
目に見えている。

門では厳重な検問が行われていたので、適当に人の気配がない所から  
壁を飛び越えて街に侵入する。

妖魔の所為か街に人通りが少ないのであっさりと誰にも見つかる  
事無く目的地に到着する事ができた。

そこで、私はまた驚く事になる。

あの妖魔が居た場所は牢屋の中、つまり捕まっていたのだ。

この展開は想像していなかった。

大きな感情の揺らぎがあった後に一か所から動かなくなった事は  
分かっていたがまさか捕まっていたとは

おそらく妖魔だとは断定できないが妖魔の可能性があるとかそう  
言う話になったのだろう。

妖魔だと分かっていたればさっさと殺してしまうだろう。

この中途半端な対応と碌に監視もせずにトランプに興じている看  
守の弛みっぷりからは少し怪しいからとりあえず牢屋に入れておく  
か、程度の意志しか感じられない。

どうやらアイツはなかなか信用されているらしい。

それにしても牢屋の出窓からヤツを見ているのだが何か考え込んで  
いるのか全く気付く気配がない。

さて、これからどうするか……

とりあえず街まで来てしまったが、これからどうするかは完全に何  
も考えていない。

「コイツの普段の生活も見てみたかったのだが……  
ふむ、そのために雑魚を私が倒すのもありか、妖魔が別に出てくれ  
ばコイツも解放されるだろうし、あるいは……」

「ん？」

誰かがここに近づいているらしい。

軽い足音がここに向かって近づいている。

子供だろうか？ そう思いながら屋根に飛び乗り、姿が見えないよう  
に隠れる。

やってきたのは聡明そうな女の子だった。

どうやらあの妖魔の知り合いで密かに会いに来たらしい。

私はこれから行われるであろう会話を盗み聞くために妖力を操作  
して耳を強化する。

妖力操作を極めると気配をほぼ消したままこんな細かい使い方も  
できるようになるのだ。

……悪趣味な使い方だとは思って

しばらくあの妖魔と女の子の会話に耳を澄ます。

ふむ、名前はレイと言うのか

いや、それよりも驚くべきはあの女の子ーアリスとか言ったか？

レイが妖魔であることを知っているらしい事だ。

その様子からは騙されたりはしていないように感じる。

「……信じられないわね、人と妖魔が平和的に共存しているなんて」

変わった妖魔が人間に成り済ましてし秘かに暮らしているだけだ  
と思っていたのだが、まさか人間の側も妖魔である事を知った上で共  
に生活していたとは思ってもみなかった。

もちろん、街の人間全員が知っているとは思わない、と言うかあの  
子一人だけの可能性の方が高いだろう。

だが、一人だけとは言え妖魔である事をしりながら人と共存してい

た事は驚嘆に値するだろう。

「ん？あの子は帰ったのね」

そんな事を考えていると伝言を託されたアリスは一度帰る事にしたらしい。

さて、面白くなってきたが、これからどうなる？

そんな事を思いながら私はクレイモアを牢屋の屋根に突き刺し休息に入る。

あの胸糞悪い任務の前から休息を一切取っていなかった事を思い出したのだ。

どうやらそこらの街娘の如く気になるアイツに会えると気分が高揚していた事を自覚する。

まあ、恋と言うよりは遠足前の眠れない子供と言つべきだが

そんな自分に驚きつつ、そう悪くないそう思いながら私の意識は速やかに黒に染まって行くのだった。



## 審判者の興味

夢を見た。

懐かしい夢だ。いや空想と云うべきだろう。

こんなに幸せだった事は一度として無いのだから

母が私の頭を優しく撫でてくれている。その傍らにはもう思い出す事もできない父がいる。

何かあったのだろうか？小さな私が頬を膨らましながら父と母に向かつて捲し立てている。

それを父が大したことじゃないと笑い飛ばす。母も一緒になって笑う。

そんな父と母の姿に最初はむくれていた私もいつの間にか笑顔になっっていた。

夢の中では全員が笑っていた。私も笑っていた。

何の変哲もないごくありふれた日常、喪わなければ気付く事もできないそんな黄金よりも価値のある日常

そんな夢だった。

いつまでも見ていたい、そう思わせる夢だった。

しかし、夢は唐突に終わりを告げる。

父の姿がだんだんと朧に霞んでゆき、あの私を売り払った男の姿へと変わる。

へらへらとした口元が無性に私をイラつかせる。

そんな男の隣りに居る母が冷めた眼で私に告げる。

「あの人と一緒に暮らすのにあなたが邪魔なの……死んでくれない？」

そう言いながら振り下ろされる包丁

気が付いた時には私は母を突き飛ばしていた。

そのままバランスを崩し倒れる母

打ち所が悪かったのか再び母が動く事はなかった。

「……………!？」

悪夢から私は跳ね起きる。

周りを確認する。

ここは何処だ？カタントの街だ。

私は何だ？半人半妖の組織の戦士だ。

クレイモアをしつかりと抱き締める。

ようやく気分が少し落ち着いてくる。

あんな悪夢を見るのは久しぶりの事だ。

訓練生の時代は毎日のように見ていたが戦士として動くようになる頃にはほとんど見る事はなかったのに……………

特にこんな幸せから一転して悪夢何て言うパターンは初めてだ。

「あれは過去の話だー!」

自分に言い聞かせるように呟く

そうあれは過去の話だ。

私は自分の手で母を殺し、そしてあの男に奴隷商に売られたのだが、それは過去の話だ。

いまさら取り戻せる事は何もない。

気分を切り替えるために街へと繰り出す。

街では妖魔騒ぎの所為だろう閑散としており巡回する兵士ばかりが目立っていた。

雑魚を狩りに行くか？

ささくれ立った心でそんな事を考え雑魚の居る場所を目指す。

しかし雑魚が居たのは街の要人が集まった会議場の中だった。

狩る事はさして難しくもないが、これだけの兵士と要人が居ると面倒だ。

そう思い雑魚を狩るのは止める事にする。

何もかもが思い通りに行かないように感じられさらにイライラしてしまふ。

街に居ても仕方がない、そう思い私は一旦街を出る事にする。

外で身体を思いきり動かすのだ。

そうすれば少しは気分も晴れるだろう。

郊外の森で身体を動かす。

一振り毎に余分な思考が削ぎ落されて行く。

それでも気分は晴れることがない。

表面的にはいつも通りの動きができているが、心の奥に澱んだ物を感ずる。

振り払うように一心不乱にクレイモアを振っていると自分が付けた物ではない傷が木に付いているのが目に入った。

気になったため剣を振る事を一旦止め傷をじっくりと見る。

「これは……」

太刀筋はお世辞にも上等とは言えない。

しかし、力は常人以上にあるのだろう。

力任せに断ち切ったと言わんばかりに荒い傷が残っている。

そして、その傍には別の傷がある。

こちらは前の傷よりも若干ではあるが上手く斬れている。

そんな傷がここには無数にあった。

傷を見るだけで理解る。

どれだけ鍛錬を重ねたのかが

この傷を残した者は決して才能に溢れている訳ではない。

それでもただ普通の才能の者が諦めずにひたすら毎日を積み重ねたのだ。

最も新しくできたであろう傷を見る。

……下級戦士と同じ程度だろうか？

それは私から見ればまだまだと言えるモノだった。それでも日々の積み重ねは間違はなく実になっていた。ふとあの妖魔―レイが夜中に街を抜け出していた事を思い出す。おそらくこの場でレイが訓練していたのである。事に思い至る。この調子で強くなったら……  
そんな考えが頭を過る。  
今は問題ないだろう。  
だが、この先はどうだろうか？  
そんな妄想を弄びながら再び大剣を振る。  
いつの間にか心は軽くなっていた。

ん？動いたか  
大剣を振るっていると街から感じる妖気に変化を感じ、そう思う。  
私には一旦捕捉した相手であれば大概の事であれば捕捉し続ける事ができる能力がある。

私が妖気を探查できる距離は決して長いとは言えない。  
それにも関わらず組織の眼として長く勤めてこれたのはこの能力のおかげだろう。  
何せ数が限られるとはいえ知りたい相手が何をしているのかほぼリアルタイムで知ることができるのだ。  
組織からすれば普通の妖魔の動向なんて割りとどうでもいいのだろう。

探るように言われているのは私達戦士と覚醒者、それに深淵の者の動向だ。  
妖魔のことはそのついで程度の扱いだった。

そしてそんな私の感覚が補足しておいた雑魚妖魔の動きを伝える。  
町長に成り済ました雑魚妖魔が動き出したらしい。  
さて、これから急げば被害を出さずに妖魔を狩ることは難しくない。  
い。  
しかし、

しかしだ、

ここで私が妖魔を狩ってもいいのだろうか？

組織の方針としては依頼も無いのに無闇に狩ることは推奨されていないからだ。

当然だろう組織の運営は妖魔を倒すことで稼いでいるのだ。

それなのに勝手に組織の戦士が倒してしまったら報酬が手に入らない事になる。

ならばここは放っておくのが正解だろう。

見殺しにする事には罪悪感を感じるが距離の差こそあれど今までもやってきたことだ。

ここは割りきるべきだろう。

……いや、自分を偽ることは辞めよう。

私は罪悪感なんて感じていない。

そして何よりも見たいのだ。

レイがこの事件をどうするのかを

あの人間臭い、いや人間よりも人間らしいあのおかしな妖魔が一体どんな判断を下すのかを私は見たいのだ。

そのためならば人間が何人襲われようと気にもならない。

こんな私はおかしいだろう。

だが、果たしてこの世界におかしくない人間なんているのだろうか？

人間なんて放っておけば人間同士で騙し合い殺しあう存在なのだから……

眼下では見殺しにしても私が見たかったモノ、いやそれ以上のモノが展開されていた。

人間を護るために妖魔と戦う妖魔

そんな本来はあり得ないはずの光景が私の前で繰り広げられていた。

戦況は今の所はレイが不利のようだ。

それも当然だと言えるだろう。

何せレイは人間の姿のまま戦っているのだ。

能力は大きく制限されている筈だ。

おそらくはアリス以外の人物はレイが妖魔であることを知らないのだろう。

そして、レイは自らが妖魔であるという事を隠しておきたいのだろう。

むしろその状態でどうにか持たせていることこそ褒めるべきであろう。

そう言えば先程妖魔に倒された人間の中にレイと同じような技を使う老人がいた。

人間にははなかなかやるな、と思っていたのだが彼がレイの師匠なのだろう。

ふむ、そうと知っていたのなら助けた方が良かっただろうか？

いや、関わらないと決めたのだからこれで良いのだ。

それに……うん、まだ生きている。

急がないと危ないけどこの戦いが終わるぐらいまでは持ちそうだ。

そんな事を考えている内に戦いもそろそろ終わりそうだ。

吹き飛ばされ人目がなくなったのを期にレイが妖魔の姿に戻ったのだ。

人間の姿で劣勢とはいえ持たせていた。

それが本来の姿となり能力が上がれば当然レイが優勢になるだろう。

そして結果は思った通りだった。

いや、思った以上にあっさりと決着は着いた。

雑魚妖魔がレイが妖魔であることに動揺した隙に腕を切り落とさ

れるという痛手を食らったからだ。

この段階で勝敗は決していた、と言っても良いのだがさらに雑魚妖魔は失策を重ねる。

逃走するためとはいえ何も考えずに無防備に背中を晒したのだ。

動揺したのはともかく逃走の判断は明らかに失敗だった。

普通に隙を窺って逃走するのであれば成功した可能性が高かったにも関わらず

恐怖に負けて今すぐの逃走を選んではまった。

それに対してレイは絶対に許さないという強い意志を持っていた。

要は気持ちの段階で雑魚妖魔はレイに負けてしまっていたのだ。

レイは雑魚妖魔に止めを刺す。

最後の一太刀は見事な太刀筋を描き雑魚妖魔の頭部を綺麗に二つに分割した。

人間の姿に成り、出口へとポロボロの身体を引き摺り、疲労を感じさせる重い足取りで向かう。

おそらく外に居る負傷者達を助けに向うのだろう。

その姿に私は手出しするつもりは一切なかったにも関わらずつい声を掛けてしまう。

「へえ、珍しいね？人間を助けるために妖魔を倒す妖魔なんて……まるで小説みたいだね？」

自分のした行為を認識すると同時に妖気を抑えることを止める。

気付かれてしまったのなら妖気を隠しても何の意味もないからだ。

「……お前は何者だ？何故ここに来た？」

レイは緊張し警戒した様子で私にそう問いかける。

「私？私はあなた達の敵よ？何でここに来たかって？探ってたら、街の中に居るのにいつまでも人を襲わない妖魔がいるじゃない、で、そ

の妖魔が別の妖魔と戦い始めたりなんかしているから見に来たのよ、  
要はあなたを見に来たの」

真実の中に嘘を混ぜて適当に返答する。

私が敵であると宣言した時の表情が強張ったのを見てさらに興味  
を深める。

普通活用していないのか無いのかは知らないが、妖魔が相手の実力  
を見抜いて怯えることなど無いからだ。

大体自信満々に突っ込んできて返り討ちにあっただけだ。  
それなのにレイは私を警戒している。

それも私の実力を感じ取って警戒しているフシがある。

これはイイ妖気探知能力に育ちそうだ。

そんな事を考えているとレイがジリジリと私から距離を取ってい  
ることに気づく。

勝てないなら逃げる。

それも相手に気付かれないようにゆっくりとだ。

「あら？逃げるの？」

声を掛けた瞬間に全力での逃走を開始する。

これもなかなか良い判断だ。

だけど残念ね、彼の足では私から逃げ切れない。

無防備な背中にじゃれつくように後ろから手を回す。

「ふふふ、あの人まだ生きてるみたいだけど？」

ガタガタと小刻みに震えているカワイイ彼にどんな反応するかと  
そんな事を耳元で吹き指差す。

「えっ？……本当だ……よかった」



師匠らしき人物が生きてる事に安堵したのが震えが止まり、逃走から一転負傷者の方向へと向かおうとする。

「ふーん、やっぱり助けに行くんだ？」

「頼む、俺は……どうなってもいいから、グリアさんをあの人を助けてくれ」

今までの怯えた様子から一変して覚悟ある強い意志を感じさせる言葉でレイは私にそう言う。

その言葉にレイが私の想像していた通りの性格であることを知り満足した私は

「イヤ」

からかう様に一度そこで言葉を止める。

私の言葉に戦いが避けられないと勘違いしたのか  
敵わないと知りながらも挑もうと臨戦態勢に入ろうとしていた彼に

「あなたが助けなさい。ふふふ、この場は見逃してあげるわ」

そう言い、開放する。

「またね」

笑いながら私はそう言い、呆然とした様子のレイを残しこの場を去るのだった。

## 妖魔と祭り

妖魔騒ぎが一段落してから早数日、俺はまだカタントの街に留まっていた。

クレイモアに見つかったのだから早く逃げた方が良い。

そう思うがどうしても街を立ち去ることができずにグリアさんとアリスとの生活を続けていた。

ここに来た時にはただ生き残りたいとだけ思っていた。

そのためにグリアさんに弟子入りして剣術を習い、少しでも強くなるように努力してきた。

だが、妖魔であることを知っても変わらず接してくれたアリス、不審人物としか思えない自分を受け入れ鍛えてくれたグリアさん、気の良い同僚達……

そんな人々に囲まれ、温かい生活に慣れてしまった今、その全てを捨てて再び孤独に戻る勇気は俺にはなかった。

しかし、ここは勇気を出すべきだ。

このままグズグズと留まっていれば今度こそクレイモアによって襲撃されるだろう。

その時街の人はどうなる？

俺の所為で犠牲者なんて出したくはない。

……それに街のみんなに妖魔であることを知られたくない。

なら、この街を出るべきだ。

これまで何度も出した同じ結論に思考は収束した。

それでも覚悟が決まらずじっとしていると外からいつもより賑やかな喧騒が聞こえてくる。

「そう言えば今日は祭だったな」

ちょうど良い、そう思う。

今日の祭りが終わった後街を出よう。

俺は自然とそう決意を固めたのだった。

街は陽気に賑わっていた。

妖魔騒ぎの所為で例年よりも数日遅れたが、今日は年に一度の豊穡を祈る祭りの日だ。

毎年近くの街からも大勢の人がやって来て大きな盛り上がりを見せるのだが、今年は特に明るい雰囲気か漂っているらしい。

誰が妖魔なのか分からない不安感、もしかしたらアイツが妖魔なのではないかという疑心暗鬼から解放された所為だろう。

妖魔騒ぎがあった直後に祭りを開催することに反対意見もあったが、こつこつ時こそ祭りを開くべきだという意見が通り開催の運びとなった。

この祭りには悪化した人間関係を清算し、水に流す、そう言う役割もある。

要は非日常に区切りをつけ、日常に戻るための儀式、それがこの祭りだ。

祭りと言っても別に縁日のように屋台が立ち並ぶ訳ではない。

屋台もない訳ではないが、各家庭で作った料理を持ち寄った物が中心だ。

俺も前世の知識を生かし唐揚げを作り提供した。

以前老いた鶏を締めた時に作ってあげたら気に入ったらしく今回も強請られたのだ。

こんな機会でもなければ鳥の唐揚げなんて作ることができないので俺も張り切って調理した。

と言っても所詮一般的な一人暮らしの男の料理レベルなのだから大したモノではないのだが

日も暮れ、夜中央広場には街のほぼ全ての人が集まっていた。

広場の中央には大きな篝火が焚かれ、供物が供えられた祭壇が作ら

れていた。

篝火の周りでは人々が談笑し、時には男女のカップルでダンスを踊っていた。

雰囲気としては祭りというよりは盆踊り、もっと言えば屋外のパーティーの方が近いかもしれない。

そんな楽しい雰囲気の中、俺は端の方にあつた石に腰掛け祭りの様子を眺めていた。

最初はグリアさんと一緒に兵士の同僚たちと飲んでいたんだが、酒が回るにつれてノンストップで次から次へと酒が注がれ山ほど飲まされたのだ。

さすがにあのテンポで飲み続けられないと逃げ出したのだ。

隣の村で作られたエールをチビチビと飲む。

暴力的とまで言える芳醇で粗野な匂いと鋭くどっしりとした苦味、そして口に広がる麦芽の深いコク、キレこそ悪いが不思議といつまでも飲んでいたいと思わせる味だった。

この街に来てからこの味にもだいたい慣れた。

飲みに行った時に今では逆にこの味がないと落ち着かないぐらいだ。

そんなエールが今日はいつもより苦く感じる。

これを飲み終わったら荷物をまとめ出て行こう、そう思う。

直接別れは告げない。

会えばこの街から出て行きたくなくなる。

だから手紙を残した。

「……大丈夫だ」

未練はある。心残りもある。だが遣り残した事はない。僅かに残ったエールを煽る。

ゆっくりと立ち上がり、広場を後にする。

一度だけ振り返り、その光景を目に焼き付ける。

隠しておいた荷物を回収し街の外へと向かう。

誰もいない門を潜り、一度立ち止まる。  
振り向かず、振り切るように一歩足を踏み出す。

「行っちゃったの？」

後ろから声を掛けられる。

アリスだった。

誰にも気付かれていないつもりだったが気付いていたらしい。

「……ああ」

それだけしか言葉にできなかった。

「この街でこれからも一緒に暮らしましょうよ」

「……すまない、そしてありがとう」

「そう、どうしても行くのね……」

アリスの声は気丈に振舞っていたが、僅かに震えていた。  
それに気付かないフリをして再び足を踏み出す。

「本当に行っちゃったんだ？」

突然軽い調子でそう問われる。

いつからそこに居たのかソイツは門の上に腰掛けていた。

「貴様は!？」

「ふふっ、久しぶりって程じゃないけどまた来たわ」

門の上から飛び降り悠然と佇んでいたのはこの前のクレイモア  
だった。

剣を抜き構える。

しかし、こうして改めて相対すると理解る。  
勝てる訳がない、と

「……何しに来た!？」

「あら、そんなに緊張しちゃ嫌よ、ちょっとお話しに来ただけなんだから」

「クレイモア……」

突然降ってきた銀眼の美女にアリスは呆然と呟く

「ふふっ、そうよ銀眼の魔女とも呼ばれているわね?」

そう言いながらクレイモアはアリスへと近づいていく

それを見ていながら俺は何もできない。

理性的な部分ではクレイモアは人間を傷つけることができない筈だと思っっている。

だがそれ以上に圧倒的な強者と向かい合っている恐怖から動くことができない。

クレイモアはアリスのすぐ側まで歩み寄ると優しく頭を撫でる。

「ねえ、あなたは彼に出て行って欲しくないと思っ?」

アリスは黙ったまましばしクレイモアを見つめ、コクンと頷く

そう、とだけ返しクレイモアは俺に問う

「この子はこう言ってるけど、あなたはどっ?」

「……居たいさ、居たいに決まってるだろ!？」

「なら、何も問題ないじゃない?」

「それはお前らが!」

「あら、私はあなたに手出しをする気も組織に報告する気もないわよ

「？」

クレイモアがとんでも無い事を言う。

だが、それが本当だとしたら……

「……そんなのが信じられるか」

「私は組織のナンバー5ジェシカ、この意味が理解するか？」

組織のナンバー5!?

強いとは思っていたが一桁ナンバーの上位勢だったのか……

いや、それをここで告げる意味は何だ？

いつでも殺せるぞ脅しか？

……違う、いつでも殺せるのに動いてないって事が

「……ふうん、その様子だと意味が理解したみたいだね？それにしてもどこで知ったのかな、隠してはないけど外に広がるような話でもないんだけどな？」

同時に今まで隠していた妖気を開放する。

それだけで頭に殺されるイメージが奔る。

震えながらもいつの間にか下ろしていた剣を咄嗟に構え直す。

まあ、別にいいけど

そう続け、あっさりと妖気を抑える。

「ハア、ハア、ハア……」

「まっ、組織はあなたの事を知らない、私も手出しする気はない。で、私としては街を出てどっかであっさりと殺されるよりはこの街で暮らしてくれた方が面白いのよ。それにこの街は大陸の端っここにあるから、隠れとけばまず見つからないわよ？」

固まっている俺にクレイモア「ジェシカとか言ったかーはまくし

立てる。

何故かはよく分からないがどうやら本気でこの街に留まって欲しいらしい。

ある意味理想的なのか？

俺はこの街でまだまだ暮らしたいし、ジェシカにも殺されない、それに他のクレイモアにも見つかりにくいらしい

とは言え事実上選択肢なんて無い。

まあ、俺の望みにも適ってるから問題なんてないのだが……

そして、俺は新しい自分の決断をジェシカとアリスに告げるのだった。



## 妖魔と盗賊

この街に留まることになってから早、二月

あの妖魔によって引き起こされたあれこれも治まり街は日常を取り戻していた。

そんな中俺もいつも通りグリアさんと日課の朝練を行っていた。

朝練の締めに行う模擬戦

グリアさんと俺は時に激しく、時に静かに木刀を交えていた。

ここ最近、訓練の成果が出てきたのか以前よりも大分打ち合える時間が長くなった。

それでも俺はまだ一度もグリアさんから一本取った事がなかった。

妖魔の力を利用した力攻めも練りに練った奇策も、もちろん正攻法も全てを軽くないなされてしまうのだ。

今日こそはとは思うものの同時に今日もダメかも知れないという弱気が顔を覗かせる。

そして、今日もいつも通りに弾かれた木刀が空を舞う。

一見いつも通りの景色に思える。

だが、違う。

いつもであれば俺の手の中には何も無い。

しかし俺は未だに木刀を握っていた。

「ムッ……………」

「……………えっ?」

あまりにも予想外の出来事に思考がうまく働いてくれない。

「……………勝った?」

呆然と呟く

不意に視界が回り背中に衝撃を感じる。

何が起こったのかわからない。

いつの間に奪われたのか木刀をグリアさんに突き付けられていた。

「……………油断をするな、バカモノ」

「……………はい、ありがとうございます……………」

分かってしまえば簡単な事だ。

これはあくまで模擬戦だ。

剣道の試合ではない。

だから剣を失おうと当然試合は続行する。  
当然だろう。

これは実戦に準じた訓練なのだから  
そして一本取って呆然ととしている間に投げられた、と  
これはいつもやっていることなのに油断した俺が悪い。

だが、それでもだ。

俺ついにグリアさんから一本取ったのだ。

締まらない結果だとは言えその事実には代わりはない。

だからこそ油断した自分が恨めしい。

そんな事を思いながら立ち上がる。

そこには既にグリアさんの姿はなかった。

いつも通りのさっさと家に戻ってしまったのだろう。

「……………今日ぐらい待っていてくれてもいいのに」

ついそんな愚痴が零れる。

気持ちを切り替え俺も家へと向かい歩き始めるのだった。

家に戻ると既に朝食の準備は終わっていた。

思った以上にボーっとしていた時間が長かったのだろう。

アリスに手伝えなかったことを一言詫びる。  
すると、想像していなかった返答が返ってくる。

「ねえ、今日何か良い事あったの？」

アリスは満面の笑みでそう俺に尋ねたのだ。

「えっ？何でそう思うの？」

アリスが言ってるのは朝練でグリアさんから一本取ったことだろうか？

だが、今の俺を見てそれを察する事は難しいと思う。  
何せ、油断から結局負けてしまった事で沈んだ気分だったからだ。  
自分の態度から良い事があったと判断する事は困難だと思う。

「んー、おじいちゃんがとっても上機嫌だった物、あっ、もしかしてついに勝ったの？……いや、違うわね。それだったらレイお兄ちゃんも喜んでるわ。と言うことは一本取ったのに油断して負けたのね」

アリスがどうだと言わんばかりにまっ平らな胸を張りながら名推理を披露する。

恐ろしいことにほぼ完璧に合っていた。

……これが女の勘というモノだろうか、本当に恐ろしい。

「……ハハハ」

適当に苦笑いで誤魔化す。

……誤魔化せてないが

アリスは分かっているといった風な優しい顔で頷き

「今晚はじゅせつだね」

そう言うのだった。

太陽も傾き始めそろそろ日も暮れ始めようとしている頃  
邪魔な樹の枝を払い、集ってくる虫を払いながら同僚のセネルと森  
を歩いていた。

話は今日の午前中に戻る。

朝食を食べ終わりいつも通りに俺は詰所へ向かったのだ。  
始めは良かった。

今日は詰所で待機しておく日だったから事件もなく暇を持て余し  
ていたんだ。

そんな俺の元に不穏な話が舞い込んできた。  
街に行商にやってきた商人が

「盗賊を街道で見た」

と飛び込んできたのだ。

もし、この話が本当ならば早急に対処しないとマズイ  
何せただでさえこの街はついこの間まで妖魔騒ぎがあったことで  
人が寄り付かないのだ。

その上盗賊まで出るとなれば完全に人が来なくなる。  
そうなると街の備蓄がさすがに厳しいことになる。

それ以前にこの街が襲われてしまえばどんな被害が出るか分から  
ないのだ。

まあ、この街を攻めてくる事は考えづらい。

この街は近辺では最大規模の街でしっかりとした城壁を備え兵士  
も十分数居るのだ。

盗賊にとってはこんな街にわざわざ攻め込む程旨味はないだろう。

そう判断した隊長はとりあえず俺とセネルを偵察に行かせることを決めたのだ。

「で、俺はこうして道なき道に行くことになった、と」

「どうした？と振り返ったセネルに何でもないと返し再び黙々と歩く」

セネルは猟師の息子でこうした偵察もお手のものらしい。

そんなセネルが誰かが通った痕跡があると街道から外れて森の中へ向かっているのだきつと何かあるのだろう。

……正直、俺の目には一体何がどう違うのか全く分からないが

そうこうしながら道なき道を数十分程歩いただろうか？

セネルが唐突に止まった。

「んっ、どうした？」

俺がその声を掛けると

「シッ！、静かに誰か居る」

そう静かにだが鋭い声で注意される。

やはり俺には分からないがセネルに従い黙って周囲を探る。

セネルが音を立てないようと注意した後、静かに移動を始める。

俺もセネルを見習いできるだけ音を出さないように試みる。

が、どうしても所々で枝を折ってしまったり葉が擦れる音を立ててしまう。

その度にセネルが緊張するが、どうにか気付かれることなく移動できたらしい。

セネルが見ると言わんばかりに指差す。

そこは森が若干開けており、木が生えていない空間が広がって

た。

その空間にはテントが立ち並んでいた。

そして道が接続している場所にはガラスの悪い、どこからどう見ても盗賊と行った風な貧相な男が一人立っていた。

盗賊だ

そう思う。

どうやら行商人の言う通り盗賊がやってきていたらしい。

それもテントの数から想像するに想像以上の数の盗賊が居るらしい。

他にはどこから攫ってきたのか数人の子供が檻の中に囚われているのが見える。

檻の側には盗賊らしき人物が二人で何かゲームらしき事をやっていた。

助けなくてはそう思う。

しかし同時にこれは自分たちだけではどうしようもない、そう思いセネルに声を掛ける。

「……引くぞ、これは俺達にはどうしようもない」

「いや、待て。人の気配を感じない。チャンスだ」

そう言われるとテントの数は多いが人の気配は感じない。

おそらく周辺の村でも襲っているのだろう……最悪の気分だ。

それは置いておくとして、今俺達には二つの選択肢がある。

一つはこのまま撤退し確実に情報を持ち帰る事、安全だし確実だ。

もう一つはここにいる盗賊を片付け子供達を救出する事だ、危険だが盗賊の人数を減らせるし何か情報が手に入るかもしれない。

それに何より子供達を救うことができる。

任務から考えればこのまま撤退するべきだろう。

だが、ここで放っておけば子供達に何が起こるか分からない。

そして俺達は子供達を救出する事を選択したのだった。

とは言えただ突っ込むのも無謀だろう。

確認できている範囲でも一人とは言え相手の方が人数が多いのだ。

まあ、鍛え方が違うから3人のみなら問題はないような気がしないでもないが……

とりあえずちゃんと人数が確認できていない現状では何も考えずに突っ込むという選択肢はない。

ならば分断して叩くべきだろうが、あまり時間を掛けることもできない。

いつ盗賊達が戻ってくるのか分からないからだ。

となるとシンプルに行くしか無いだろう。

現状の位置関係は時計で考えると六時方向に門番一人、中心に檻と見張りが二人、そして俺達は三時方向だ。

分断するのなら中心にいる一人を一二時方向に誘導すればいいだろう。

誘導方法は単純だ。

単に石を投げ音を立てただけだ。

それでも不審な物音を聞いた見張りの二人は確認のために警戒しながらゆっくりと移動することになった。

その隙に背後からセネルが門番を弓で射る。

同時に俺は門番に向かって走り、門番に止めを刺す。

幸いな事に門番は最初の矢を受けた段階で事切れていたらしく呻き声一つ上げさせる事なく倒すことに成功する。

その確認もそこそこに俺達は見張りの二人の方へと静かに走る。

「なっ!?!」

さすがにある程度近づいた段階で気付かれてしまったがそのまま剣で斬る。

予想外の出来事に見張りの二人は何もできないまま斬られる。

「ぎゃああああああ!!!!!!」

絶叫が森に響き渡る。

俺達は周囲を警戒しながら持ってきていたロープで盗賊を縛り上げる。

どうやらこの場にはこれ以上の盗賊はいないらしく、誰もテントからは出てくることはなかった。

周囲のテントを軽く検め、隠れている奴がいないか確認しながら役に立ちそうな情報を探す。

一通り確認し終わった後、近くのテントで見つけた鍵で檻から子供達を開放する。

「大丈夫か？」

そう尋ねると、この状況の中で怯えるだけだった子供達はビクビクと怯える。

重ねて大丈夫だよ、と言いながら優しく抱きしめ頭を撫でてやる。

ようやく緊張の糸が解けたのか子供達は大声で泣き始めるのだった。

しばらく泣いている子供達をあやしていると生きていた盗賊を尋問していたセネルが慌てた様子でやってくる。

「マズイ事が分かったぞ、どうやらこの奴らカタントの街を襲ってやがる!!」

「何だっつて!!」

事態は更に混乱を深めていくのだった。



## 襲撃と慟哭

街が燃えていた。

子供達をセネルに任せ一足先に街に戻ってきた俺の目に入ったのは燃えている街だった。

悲鳴が聞こえる。

絶叫が聞こえる。

剣戟が聞こえる。

呻き声が聞こえる。

アリスは？グリアさんは？街のみんなは？

無事を祈って街へと走りだす。

南門から街に入る。

盗賊によって打ち壊されたのか門の一部が破損していた。

付近には死体が転がっていた。

盗賊に注意しながら街の中へと進む。

いつもなら人が行き交っている大通りが今は地獄だった。

しばらく進むと一際ポロポロになっている通りを見つける。

盗賊と兵士がやりあったのだろう。

そんなに時間は立っていないようだ。

その時視界の端で何かが動いたような気がした。

その方向をよく見る。

「グリアさん？」

壁に凭れ掛かり辛うじて立っているグリアさんの元へと俺は走る。

不幸中の幸いだろうか？

近くに動く事のできる盗賊の姿は無い。

激しい戦闘があったのだろう。

敵も味方も等しく地に伏し、誰一人として動く者は無い。

そんな中を俺は走る。

近づくに連れてグリアさんの傷の様子が明らかになってゆく。  
朱く染まった身体、一人の人間から流れ出たとは信じられない量の  
足元の血溜まり。

「…………グリア、さん…………」

立っている事自体が信じられないような状況だった。  
もうダメだ。

そう理解ってしまう。

「…………レ、イか？」

それなのにグリアさんは俺が来たことに反応したのだ。  
か細く聴き逃してしまいそうな程小さな声だった。  
それでも確かに反応したのだ。

「はい!!レイです。あなたの弟子のレイです」

「…………うる、せえ、聞こえてるよ」

それは奇跡だった。

生きていくことすら信じられない状況で力ないとは言え確かに会  
話しているのだ。

一瞬でも気を抜いたら死んでしまっ。

そんな中、気合だけで話しているのだ。

グリアさんの根性が生んだ小さな奇跡だった。

「…………俺、はもうダメ、だ…………アリス、を頼む…………」  
「そんな、グリアさん…………」

最期の気力を振り絞ったのだろう。

グリアさんはそれだけ言い残すと苦しげに噎せ、力無く倒れる。

俺は咄嗟にグリアさんを支え、出来る限り優しくその身を横たえ

る。

茫然とグリアさんの手を握ると振り払おうとする。

しかし、その手には既に力はなく振り払うことすらできない。

「ちっさと行け！……まだ終わっ、てないん、だろ」

「……は、い!!行ってきました」

俺がそう言い確かに離れていく事を確認したグリアさんはゆっくりとその目を閉じるのだった。

同時に心臓の鼓動も静かに止まったのだった。

この時ほど自分が妖魔であったことを恨んだ事はない。

妖魔で無ければ寝ているのだ、と自分を騙す事もできた筈なのに。

この敏感すぎる聴覚は心臓の鼓動が止まった事を容赦なく自分に伝えてきた。

それはグリアさんの死を否応もなく実感させるものだった。

その事を振り払い走りだす。

「アリス……!!!」

アリスを探し俺は街中を走り回る。

その過程で女を襲っていた盗賊を二人ほど切り捨てた。

女に集中していた盗賊を俺は何の抵抗もなく切り捨てる。

助けた女を最低限の対応で逃がす。

盗賊に襲われていた姿にアリスを重ねてしまい気ばかりが焦る。

「アリス……!!!」

南から街に入り既に北門も近い。

襲撃から逃げようと思ったならば北門を目指している筈だ。

盗賊達も北門に近づく程その人数を増やしていた。

近くから剣戟の音が聞こえる。

街の兵士が盗賊と殺り合っているのだろう。

俺は音のする方へと走っていく。

そこでは10人の兵士が30人程の盗賊と殺り合っていた。

兵士の後ろには逃げ遅れたのであろう女子供が数人蹲っていた。

兵士達は既にボロボロだった。

住人を護るといふ確固たる目的がなければとっくの昔に敗走して  
いたであらう。

逆に盗賊側は人数を生かしたぶるようにじっくりと攻め立てて  
いた。

中心にはこの盗賊のボスであらうか一際巨大な男が大声で指揮を  
執っていた。

同僚の兵士達が俺の存在に気付いた。

同時に俺は比較的手薄だった敵左翼に飛び出す。

「走れ!!」

目の前の盗賊の頭を切り飛ばし叫ぶ。

後ろに居た兵士達は住人を連れ走りだす。

突然の事態の変化に盗賊は反応しきれしていない。

即座にもう一人盗賊を切り捨てる。

「ギヤアアアアア」

盗賊の絶叫が辺りに響く。

その声に驚いたのか前線にいた盗賊が一瞬気を逸らす。

その隙を逃さず兵士達が盗賊を一気に切り倒し左翼へと走りだす。

住人を逃がせるだけの隙ができたと判断した俺はそのまま敵のボ  
スへと突撃する。

間にいた盗賊を斬る。

剣を避けようとしたのか咄嗟に尻餅を付く、剣が盗賊の腕を切り裂

く

浅い

だが、十分だ。

盗賊のボスへと渾身の突きを放つ

が、さすがボスと言った所だろうが、咄嗟に片刃の曲刀で突きを逸らされてしまう。

即座に距離を取る。

不意打ちに失敗したのなら囲まれる前に下がるべきだからだ。

追撃すればボスを討てたかも知れないが、それよりも囲まれて殺される可能性の方が高い。

ボスは悠々と頬に滴った血を指で拭い舐める。

どうやら先程の突きは掠ってはいたらしい。

左翼を突破した兵士と住人に合流する。

「レイ、助かった!」

「おう、他の奴らはどうした!」

「北門付近で住人達を守ってる!」

「そうか、アリスもそこに居たか?」

ボロボロになっていても気合は十分らしく、躊躇なく剣を構え盗賊と相對する。

住人達は逃がしたとは言え盗賊達を放っておけば追いつかれるかもしれないし、それでなくとも他に被害が出てしまっだろう。

ならば、どれだけボロボロであろうとここで逃げる選択肢はない。

そして、どうやら生き残っている者達は北門に集合しているらしい。

アリスもそこに居るのではないかと兵士の一人に尋ねる。

「……いや、残念だが俺は見えていない」

「俺もだ……」

「そうか、いや、分かった。とりあえず奴らから街を護るぞ!!」  
「おう!!」

兵士達はアリスが北門に居たかどうか知らなかった。

この混乱だ。

人一人見逃していてもおかしくはない。

……アリス、そこに居てくれよ？

「へっへっへ、やるじゃあ、ねえか」

ボスが腹に響くドスの利いた声で言う。

盗賊側も態勢を整え終わったらしい。

仲間が殺されたって言うのにニヤニヤと嫌な笑いを貼り付け、盗賊どもがこちらと向かい合う。

人数は盗賊の方が多い、さらに兵士達は既にボロボロだ。

ならば、イニシアチブを相手に渡すのは愚行だろう。

そう思い、不用意に近づき過ぎていた盗賊の一人に斬りかかる。

盗賊は慌てて対応するが、僅かに遅く太ももを切り裂く。

それを合図に戦闘が始まる。

「ヤロオ、テメエら殺つちまえ!!」

盗賊のボスが喚くように指示を出す。

それに従い盗賊どもが迫ってくる。

人数では圧倒的に負けているが、こちらは兵士として訓練を受けている。

個人としての練度も連携も盗賊を上回る。

と言うか盗賊達は連携なんて全く考えずに動いているらしく、所々で互いに邪魔をしあい隙を晒している。

それからの戦いは厳しいものだった。

こちらは基本的にひたすら凌いでいるだけだ。

その中でたまに生じる隙を突いて確実に一人ずつ殺していく。

最初の内は順調だったが、元から限界が近かった仲間達は既にいつ倒れてもおかしくない状況だった。

それでも戦局は膠着していた。

当初与えた被害に盗賊どもがビビったからだ。

そのおかげで攻めに必死さが無い。

だからこそ辛うじて戦線を維持することができていた。

その状態に痺れを切らしたのかボスが出てくる。

ボスに良い所を見せようとしても思ったのか恐怖からかは知らないが攻撃が激しくなる。

今も一人やられかけたが辛うじてフォローが間に合った。

疲れきってミスをしてピンチに陥り俺が無理にフォローする。

結果別の所で無理が出て……

そんな悪循環に入りかけているのを妖魔の力を部分的に一瞬だけ開放する事で凌ぐ。

妖魔であることを隠しながら戦うのはそろそろ限界だった。

それでも俺は……

ボスと剣を交える。

先程からボスも前線に出てきていた。

既に盗賊の数は半減している。

だが、こちらも一人が無理な攻めをした結果倒れてしまった。

不幸中の幸いか盗賊二人を道連れにすることができた。

「やるじゃねえか、何でそんな頑張るんだあ？……もしかしてお前、  
レイお兄ちゃん”かあ？」

戦いの最中、盗賊のボスが言う。

嫌な予感が背中を奔る。

戯言だ！

そう振り払い袈裟懸けに打ち下ろす。  
が、大振りになってしまっていたのか、ボスに曲刀で逸らされてしまった結果大きな隙を晒してしまふ。

「…………クソっ」

急いで態勢を立て直すが相手の次の一撃が早い。  
死を覚悟する。

……俺はこんな所で死ぬのか？

まさかクレイモアの世界に来てクレイモアや覚醒者じゃなくて盗賊に殺されるなんて……

そんな事を思う。

曲刀が振り下ろされる。

その軌道は確かに俺を切り裂く筈だった。  
間に腕が差し出される。

予定していない衝撃に曲刀の軌道が変わる。

腕を切り落とし俺のすぐ脇を曲刀が掠っていく。

兵士の一人が俺の危機に身を投げたのだ。

「レイ、後を、街を頼むー！」

壮年の兵士だった。

よく俺を飲みに入れて行つては奥さんの愚痴に付き合わせた。

娘の結婚式を見るまでは死ねないって言ってたのに……

俺は彼のおかげで態勢を立て直す。

そして見てしまふ。

俺を救つたために彼が殺される瞬間を。

激しい衝動が湧き上がる。

衝動のままに飛びかかりそうになるが、必死に自制する。

ここでこのまま衝動に任せて動くのは彼の死を無駄にする事だ。



そう言い聞かせる。

彼の死は俺の責任だ。

俺のミスが彼の死を招いた。

だが、だからこそ俺は生きて盗賊達を倒してみせる。  
そう誓う。

「へっへっへ、死んじまったな？なあ、”レイお兄ちゃん”よお」

盗賊のボスが癪に障る声で言う。

嫌な予感、いや確信がある。

聞きたくないそう思う。

ボスは俺の心境なんて気にせず続けて言う。

「そついやあ、あの娘も”レイお兄ちゃん、レイお兄ちゃん”って言うてたなあ、なあ”レイお兄ちゃん”？」

「何を、言ってる？」

「アリスとかいう娘だったかあ？お兄ちゃんが助けてくれるってうるさく抵抗するからつい殺っちまったんだよねあ」

なかなか可愛かったのに勿体無かった、そう盗賊のボスが嗤いながら続ける。

それを聞いた瞬間には既に俺は盗賊のボスへと飛びかかっていた。

頭には街を守るといふ意志も誓いも吹っ飛んでいた。

ただコイツを生かしておけない、そう思った。

「バカが！」

ボスが嗤う。

必殺の一撃が振り下ろされる。

腕で無理矢理逸らしてそのまま切り裂く。

今までの戦いで限界を迎えていたのか剣が折れる。

「なっ!？」

想像していなかったのかボスは啞然とした表情で傷を見る。  
まだしぶとく生きていた盗賊のボスの頭を丸呑みする。  
盗賊のボスの記憶が流入してくる。

……不快だった。

ありふれた不幸から楽を求めて盗賊へと身を落とす。

同情の余地が無いほど殺して奪う。

この街には妖魔討伐用の資金を狙ってやってきたらしい。

なるほど、あれはかなりの大金だ。

その大金を用意したにも関わらず使わずに妖魔を倒したからそれを狙ってきたのだ。

……俺のせいか？

折れた剣を捨て、腕に刺さったままだった曲刀を引き抜く。

腕が痛い。

だが、すぐに気にならなくなる。

再生したのだ。

「ゲアアアアアアアア!!!」

咆哮する。

驚く声が聞こえる。

いつの間にか妖魔の姿に戻っていた。

だが、そんな事は既に興味がなかった。

近くに居た衝動のままに盗賊へと斬りかかる。

そこからは記憶が曖昧だ。

分かっているのは傷つくことを全く気にせずひたすら戦い続けたことだけだ。

気付いた時には周囲は血で朱く染まっていた。

盗賊の死体が散乱している。

幸い兵士の死体はない。

俺はどうやら最低限のラインは守っていたらしい。

自分の身体を見下ろす。

ポロポロだった。

再生した腕は肩からなくなっていた。

腹には剣が突き刺さったままだった。

傷がない場所がない、と言ってもいい程傷だらけだった。

そんな俺を遠巻きに人々が囲んでいる。

団長がいる。

同僚の兵士がいる。

武装した街の住人がいる。

ごく少数ではあるが盗賊もいた。

いずれも恐怖に目が濁っていた。

盗賊から街を守るうとしたなんて事実は関係ないらしい。

明確な敵意の基、手に持った武器を俺に向けていた。

人間の敵が現れたら今まで襲っていた盗賊とでも手を組む。

……人間は強いな

自嘲とともに呟く

深い虚無感が俺を襲う。

何のために戦ってきたのか？

既にグリアさんもアリスも死んだのだ。

死んでしまったのだ。

団長が俺を最大限に警戒しながら慎重に近寄ってくる。

その目もまた強い恐怖と敵意を宿していた。

じつと見つめ合う。

沈黙が痛い。

耐え切れなくなった俺は走り出す。

逃げ出したのだ。

「あっ、おい、待て!!」

慌てた団長の声が聞こえる。  
振り向かず走り抜ける。  
街から飛び出す。  
当てもなく走る。  
気付いた時には暗闇の中倒れていた。

茫然と空を見上げる。  
呆れるほど空はいつも通りだった。  
その時ようやく近くに気配があることに気づく。  
ジェシカだった。  
何でここに居るのは知らない。  
だが、ちょうどいい。  
そう思った。

「……殺してくれ」

そう頼む  
耐え切れずに逃げ出したが、これ以上生きている意味なんてない。  
あそこで死ぬべきだったのだろう。  
ジェシカが近づいてくる。  
黙ったまま大剣を振り上げ振り下ろす。  
それをただ見守る。  
鈍い音と共に大剣が頭の横の地面に突き刺さる。

「何で……？」

「イ・ヤ・よ、あなたを殺すなんてね」  
どうやら殺してくれないらしい。  
クレイモアのくせに妖魔を殺さないらしい。  
妖魔を殺さなかったクレイモア

妖魔を受け入れてくれた少女  
不審者を鍛えてくれた老人  
人を守ろうとした妖魔

全てがおかしかつたのだ。

ただ夢が覚めてしまったのだろう。

それでも今この瞬間俺はまだ生きている。

「……なあ、俺は生きていて良いのかな？」

「そんな事は知らないわ」

「そうか」

「……でも、私はあなたに生きていて欲しいわ」

「……そうか」

止めどなく涙が溢れてくる。

慟哭が空へと溶けていく。

## 変容

目が覚めるとそこは知らない天井だった。

声に出したい所だが喉が枯れていて声が出ない。

頑張れば掠れ声ぐらいは出せそうだがそこまでする事じゃないだろ。

目が覚めたが俺はほとんど身体を動かさなかった。

何故？

そんな疑問を抱く。

唯一動かすことのできた目玉を動かし身体の方を見る。

真っ白だった。

……いや、完全には真っ白ではない、所々赤く滲んでいる。

特に左肩の辺りは真っ赤に染まっていた。

俺は全身を包帯で包まれていた。

左腕は肩からなくなっていた。

ここまで来て漸く何があったのかを思い出す。

……全てを失った。

そんな空虚な喪失感が俺を襲う。

思い出されるのは盗賊を血の海に沈めた時の事だった。

盗賊を殺した事に後悔なんてない。

だが……

溢れてくる本能に任せて暴れた。

押さえようのない本能に身を委ねた。

……そして鮮明に思い出されるのだ。  
生き生きとして甘露な血の味を！  
えもいわれぬ程に濃厚な臓物の味を！  
他の何物にも代えがたい、そう思ってしまった。  
今まで摂取していた腐りかけの血など泥水のような物だった。  
戻れるだろうか？  
無理、かも知れない。  
そんな諦念が頭を過る。

血と臓物と同時に脳を貪ったためだろうか？  
盗賊どもの記憶が何となく分かる。  
仕方なく盗賊に身をやつした者が居た。  
否応なく巻き込まれた者が居た。  
家族が待っている者も居た。  
もちろん同情できない悪党も居た。  
だが、その何れにも全く罪悪感を抱けなかった。  
そんな人物だったという記録としか認識できなかった。  
その事が何よりも恐ろしい。  
俺は心まで化け物になのか、と

「アリス……」

既に居ない存在の名を掠れた声で呟く。  
俺を受け入れてくれた人間の名前を呟く。  
涙が溢れそうになる。  
だが、泣くことは許されない。  
襲撃の原因の一端は自分なのだ。  
盗賊の記憶から理解る。  
盗賊が狙ったのは用意していた妖魔討伐の依頼料だった。  
自分が妖魔を倒してしまったからこそ街に残った物だ。  
依頼料は高額だ。

それが現金という持ち運び易い形でまとめてある。  
さらに兵士にも死者が出ておりいつもより襲い易い。  
格好の獲物だった。  
俺が妖魔を倒さなければ……  
あるいはもっと早く倒していれば……  
そんな風に思う。

ドアが開く

誰かが入ってくる。

誰が入ってきたのかは見えない。

動かせる視界の外にドアがあるからだ。

「あら、起きたのね？」

そんな声と共にジェシカが俺の側に来る。

「……「JJ」は？」

「近くにあった山小屋よ、倒れたあなたを運ぶのは大変だったんだか

ら」

「そうか……ありがとう」

この治療をしてくれたのもジェシカなのだろう。

その意味も込めて感謝を表す。

ジェシカは柔らかく笑った後、俺に向かって手を翳す。

「？」

何をしているんだ？

そんな意志を込めてジェシカを見つめる。

何か変な感触がした後、唐突に激痛が走る。



「……」

声にならない悲鳴を上げて身を振る。

しばらくこの世の物とは思えない激痛にのたうち回っていると段々と治まってくる。

例えるなら爪を連続で剥がれるような痛みが小指をタンスの角にぶつけた痛みが連続で来るぐらいに。

「何しやがる!?!」

激痛の波が治まって来た俺はジェシカに掴みかからんばかりの勢いで糾弾する。

そんな俺にジェシカはシレッとした表情で言う。

「ただの治療よ?」

「あんな治療があるか!?!」

「あら、でも元気になったでしょ?」

そう言われてみると目が覚めた直後は動かす事もできなかった身体が動かせるようになっていた。

余りの激痛に全く気付いていなかった。

……仮に気付いていても感謝できたかどうか微妙だが

とりあえず治療だった事は理解できたので何をしたらのか尋ねる。

「……何をしたんだ?」

「妖気の流れを整えたのよ、痛かったのは繋がっていなかった痛覚が繋がったからでしょうね」

「……そうか、非常に言いたくないんだがありがとう」

「ふふっ、どういたしまして」

ジェシカは俺の妖気を操作して治療を行ったらしい。

そう言われてみれば激痛の直前に体内の淀みが一気に動いた気がする。

妖気がちゃんと流れるようにすることで俺の妖魔としての治癒能力を促進したのだろう。

詰まって機能不全に陥っていた下水道をちゃんと流れるようにしたって感じだろうか？

俺は話をするために身体を起こそうとする。

肘について身体を持ち上げようとしたのにその肘がない。

その時初めて実感した。

俺は左腕を失ったのだ、と

「なあ、左腕は治せないのか？」

俺はダメだろうと思いつつもジェシカにそう尋ねてしまう。

俺の質問にジェシカは

「治るんじゃない？」

「……………えっ？」

「だって、あなた妖魔じゃない？」

そう軽く答えるのだった。

そうだった俺は妖魔なのだ。

この程度の傷であれば治せるのだろう……多分

詳しく聞いてみると時間が経ち過ぎなければ再生できるのではという事だった。

そして治療と左腕の再生のために妖力操作を覚えてくれることになった。

まずは妖気を動かす感覚を掴むことからという事でジェシカが手本を見せてくれる。

ジェシカがゆっくりと妖気の歪みを正常な状態に戻す。

すると最初の治療では治りきらなかった小さな傷が癒える。どうも完璧には治りきっていないらしくあの傷の治りかけの痒さが全身を襲う。

掻き篋りたい、そんな衝動を抑えながら俺も真似をして傷を癒していく。

最初は当然上手くないかない。

しかし、しばらくやっていく内にドンドン上達していく。

……と言うより痒みが治まってきたため集中できるようになったためだろうか？

自分の体内、自分の妖気だけあってジェシカの妖気操作にかなり近づく事ができた。

が、残念ながらジェシカに追いつく事はできなかった。

他人の妖気なのに俺より精緻に操作できるって、と落ち込んだのは内緒の話だ。

その訓練の中で思ったんだ。

……最初の治療、一気にやる必要ないじゃねえか!!

あれから数日最低限の治療と再生を終わらせた俺はジェシカと共に歩いていく。

クレアに連れられたラキのように

左腕の再生はまだ完全ではなかったがそれ以外は完治したと言っているだろうか。

旅をする事に問題はない、そう判断できた。

一刻も早くカタントの街から離れたかった俺は無闇にこの山小屋を離れる事にしたのだった。

そんな行く宛の無くなった俺に次の街まで同行しないか、とジェシカが申し出てくれたのだ。

俺を放っておけなかったのだらうと思う。

そして俺はその好意を受けた。

だから共に歩いているのだ。

だが会話はない。

たまに俺を気遣うような視線をジェシカが寄越していた。

そしてその度に何か言おうとしてどう声を掛けるべきなのか分からず諦めて無言でいる事にも気付いていた。

それに対して俺はどうにも気分が上がらなかった。

守れなかった、そんな罪の意識がある。

俺が居なかつたら、そんな罪の意識もある。

そして何よりも自分が化け物である、という事が恐ろしかった。

自分は人間を好き好んで喰らう化け物なのだ。

再生した左腕を見て思う。

普通の人間は手足を失つたらそれまでだ。

だが、俺は……

そんな風に自己嫌悪に陥っていた。

もう我慢するのをやめて、普通の妖魔として生きてどっかのクレイモアに殺されればいいんじゃないかな、そんな考えが頭を過ぎり必死に否定する。

こんな状態で自分から会話をしようという気分にならないのだ。

その上、被害妄想と言っても良いだろうが、話し掛けた挙句拒絶されるの恐れているのだ。

相手が話したがっているのは分かっているにも関わらず嫌な考えがどうにも思い浮かぶのだ。

根本的に俺はどうにもジェシカを信頼しきれないのだ。

だってそうだろう？

俺は妖魔でジェシカはクレイモア、一体何故俺を助けてくれたのか全く分からないのだ。

……だが、それでも助けてくれた事は事実だ。

だから信頼したいと思う、でも何を考えているのか分からない。

聞けばいい、そうも思う。

結果殺されることになっても仕方ない事だとも頭では思う。

だが身体が動かないのだ。

……俺は臆病だ。

そう改めて自己嫌悪に陥りながらこの痛い沈黙を維持し続ける。そんな気不味い雰囲気、どうにかするべきだと思う。俺達はただ黙々と歩き続けていた。

日も沈み、夜

結局俺達は一日中ハイペースで歩き続けた。

妖魔である俺で無ければ死にかねないような強行軍だった。それでも化け物である俺にはそう問題にならない。

こんな些細な事でも人間では無いのだと改めて思い知らされる。

そんな自分を気遣ってくれたのだろうか

ジェシカが模擬戦を提案してくる。

この提案はここ数日俺が戦闘できる程度まで回復してからは毎日行なっている事だった。

身体を動かせば少しは気分が紛れる。

少なくとも動いている間は嫌な事を考えずにすむ。

そんな思いで承諾する。

模擬戦は気が紛れた。

……というかそんな事を考える余裕がなんてなかった。

何せジェシカと剣で打ち合っているのだが、ジェシカの攻撃に容赦など微塵もないのだ。

掠るなんて当たり前、さっきなど骨が見えるほど深く切り裂かれた。

その程度の傷簡単に治せるのだから問題無いだろうとの事だ。

ジェシカさんマジでDS

……むしろ俺を殺そうと思ってるんじゃないかと何度思った事か  
ちなみに肉を切らせて骨を断つと言うが、俺の場合は肉を切られて骨も断られたとも言っ感じだろうか？

とにかく全く歯がたたない。

ある程度は分かっていたがナンバー5と言うのは化け物らしい。

まず初めて戦った時は攻撃が見えなかった。

当然その一撃で剣が吹っ飛ばされて気がついたら剣を突きつけられていた。

その時もナンバー5ヤベエと思ったのだが、その後には

「すまん手加減を誤った。かなりゆっくりやったつもりだったんだが……」

そう、微妙に申し訳なさそうに言われてしまったのだ。

手加減って見えなかったんですけど……

そんな感じで適切な手加減具合で相手をしてくれるのだが、それでもやっぱり全く歯がたたない。

何というか小足見ってから昇竜余裕でしたって感じだろうか？

どこにどう打ち込もうとあっさりと対応されて応手で詰んでしまうのだ。

そんな感じに昼は移動で夜は模擬戦といった風に一日中動き続ける毎日がしばし続いていた。

既に俺の左腕も完全に再生し傷も完治していた。

それでも生傷の絶えないそんなある日の事だった。

そして今日も今日とてジェシカ相手に無謀な挑戦をさせらる。

……いや、ありがたいんだけど半強制イベント何だよね、これ

そしていつもと同じように「若干、僅かに、微妙に長く打ち合えるようになっているような気がするが」あっさりと倒される。

勝てない

そう思う。

そんな俺の思いを察したのだろうか

ジェシカが淡々と尋ねる。

「何故勝てないのか理解するかしら？」

「……地力と経験、技術に圧倒的に差があるだろ？」

とりあえずジェシカと比べて劣っているだろうことを思いついた端から言う。

模擬戦の時は比較的会話が弾む。

弾むとっていいのか分からないが、互いに気兼ねせず済むからだろう。

「それもあるわ」

肯定、だがまだ足りないらしい。

後は何があるだろうか？

「身体能力……は手加減してもらってるから今回は関係ないか……」

「それは違うわ。あなたと私の身体能力はほぼ同等よ」

力ではあなたが勝利、スピードでは若干私が勝っているが決定的ではないわ。

そうジェシカは続ける。

「えっ？」

てつきり身体能力も圧倒的に負けていると思っていたのだが……

一部とは言え俺の方が勝っている？

驚愕の事実だった。

「とは言えあなたの動きは最適化されていないのよ。だから身体能力に差があるように感じるの……でもこれは経験と技術の差に含まれるわね」

ついでに言えば速さの差は他のモノより大きく感じるからその所為でもあるらしい。

では何が足りないのでしょうか？

と言うような感じで見つめられる。

頭を捻って考える。

ダメだ。何も思いつかない。

諦めて、素直に分からないと告げる。

そう、とあっさりと答えた後、表情を引き締め淡々と告げる。

「あなたの剣は人間が人間を捕らえるための剣なのよ」

その通りだ。

俺が習ったのはグリアさんの剣、即ち街を護るための剣、それも犯罪者を捕らえることを主眼に置いた剣術だ。

故に相手をいかに効率的に無力化するかを重視している。

……ジェシカが言いたいことが分かってきた。

「人間が化け物妖魔に立ち向かうための剣でもない」

そこで一旦言葉を切り俺をじっ、と見つめる。

「そして化け物あなた達が人間を蹂躪するための剣でもなく、私達化け物あなた達が化け物を殺すための剣でもないわ」

ジェシカの美しい銀の瞳に吸い込まれそうだ。

しかし目を離すことができない。

俺もじっ、とジェシカを見つめ返す。

「あなたはあなたのための剣を見つけてなさい」

それだけ言うとジェシカは俺から離れていく。



二度と離れないのではないか、そう思った銀眼が視界から消える。

「……俺らしい剣」

俺はへたり込みそう呟く。

そうだ。

俺のための剣が必要だ。

力があれば守れたのだ。

最初の妖魔も力があれば犠牲を出さずに倒せた。

盗賊の襲撃も力があればきつと撃退できた。

そう力があれば……

俺は何だ？

……妖魔化け物だ

だが、俺は人を護りたい。

俺は今まで妖魔である事を否定していた。

だが、そんな必要はなかったのだ。

無理に否定するから無理が出るのだ。

ならば俺は俺らしく人を護れば良いのだ。

「アリス、俺理解ったよ」

化俺け物俺は化俺け物らしく殺し尽くす事で人を護ろう。

## 鬼胎

side ジェシカ

翌日、私達は再び歩いていった。

一見昨日までと全く変わらないように見える。

だが、明らかに違った。

昨日までのあの気不味い雰囲気はなくなっているのだ。

確かに昨日と同様に会話はない。

しかし、それを互いが気に病んでいる気配がないのだ。

最大の原因はレイの変化だろう。

何故か昨日までの鬱々とした雰囲気が一転して明るくなっているのだ。

おそらく昨日の模擬戦の後に言った事でレイは何かを得たのだろう。

それが正しい物であると良いのだが……いや、それは私が言うべき事ではないだろう。

そう、街を見捨てた私が言うべき事では断じてない、そう思う。

私にできる事はレイが正しい道を歩む事をただ願っただけだ。

それに今にも自殺しそうなくらい暗かったのが悩みが吹っ切れたのか明るくなったのだ。

それが悪い事である筈はない。

自分の所為ではない事を抱え込んで苦悩しても間違った方向に行くだけなのだから……

それにしてもこの地方から離れる事になったからその前にちょっと会おうと思ったただけだったのにな……

偶然、そう言って良いのだろう。

私はほんの気まぐれでレイに会いに行ったのだ。

そして見てしまった。

盗賊が街を襲撃するのを

そこに有ったのは人間の悪意の発現だった。

もっと楽をしたい  
ひたすら奪いたい  
より金が欲しい  
ただ弱者を虐めたい  
さらに暴力を振るいたい

そんな悪意が街中に溢れていた。  
街の兵士達は悪意の奔流を必死に押し留めようとしていた。  
しかし、多勢に無勢、押し流されてしまう。  
助けられなかった。

例え盗賊のような悪人であろうとも人を殺していけない。  
助けたい  
とは思わない。思ってはならない  
思えば潰れてしまう。

この大陸に人の悪意は溢れていた。  
こんな悪意は見慣れた、ありふれた物だった。

だが、ただ悲しいとは思った。  
この世に悪意が溢れている事はただ悲しい。  
私には既にそれに抗う意志はなかった。  
……いや、初めからなかったのだろう。  
ただ悪意に流されここにいる私には……

だが、だからこそだろう。  
妖魔でありながら悪意に流されずに抗う彼を好ましく思った。  
その時も必死に抗っていた。  
その胸に正しき怒りを抱き、ただ抗っていた。  
それに手を貸したいと思った。  
しかしそれはできない。

私は私が可愛いかったのだ。  
だから私はただ見続けた。  
見続けることしかできなかった。

終わった。

そう思った。

レイが妖魔となつて戦い始めたのだ。

いや、蹂躪と呼ぶべきだろうか？

怒りに身を任せ暴虐に力を振るっていた。

しかし、決して街の兵士は傷付けていない。

中には妖魔と分かるや盗賊を放ってレイに挑んでいる兵士も居たにも関わらず、だ。

刃を向けてきた者を傷つけずに無力化する、この難しさは語るまでもないだろう。

それを囲まれている中で行っていたのだ。

……実力が足りないにも関わらず。

今も剣を無理矢理止めなければ体勢を崩さず済んだのに……

無理をしているせいで自分は無闇に傷を負っていた。

悪意の中にあつても、自らが傷つくことも、それでも尚自らの正義を貫く、その姿は眩しかった。

傷つきながらではあるが既に大勢は決していた。

この調子でいけば盗賊は殲滅されるだろう。

……だが

レイはこの街に居ることはできなくなった。

この歪ながらも妖魔と人間が共存していた世界は崩壊したのだ。

それをレイも理解していたのだろうか？

街の住人に囲まれ傷だらけになりながら血の海に立ち尽くすレイは唐突に逃げ出したのだった。

私はレイを追いかけた。

疾い

傷だらけで今にも倒れそうなのに圧倒的に疾かった。

少し本気を出さなければ付いていくことが難しいほどだ。

さっきの蹂躪の時も想像以上に良い動きをしていた。

それ以前の戦いとは別人と思えるほどに良い動きだった。

おそらくあれがレイの限界の動きなのだろう。

あの動きは私とほぼ同等と言っても過言ではないくらい良かった。

まあ、妖力解放すれば敵ではないが、未恐ろしいと思った。

成長すればナンバー10ぐらい倒せる可能性があるという事なの

だから……

だが、同時にそれが楽しみだとも思った。

願わくばこの悪意に満ちた世界に風穴を開けて欲しいと思った。

……さすがにそれは願いが過ぎるだろうか？

力尽きたのかレイが前触れもなく倒れた。

私の目の前に傷つき倒れたレイがいた。

見れば見るほどボロボロだった。

まず左腕が根本から無い。

斬られて千切れかけた腕を剣が振れないなら、と腕自体を振り回し

たのだ。

当然数度で引き千切れた。

腹には剣が突き刺さったままだ。

あれは盗賊から兵士を守った時にその兵士に突き刺されたモノだ。

他にも兵士を庇った所為で全身傷だらけだ。

そんな姿のレイに私は近付けなかった。

傷を恐れた訳ではない。

纏っている雰囲気有近付けさせなかったのだ。

「ジェシカか……」

レイが私の名を呼んだ。  
その声にゾツとした。

この世の空虚がそのまま音になったような何も感じさせない声だった。

「殺してくれ」

レイは絶望しているのだろうか？

望み通りにした方が良いのだろうか？

彼が生きていて良いかなど私には分からなかった。

だが……私は生きていて欲しい。私には彼を殺せない、そう思った。

その事をただ伝えた。

「……そうか」

それだけ今にも消えそうな声でレイが言った。

その時レイが何を思い、何を感じていたのか、私には理解らない。

彼の慟哭は私の胸に染み込むように広がっていった。

私には何もしてやる事はできなかった。

ただ……彼が眠るまで側にいる事ぐらいは許されるだろう。そう思った。

眠ってしまった彼にそつと手を置いた。

妖気の流れが酷く乱れていた。

その流れを出来る限り正常に近い状態に治した。

……ここまで乱れているとすぐにまた乱れてしまうだろう。だがやらないよりはマシだ。

少し安らかになった寝息を聞きながら近くにあった山小屋に彼を運んだ。

山小屋に置いてあった治療セットを利用して手当てを施した。

未だに突き刺さったままの剣を引き抜き溢れる血を抑え包帯を巻いた。全身の傷も同じように手当てを施していった。

「いれは……」

腰の所だった。

普通の傷だと思っていたのだが……

鈍器、いや切れ味が極度に鈍った刃物だろうか？

そんな物で強く打ち据えたらしくズボンとそこに着けていた巾着が体内にめり込んでいた。

それが中途半端に回復しているせいで半ば複雑に絡み合っているのだ。

「切る、しかないか……」

できる限り痛みを感じさせないように注意しながら傷口を切り取った。

仲間に刃を向ける。

その行為は今までやってきた暗殺染みた肅正を思い起こさせた。

そして皮肉にもその経験があるからこそ誰よりも上手く痛みを感じさせずに切り裂く事ができたのだ。

因果な事であると思った。

妖力を同調させ痛みから意識を逸らし安らぎへと誘う。

そして安心しきった無防備な寝込みを一撃。

人は苦痛には耐える事ができても安らぎに逆らう事はできない。

私はそんな安らぎを悪用していた。

……それは許されるべき事であろうか？

「……感傷、ね」

一人呟き手当てを続けた。

巾着の中身は幾ばくかの金銭と血にまみれた御守りだった。後に聞いた話だがあの<sup>アリス</sup>子<sup>ス</sup>が作ってくれた物だそうだ。

一通り手当てを終え、再び妖気の流れを整えた後静かに外に出た。深い深い闇の中、空は雲に覆われていた。

何も無い、それでもその場に立ち尽くした。

虫の羽音がした

ネズミの蠢く音も

風が吹き、木々がざわめく

何もない訳ではない。そう思った。

もう一度空を見た。

雲の切れ間から小さな星が輝いていた。

レイが目覚めた。

当然だがまだ癒えていないようだ。

肉体的にも精神的にも

少しでも気が紛れたらとイタズラでもしてみる事にした。

全身の痛覚を一気に治してやった。

思いの外痛みが酷かったらしい。

ベッドの上でのたうち回ってしまった。

……イタズラだった事は黙っておく事にしよう。そう思った。

お詫びに妖力操作を教える事にした。

左腕を再生させるにはどちらにしろ知らなければいけないことだ。

元々頼んで来たら教えようと思っていた。

それを前倒しするだけの話だ。

……それではお詫びにならない気もするが気にしないことにした。

妖力操作を教えてみると想像以上に筋が良い。

聞いてみると人間の姿になる訓練をした時と似ているらしい。

その話を聞いて私は驚いた。



妖魔が人間に化けるのは捕食した相手の皮を被る、とでも言うべき行為だ。

それに対し、レイは自らの肉体を操作することで成し遂げていたと言っただ。

難易度的には私も練習すればできなくもない、とは思った。

しかし、それを行おうと思いつく発想と実現させる執念に私は驚きを隠せなかった。

何せできるかどうか分からない事を、それももっと簡単に実現できる代替手段があるにも関わらずやり遂げたのだ。

その上さして役に立つ技ではない。

何せ普通よりも妖気を探知されやすい上に消費も大きい筈だからだ。

利点は人を喰らう必要がないことだろうか？

まあ、その技を習得しようとして試行錯誤したお陰で妖力操作がスムーズに進んでいる事は間違いなかった。

動けるようになったレイはすぐにこの場所から離れたがった。

ここが街からあまり離れていない所為だろう。

いつ街の住人がここを訪れるか分からない。

それが嫌なのだろう。

私もこの後の予定が詰まっていた。

いつまでもレイに関わっている事は許されない。

思惑は一致していた。

だからだろうか気付いた時には私はレイに同行しないか尋ねていた。

急がなくてはいけない。

しかし、レイを放つても置けなかった。

そしてまだ一緒に居たかった。

そんな思いがつい口から漏れてしまったのだろう。

承諾してくれたレイを連れ私達は道なき道を突き進む。

完治していないとは言えレイは妖魔だ。

多少無理をさせても大丈夫だろう。

そう思い目的地までの最短ルートを行った。

途中にある小さな村は全て無視し直接目的地の街を目指した。

無言で歩いた。

不安な事はいくらでもあった。

しかし、私にはそれを聞くことはできなかった。

一日歩き続け夜、私は本当に最低限の伝達しかしていないことに気づいた。

さすがにこれはどうなのかと思った。

勇気を出して夜に模擬戦を提案する。

レイは承諾してくれた。

レイとの模擬戦、私の気分は高揚していた。

レイが勝つとはその時も思わなかった。

まだまだ経験も技術も私の方が遥かに上だからだ。

だが、盗賊との戦いで見せてくれたあの動きであればなかなか期待できるとも思っていた。

……私はレイに大剣を突き付けていた。

意気揚々と模擬戦に挑んだのにレイは何もすることなくあっさりと剣を吹き飛ばされたのだ。

いくらケガしていて本調子ではないとは言え余りにも不甲斐ない結末だった。

私は怒りすら感じた。

だがすぐに気がついた。

あの動きは本能に任せていたからこそその動きなのだ。

今の人間のための剣術では枷になるだけだとすら思った。

だが、これを伝えるべきなのか私は迷った。

唯でさえ危惧するべき事の多い旅路であったにも関わらず、この事でも迷い続けた。

よつやくどうなるか分からないが伝えるべきだ、と決心が付いたのは翌日には目的地に着こうかという時だった。

日課に成りつつある模擬戦の後、私はレイに自分の戦い方を探すべきだと伝えた。

あまり否定的にならないように気をつけたつもりなのだが、どうにも私は口が上手くない。

こういう時にどう言つべきだったのか今でも分からない。

だが、今日のレイの様子を見る限り伝えた事は正しかったのではないかと、と思う。

兎にも角にも沈み込んでいたレイが明るくなったのだ。

この変化は好ましい物であると思う。

周辺の風景が変化する。

森から平原へと

平原から田園地帯へと

目的地であるバイナプラの街が見えてくる。

残念ながらレイとはここで別れた。

私はこの次の村で黒服と合流し、また何処かへと任務に赴くことになる。

これ以上一緒に居ては組織に目を付けられてしまう。

どうにか今の所は組織から注目されていないのに無意味にリスクを負うべきではない。

ならばここで別れることが最善であると思う。

沈み込んでいる状態で放置するのはどうかと思うが明るくなったのだ。

若干その明るさに不安を覚えないでもないがそれはレイの道だ。

私が干渉し過ぎるべきではないだろう。

バイナプラへと到着してしまつ。

ここで別れることは旅に出るときに伝えていたので特に問題もない、その筈だ。

「……………」  
「ああ、世話になった」  
「これからレイは……………」  
「何だ？……………」  
「ええ、元気でね？」  
「大丈夫さ、ジエシカもな」

結局何も聞くことができないまま私達は別れる。

この時私はまた時間が空いたら会いに来ればいいと軽く思っていた。

しかし私は知らなかった。  
レイと再会できるのは想像以上に先の事であることも、その状況も。

そして再会のきっかけが意外な所からもたらされる事もこの時は知らないのであった。

## 揺光

ジェシカとバイナプラの街で別れてから早一週間、俺は山の中にいた。

バイナプラはこの大陸の北東部にある最大の街だ。

この大陸は歪な十字架の形をしているが、その十字がクロスしている部分、付け根付近にある。

区分としては中央部―トゥルーズーの最北東である。

地図上から見ると北部と東部そのどちらにも近いこの街だが、実際には険しい山脈に阻まれ北部との繋がりはない。

そして、東部も組織があるためか大きな街などは存在せず小さな村が所々に点在するだけである。

そのために地域間の繋がりは薄く中央からの距離と比べると辺境の地、と言った趣である。

同時に自給できるだけの資源と産業が整っているため比較的余裕があり他の地域とは若干違う文化を持つ。

その最たる物が主食であろう。

大陸の大半が小麦を中心としたパン食であるのに対しここ北東部では豊富な水資源を利用した米食が中心なのである。

このバイナプラの街も米を主とした穀物を生産する穀倉地帯であり北東部の食糧を賄っている。

ついでに言えばカタントの街は鉱山がある街と海に面した村を繋ぐ交通の要衝であり工芸品や織物などを供給している工業の街である。

バイナプラの西部にはピエタ、そして北部へと繋がる街道がある。

街道とは言っても多少歩きやすい程度の山道だ。

北部へ向かうには山脈の切れ目にあるピエタの街を通過するのが一般的である。

と言うかそれ以外のルートは人が踏破するには厳しい峻険な山並みを通ることになる。

そんな山脈を迂回してピエタに向かう街道なのだが、山脈を全て迂回できる訳ではない。

むしろ街道のほとんどが険しい山の中を通ることになる。

そのためにバイナプラと北部の貿易は決して盛んではない。

しかしそれでも通る商人の数は少なくはなかった。

俺はそんな街道の近くの山の中にいるのだった。

何故こんな山の中にいるのか？

その理由は簡単だ。

ここに盗賊―山賊と言うべきだろうが―の根城があるからだ。

元々街道には野党や追い剥ぎといった盗賊が出没する。

この山の中にいる奴等もそう言った輩だ。

盗賊退治が頻繁に行われる程交易が盛んではなく、かと言って人通りが少ない訳ではないこの街道が盗賊共にとってちょうど良かったのであろう。

盗賊や山賊と言った輩は全く生産性がない連中だ。

ただ奪うだけなのだ。

暴力団やマフィアのような一種の必要悪な場合もある存在ですらない。

ただのゴミと言っても過言ではないだろう。

そう、俺はゴミを掃除しようと言っただ。

盗賊退治で一体何が難しいだろうか？

それは隠れている盗賊を見つけることだ。

しかし俺にとって盗賊を見つける事は容易だった。

妖魔の力を使えば良いのだ。

妖魔の力の内一体何が恐ろしいか考えたことがあるだろうか？

戦闘力？

再生能力？

否、確かにそれは恐ろしいだろう。

しかし、それらは鍛えれば普通の人でも倒すことができる程度の物だ。

では何か？

簡単だ。

人に化けることだ。

住人に成り済まし人を襲う、これが恐ろしいのだ。

そしてもう一つ妖魔には恐るべき能力がある。

成り済ました相手の記憶や思考パターンを再現できるのだ。

さて、この恐るべき能力は一体何に最も役立つだろうか？

諜報活動だ。

尋問や拷問など必要ない。

成り代わって記憶を手繰るだけで良いのだ。

ほとんど何の労力もなく隠していた秘密を知ることができる。

俺はこの能力を最大限に利用したのだ。

盗賊であろうとも襲って奪ってそれで終わりとはいかない。

売却する必要があるのだ。

それが食糧や金貨ならさして問題ないであろう。

実際小規模な食うに困った程度の盗賊ならそれで満足するだろう。

しかし、ある程度規模が大きくなり、職業としての盗賊を行う者はどうだろうか？

その他の金品、例えば宝石、あるいは織物など換金しなければ役に立たない物も狙いたいと思うのは当然だろう。

そして狙うならば当然そう言った盗品を扱ってくれる商人がいるのだ。

少量であれば普通の商人でも扱ってくれるだろうが大量に怪しい品物を扱いたいと思う商人は少ない。

盗品を扱うことはリスクを伴うからだ。

いくらこの大陸に統括された警察組織がないとは言え、街ごとの自警団などは存在するのだ。

それに警察組織が未熟だからこそ信用が重要になってくる。

盗賊と繋がっているなど知られたら深刻なダメージを負うことになる。

だからそ普通の商人は扱ってくれないような怪しげな物でも利益のために扱うような悪徳商人を確保しておく必要がある。

そしてそう言った悪徳商人を探せば他の盗賊と繋がっている可能性も高い。

何故ならばそんな悪徳商人が数居ても儲けは少なくリスクだけが大きくなるからだ。

であれば悪徳商人を一人見つけなければいくつかの盗賊団もまた見つかる可能性が高い。

そして悪徳商人を見つければ喋ってくれなくても問題はない。

悪徳商人の記憶に聞けば良いのだから……

この方法を思いついたのは偶然だった。

カタントの街を襲った盗賊共の事を思い出すと今でも腸が煮えくり返りそうになる。

しかし、その盗賊共がいたからこの方法を思いついたのだ。

……とは言え盗賊が居なければこんな事をする必要もなかったのだが

盗賊共を駆逐した時に何人か頭を丸かじりしたのだが、その際にごく僅かではあるが盗賊の記憶が流入してきたのだ。

そして、運が良い事にー悪いのかも知れないがー喰ったのが会計のような奴だったらしく取引している商人に関する記憶があったのだ。

かなりあやふやで断片的な記憶だったがそれでもこの商人で何



て名前なのかぐらいは分かった。

後は簡単だ。

その商人を探しだして他の盗賊の情報を得るだけだ。

そして悪徳商人を探すのも簡単だった。

何せバイナプラに居たのだから。

まあ、考えてみれば当然なのかも知れない。

街を襲った盗賊はカタントに大金がある事を知って襲撃して来たが、元から近隣に居た盗賊だったのだ。

じゃないと大金の情報も手に入らないし、妖魔事件の傷が癒える前、こんなに迅速に襲撃される事はできなかっただろう。

そして、バイナプラは近隣では最大の街だ。

いくら何でも小さな村に盗品を扱うような商人はいない。

ならばカタントと街道が繋がっており近隣では最大の街であるバイナプラを拠点にしている事は何もおかしい事ではないのだろう。

バイナプラでなければカタントの可能性が高いのだがそうなる困ったことになるのでここで良かったのだろう。

まあ、ともかく俺は悪徳商人を見つけたのだ。

そして、闇夜に紛れて襲撃したという訳だ。

ここまでは順調過ぎる程順調に進んだ。

せいぜいこの前の一件からほとんど人を殺すことに抵抗がなくなっていることに気づいて化け物妖魔のだと再認識して落ち込んだ程度だ。

ここで問題が起きた。

と言うか問題に気付いた。

前回の事から脳を丸ごと食べてもごく一部の記憶しか分からない事は分かっていた。

だが、今回は完全な記憶が欲しいのだ。

どんな盗賊等の悪人とどこでどんな取引をして、その悪人共が一体何処にいるのかまで知りたいのだ。

そのための方法は何となく理解る。

身体を乗り換えれば良いのだ。

そう実行前は特に何も考えずにそう思っていた。

しかし、いざ実行する段階になるとある疑念が頭をもたげる。

……果たして身体を乗り換えて俺は俺のままではいられるのか？

分からない。

俺という存在が一体何なのか俺には分からない。

何故妖魔なのに人間としての意識があるのか？

何故前世の記憶など持っているのか？

何故この世界に居るのか？

全てが分からなかった。

それでも俺は生きていたかった。

俺は俺として生きたかった。

俺は自分が自分でなくなる事が恐ろしかった。

だから妥協した。

許されざる妥協だ。

俺は情報と自己の保身その両方を最大限に追求するために他の全てを蔑ろにする事にしたのだ。

悪徳商人を尋問ーいや拷問と言った方が正しいかーした後には部分的でも記憶を得るためにその脳を丸ごと喰らったのだ。

いくら盗賊と取引していたとは言えこの商人自体は悪事に手を染めていた訳ではない。

染めていたとしても拷問されて恐怖と絶望の中殺される程では決していない。

……いや、例え許されざる“悪”であろうとも俺に裁く権利などない。

理解っていた。

だが、それでも俺はそれを選択したのだ。

だからこれは自業自得なのだろう。

確かに当初の目論見通り情報を得る事ができた。

商人の記憶も部分的ではあるが手に入れた。

問題はこの記憶だった。

商人の記憶が俺に流入した……いや、混入したと言っべきだろうか？

混ざり合い自分の記憶と区別することができないのだから。

僅かではあるが自分が誰なのか曖昧になったような感覚がある。

今はまだ問題ない。

しかし、こんな事を続けていれば何れ自分を見失ってしまうだろう。

確かにこれは問題ではある。

しかし、今すぐにどうにかなるといっ話ではない。

では何が問題なのか？

記憶の中身だ

混入した記憶には俺が行った拷問の記憶もあつた。

当然だろう。

最も新しく最も鮮烈で苦痛に満ちた記憶なのだ。

だが、俺はそれを全く予想していなかった。

だから何の覚悟もなく脳を喰らった。

……最悪の気分だった。

商人が抱いた苦痛が憎悪が自分の事として感じられるのだ。

自分で自分を敵として憎悪する。

味わったことのない、二度と味わいたくもない最悪の体験だった。

だが、分かった事も多い。  
当然盗賊共に関する情報も得られた。

何より他の街に居る悪徳商人の情報も得られた。

これでこの商人が知らなかった盗賊の情報を得る手掛かりも得られたのだ。

俺は確信した。

部分的な記憶の流入ですら自分を見失うかも知れない危険性があつた。

ならば身体を乗り換えたりすれば俺は俺ではなくなるだろう。  
長生きしたいのなら無理をするべきではないと思つた。

だが、今はこの全てを焼き尽くそうとする怒りに身を委ねていた。  
い。

山の中にあつた盗賊のアジトを発見する。

どうやら自然にできた洞窟を利用しているらしい。

奇襲するのは困難な地形だったが元から5人程度の小規模な盗賊だ。

寝静まった頃を見計らつて見張りに躍り掛る。

完全に気が抜けていたのかほとんど何もできずに切り捨てることに成功する。

しかし、断末魔が山に響きわたってしまう。  
さすがにこれで気付かれてしまっただろう。

もう一人ぐらい殺っておきたかつたのだが……  
そう思うが気付かれてしまったものは仕方ない。

割り切り洞窟内に侵入する。  
どうやら思いの外洞窟は広いらしい。

人が横に二人並んで余裕がある程度の幅と剣を振ってもまず引つかからない程度の高さがある。

中がどうなっているのか分からないので慎重に歩を進める。  
しばらく進むとドタドタという騒ぎが聞こえる。

「おい…さっきのは何だ!?!」

奥から盗賊の仲間が出てきた。

人数は4、情報通りだ。

やはり先程の悲鳴で気付かれていたようだ。

しかし、まだ事態は把握しきれていない。

押取り刀で出てきた盗賊に一人に突きを繰り出す。

出合い頭の先制攻撃に盗賊は為す術もなく一突きにされる。

「グギャッ、ああああアア!!」

「ア、兄貴!」

まだ生きているようだが、しばらくは動けないだろうと判断し、剣を抜くために蹴り飛ばす。

態勢を整えるために一歩後退し剣を構え直す。

ようやく事態が飲み込めたのか盗賊共もそれぞれの武器を取り出している。

「キサマ！何モンだ!?!どっかの自警団か？雇われの傭兵か？」

盗賊の頭らしき人物が凄んで来るが気にせず再び突きを放つが、掠る程度でいなされてしまう。

反撃が飛んでくる。

しかし、まだ動揺しているのか腰が入っていない。

軽く避けてそのまま返す刀で小手を斬る。

浅い当たりだったがそれでも俺妖魔の力からすれば十分だ。

ざっくりと筋まで押し切る。

たまらず剣を取り落とす盗賊

これで残り2人

そこまで減らされてようやく自身の窮地を実感したのか急に盗賊の動きが良くなる。

見事な連携で斬り掛かってくる盗賊達

僅かな時間差での別方向からの攻撃は最初の袈裟斬りを受ければ次の下段からの斬り上げをモロに喰らうことになる。

だからと言って袈裟斬りを受ければ斬り上げを喰らい、避ければ大きく態勢を崩す事になる。

態勢を崩しても避けるべきだろうか？

否

人間であればその選択肢しかないだろう。

しかし俺は妖<sup>化</sup>魔だ。

ならば化け物らしい手段で押し通る。

行った行動は二つ

指を伸ばして袈裟斬りにしようとしていた盗賊を壁に貼り付ける。

同時に一步前に踏み出し斬り上げの動き始めを小手で受ける。

カキン、そんな硬質な物を叩いたような音をさせ斬り上げが止められる。

驚愕した表情の盗賊を返す刀で切り捨てる。

いくら勢いが弱いとは言え本来であれば切り裂けた筈だった。

その筈なのに弾かれた。

タネは単純だ。

単に小手を硬化させたただけだ。

覚醒者の中には大剣<sup>クレイモア</sup>でさえ弾くような硬い覚醒者もいる。

基本的に妖魔も覚醒者と同じ材質でできている筈だ。

ならば身体を操作する事の応用で硬くする事だってできる。

それを行っただけだ。

要は某鋼で錬金術なマンガに出てくる強欲な人の能力を想像する

と大体合っているだろう。

最も硬度はまだまだ実用性に欠ける。

勢いもない、力もないナマクラな剣の斬り上げがせいぜいだ。

大剣<sup>クレイモア</sup>など喰らえば何の問題もなく切り裂かれてしまうだろう。

だが、方向性は理解った。

妖魔としての力を最大限に発揮出来れば十分に戦える。

その高揚感を感じながらまだ生きていた盗賊共に止め刺していく。  
漂う芳醇な血の匂いに食欲を刺激される。

しかし、我慢する。

限界まで俺は人を喰らわない。

そう決意したからだ。

俺は化け物ではあっても人を喰らう化け物に成りたくはないのだ。  
意味のない枷なのではないかとも思う。

しかしそれでも俺はそう決めたのだ。

これは罪の意識なのだろうか？

自分でも分からない、それでも……

俺は動く者の居なくなつた洞窟の中、揺れ動く心を抱えたまま立ち  
去る。

そしてその姿は深い闇に飲まれて消えていくのだった。

## 離合

生温い潮風が頬を撫ぜる夜。

何に使われていたのかも定かではない不気味な廃墟へと近づいていく。

廃墟の中にはかなりの数の人が居るようだ。

間違いはないだろう。

今、あの廃墟の中にいる人間全てがターゲットだ。

いつも通り関わりがあると思われる人間は皆殺しにする。

夜闇に紛れ妖魔の身体能力に任せて見張りを屠る。

そのまま他の見張りも片付けていく

他愛もない。

中で動きがある。

気付いたようだ。

武装した兵隊がワラワラと出てくる。

が、妖魔の姿を見て当惑する。

その隙に正面から突っ込み手当たり次第に倒していく。

時に剣で時に爪で時に噛み付く

さして時間も掛けずに兵隊共を殲滅した。

廃墟の中へと入る。

中にはいかにも成金と言った男たちが何か喚いていた。

残り少ない兵隊共が命令に従い襲い掛かってきた。

一蹴し、皆殺しにした。

今回のターゲットは盗賊ではない。

盗賊達と取引　　と言うより支援だろうか　　していた黒幕とで

も言うべき組織のアジトだった。

主な構成員は人身売買を行なっている商人や盗賊ギルドなど裏社会の人間だった。

裏社会の人間の内成功していた者達がさらなる成功を求めて作り



上げた組織だった。

盗賊が攫ってきた人間を買い取って北の鉾山や東の組織に売り渡していた。

それだけなら人道に反する組織だとは思うが積極的に介入しようなどと思わなかっただろう。

しかし、わざわざ犯罪者予備軍とでも言うべきスラムの住人を集めて武器を渡して盗賊団に仕立て上げる事で組織の規模を拡大させていたのだ。

当然、その過程で本来は襲われることのなかった町や村が襲撃される事になる。

結果さらにスラムの住人が増え、この組織が拡大するという流れが出来上がっていた。

その流れを断ち切りたかった。

この数年で幾つもの盗賊団を潰し、悪徳商人を殺してきた。人身売買を行っていた商人や組織を潰したこともある。

だが いや、やはりと言うべきか 世界は変わらなかった。

妖魔が人を食い、盗賊は街を襲う。

不正が横行し、疑心暗鬼が街を覆う。

無理にクレイモアを依頼し、丸ごと盗賊に成り下がった村もあった。

邪魔な孤児はいつの間にか連れ去られ売り飛ばされていた。

今回のような盗賊を積極的に生み出している組織を潰したこともある。

それでも変わらなかった。

いくら叩いても湧いてくる悪党共、救えない命

俺は精神的に疲弊していた。

それでも続けていたのはただの惰性だった。

……既に止め時を失った。

そんな生活の中で見え隠れする黒幕のさらに後ろにいる本当の黒幕の影

証拠はない。

しかし、俺には確信があった。

敢えて治安を悪化させる事で人身売買をやりやすくし孤児を生産している影の統治者がいる、と

そしてそんな事ができる組織など俺には一つしか思いつかなかった。

この大陸を変えたければ根本から変えなくてはとうしようもないのだと思う。

だがそんな事をする気力など既になかった。

手慣れた動作で誰も動くモノの居なくなった建物に火を放つ。

大陸の南端、海に面した断崖絶壁の上に建てられた研究所らしき建物の廃墟、それがアジトだった。

何に使われていたのかは知らないが人目を気にする輩にとって最高に近い立地だった。

疲れきった足取りで燃え始めた廃墟を後にする。

火が強くなってきたからだろうか？

生温い風が纏わり付くように吹いていた。

肉体的にはさして疲労していない。

いつからだろうか、武装した人間程度は問題ではなくなっていた。妖力を開放し妖魔の姿で戦ったのだって数を相手にするのが面倒

だったからだ。

妖魔化した方が間違いなく戦いやすかった。

妖魔化した理由などその程度の事だった。

問題は腹が減ることだが、この数年本当に最低限の食事しかして来

なかったせいだろうか  
空腹を我慢することなど苦でもない。

だから、ここまで気付かなかったのは精神的な疲労と油断だったの  
だろう。

クレイモアが急速に近づいている事によようやく気付く。  
既に逃げ切れない程近距離まで近づかれていた。

油断した!!

弛緩していた精神を引き締める。

現状で逃げ切れないならば戦うしかない。

幸いと言って良いのか、未だに妖魔の状態だった。

初めてのクレイモア戦だ。

一瞬の油断もできない。

軽やかな着地音でクレイモアが降り立つ。

若いクレイモアだった。

むしろ幼いと言った方が正しい年齢のように思われる。

しかし、纏う雰囲気からは幼いとは感じさせないモノがあった。

憂いを帯びた表情でありながら断固たる意志を感じさせる目をして  
いるからだろうか？

あるいは女の子と女性の間にも漂うアンバランスさだろうか？

可愛いではなく美しいと言わせる何かを持っていた。

「クレイモア 組織の戦士、か……」

何も答えてくれない。

話をする気はないらしい。

幼き戦士は無言で大剣を構える。

それでも気にせず語りかける。

「……何で俺を狙う？」

答えないかもとは思ってたが答えてくれるらしい。

「……おかしな事を聞く、我々が組織の戦士お前らに妖魔出会ってなぜ、と問うか？」  
「俺を斬っても何の金にもならん筈なのだがな、目障りだとしても思われたか？組織にとって治安が悪い方が良いと言つことか……」

「……何を言っている？お前はいったい何を知っている!？」

ふむ、どうやらこの幼いクレイモアは何も教えられていないらしい。

何か思いついたのかクレイモアに緊張が奔る。

「まさか、覚醒者なのか!？」

どうやら可愛い勘違いをしているらしい。

確かに覚醒者であれば組織のあれこれを知っていてもおかしくはないだろう。

で、妖魔っぽく化けてる覚醒者じゃないかと疑っている訳だ。

「単なる妖魔さ、ちょっとばかし知りすぎている、な……話が過ぎた、な!!」

「ま、待て!?逃がすと思つたか!？」

話ながらジリジリと距離を離していたが、十分と判断し崖へと全力で走り出す。

あのクレイモアも俺が距離を取っている事に気付いていたようだ。

しかし、何もする様子がないので逃げ切るのに十分だと思える距離まで離れる事ができた。

後ろが海で崖になっており逃げる場所などないから放置しているのだと俺は判断していた。

だが、違つたらしい。

これは判断ミスだ。

あのクレイモア、想定以上に疾い!!

崖にたどり着く直前で追い付かれる。

そのまま大剣が降り下ろされる。

狙いは

……どうやら殺す気はないようだ。

先程の話の続きでも聞きたいのか、あるいは生け捕りするように命令されたのか

まあ、どちらでも構わない。

殺す気がない事が分かれば十分だ。

その場に踏みとどまり、大剣に軌道に剣を差し込み、受け流す用意をする。

保険として斬られるであろう部分を硬化させておく。

同時にクレイモアには見えない角度から爪を伸ばす。

大剣が迫る。

金属の奏でる透明で高い音が響く。

俺の剣は大剣に一瞬抗っただけであっさりと砕かれていた。

(北の名工の作だぞ!?)

予想していなかった訳ではない。しかし一瞬しか耐えられないとも思っていなかった。

北の名工の作とは言え所詮量産品、この程度と言えはこの程度なのかも知れない。

結構高かったのに……

ほとんど勢いが衰えていない大剣が左足に迫る。

鈍い激突音

思わぬ固い手応え

クレイモアの気配が一瞬乱れるのが分かる。

しかし、ほとんど動じることなくさらに力を加えてくる。

無理矢理力で大剣を振り切る。

左足が途中から断ち切られバランスと崩す。

血が互いの顔に飛び散る。

苦痛で顔をしかめる。

だが、想定内だ。

最悪に近い想定とは言えこの事態は予想していた。

ならばこの瞬間、勝利は俺の物だった。

クレイモアが驚愕したような表情で自らの身体を見下ろす。

腕が断ち斬られるのとはほぼ同時にクレイモアの死角から伸ばした

爪で貫いたのだ。

致命傷ではない。

しかし、一瞬で回復するような傷でもない。

俺は残った右足で思いつきり後方へと飛ぶ。

その直前に太腿の切断面から触手状に一部分だけ伸ばし切り落と

された左足突き刺し回収する。

ようやく驚愕で固まっていたクレイモアが動き始める。

だが、あまりにも遅い。

俺は既に崖に身を投げ終わっていた。

「お別れだ」

「クッ、待て!!」

そのまま重力に引かれて落下していく。

クレイモアが届かないと分かっていたながらも手を伸ばしているの  
が見える。

ここで大剣を投げられると割とマズかったのだが、どうやら賭けに  
勝ったらしい。

落下しながら妖気を操作し身体を作り変える。

肩口からジワリと羽が生えてくる。

そのまま羽は大きくなり1m程の大きさになった段階で成長を止める。

生やした羽で風に乗り滑空する。

適性の問題なのか羽を生やすことはできるのだが飛び立つ事ができないのだ。

考えてみて欲しい。

もし新しくもう2本手が生えてきたとして上手く扱う事ができるだろうか？

その結論がこれだ。

どうも上手く動かすことができないのだ。

集中して動かそうとすれば何とか動く。

しかし、それは空に飛び立つのが不可能なぐらいゆっくりとなのだ。

だからこの羽の用途は今の所簡単な滑空専用だ。

とは言え滑空している最中にだって少しでも気を抜いたら墜落してしまう程度には難しい。

練習を重ねることで少しずつ上手くなっている気がするからいつかは飛べると思うのだが……

いつになる事やら……

そんな事を考えながらも順調に滑空を続けクレイモアから距離を取っていく。

さすがにあの怪我では断崖絶壁を降りて飛んでる俺を追いかけは来ないらしい。

滑空速度は下手に走るよりも速いからそう簡単には追いつけやしない、ましてや相手は飛べないから泳ぐしかないのだ。

俺は悠々とクレイモアの視界から飛び去るのだった。

## 逢着

先程まで居た廃墟のある場所から十分に距離を取ることができたと判断した俺は静かに着陸する。

どうやらあの若いクレイモアは追ってきていないようだ。妖気から判断するにまず回復を優先させていると思われる。

「ふう」

安堵の息を漏らす。

地面にへたり込む。

まだ安心できないが取り敢えず逃げる事はできた。

しかし、危なかった。

疾いし、強い

今回は上手く行ったから良いが、もし正面からやり合う事になったらどうなる事やら……

まだ、幾つか切り札や手があるとは言えかなり厳しい事になった。ただ、ろっ。

大分強くなったから今ならジェシカとだって勝てないにしてもやり合えると思っていたのだがな。

「……まだまだ、か」

生死の境を彷徨った所為か全身から重い疲労感を感じる。

だが、悪くない。

盗賊共を殺す時のような嫌な疲れ方じゃない。

どこか気分の良いとさえ言えるような疲れだった。

気合を入れ直し足の修復に入る。

どうにか切り落とされた先を回収する事ができたからそう難易度は高くない。



傷口をしつかりと合わせて妖力を解放する。  
傷口から妖力を伸ばすようにしてくつつけていく。  
こんな生活を始めた当初は傷を負う事なんて日常茶飯事だった。  
既に切り落とされた部位の修復はお手の物だった。  
さして時間も掛からずに当面問題ない程度に修復される。

再度妖をしつかりと探るが、未だにクレイモアは先程の場所から動いていない。

どうやら傷の修復は慣れていないらしい。  
これ幸いと妖気を限界まで抑え街道へと歩き始める。

「さて、これから何処に行くか……」

選択肢は幾つかある。

まず、当初の予定通りに近隣の盗賊を叩きに行く  
次に、砕かれてしまった剣の代わりを手に入れに行く  
それともさっさと隠れるか……

まあ、盗賊を叩きに行くのではないだろう。

偶然か必然かまだ分からないがクレイモアに狙われているのだ。  
しばらくは大人しくしておくべきだ。

とは言えただ隠れると言うのも面白くない。

いつ見つけられるのかとビクビクしながら過ごすなど御免被る。

ふむ、しばらく盗賊は放つといて剣を手に入れに行くか……

そう決めると目的地もハッキリしてくる。

北にあるディアンカラボナか、やはりこの大陸で剣と言ったらこの  
二つの街の名が上がるだろう。

鉾山の街でもあるディアンは良質な鉄とそれを扱う製鉄のメッカ  
とでも言うべき街だ。

実用性に富んだ戦闘用の武器が欲しいならディアンだと言われている。  
いる。

大してラボナはこの大陸の叡智が集まる場所だ。

その中には当然武器の知識だってある。

何より大陸有数の武装集団である聖域守護兵団を抱えている事は大きい。

何せ安定して武器が求められる環境なのだ。

巡礼者も護身用に聖別された短剣を手に入れていくと聞いている。

若干儀礼色が強く装飾が華美な物が好まれるようだがディアンの剣にも引けは取らないだろう。

どちらに行くか？

目的に沿っているのはディアンだ。

しかし、ここは大陸の南端、ディアンは当然北の果てだ。

どうせラボナの近くを通ることになる。

ならば取り敢えずラボナを目指す事にする。

ラボナで良い物が無ければディアンへと足を伸ばすことにしよう。

そう決めて歩き出す。

時間はさして問題ではない。

それよりもクレイモアと遭遇しない事を優先するべきだろう。

できれば黒服などの組織の人間にも気付かれたくない。

ならば騒ぎを起こさないように慎重に妖気を探りながら行こう、そう思う。

が、計画は早々に破綻する。

街道に出てすぐの事だった。

小規模なキャラバンに行き会ったのだ。

それだけなら見つからないように迂回するだけの話だ。

しかし、そのキャラバンに子供の入った檻が含まれていたのだ。

そうこのキャラバンは奴隷商人の物だった。

方向から察するに俺が全滅させた組織の可能性が高い。

倒すべきだろう。

とは言え妖気を解放する訳にはいかない。

時間を掛けるのもマズイ。  
距離があるとは言え近くにあのクレイモアが居るのだ。  
さして護衛の数も居らず本来であれば問題ではない。  
しかし、妖気を解放なしかつ疲労した状況では若干厳しい。  
が、囚われている子供を放っておく訳にもいかない。

「……やるか」

とは言え馬鹿正直に正面からやり合うつもりはない。

そこで後ろを気にしながら恐怖に引き攣った顔でヨタヨタと走る。  
すぐにキャラバンの護衛が気付く。

しかし、こちらは一人な上に何かから逃げている様子、俺に対する警戒はさして大きくない。

「おい!どうしたんだ?」

「よ、妖魔だ!!妖魔が出たんだ!!助けてくれ」

いかにも助かったと言った表情で泣きながら護衛の一人にすがり付く。

俺の言葉を聞いた護衛が焦りだす。

仲間に合図を出し集める。

「妖魔だ!!?」

「そつだよ!!妖魔が出たんだ!!俺を追ってきてる!!きつとすぐそこまで来てるんだ!!」

「何だ!!?」

俺が真剣な顔で今走ってきた道の先を指差す。

護衛が集まってきて対応を話します。

恐怖を感じているようだがそれに飲まれていない。

なかなか優秀な護衛のようだ。

しかし全員の視線は妖魔が来ると言われた道の方に向いていた。俺は一瞬だけ妖力を解放し爪を伸ばす。

完全に注意が削がれた背後から護衛の心臓を一突きにする。護衛は8人、一人に一本使ってもなお爪は余っていた。

「なっ!?……キサマが、キサマが！妖魔だったのか!？」

護衛の一人が血反吐を吐きながら叫ぶ。

護衛が取り落とした剣を拾い、まだ生きていた護衛の首を刎ねる。後ろで震えていたブクブクと太った商人に剣を突き付ける。

「鍵を開ける」

「ヒイ!?!、命だけは、命だけは」

命乞いするだけで動く様子がないので再度鍵だ、と言いながら少し剣を首筋に食い込ませる。

するとその肉団子のような外見からは想像できない程俊敏に動き、鍵を開ける。

中から数人の子供が出てくる。

が、その瞳は恐怖に染まっており、解放されるやいなや一目散に逃げ出していく。

そのいつも通りの様子に少しだけ落ち込む。

「どうか命だけはお助けを!!」

「……ハア、ダメだ」

剣を振るっ。

おちおち落ち込む事もできやしない、そんな事を思う。

いつもなら後始末もちゃんとしていくのだが僅かとは妖力を解放したし、早くここから立ち去るべきと判断する。

足早にキャラバンから離れようとする。

「待って!!」

子供の声に呼び止められる。

気付いていなかったが檻の中にまだ逃げていない子供が居たらしい。

檻の中から二人の子供顔を覗かせていた。

男の子と女の子、よく似た顔立ちをしていた。

おそらく兄妹だろう。

どうやら男の子の方が足に怪我をしているようだ。

檻にしがみつくように立っている。

怪我の所為で逃げ遅れたのだろう。

「兄ちゃんって、今噂の正義の味方だろ!」

何か用なのか無言で待っていたらそんな事を言われる。

「……正義の味方?」

自分とは程遠い呼称に啞然とする。

「そうなのです。正義の味方なのです」

「今、話題何だぜ!!悪党を倒す正体不明の正義の味方って!!で、兄ちゃんがその正義の味方なんだろ?」

「確かに盗賊を倒したりはしたが、俺はそんな人物じゃ……」

「ほらーっやっぱりそうなんだ!!うわぁー正体見ちゃったぜ!!」

「テッド兄、正義の味方さんが困っているのですよ。そんなにはしゃがないのですよ」

何やら自分の行動が変な噂になっていたようだ。

勘違いを解こうとするが子供達は聞く耳を持っていない。

しかし、こんな肯定的に受け入れてくれたのは初めての事だ。

「怖くないのか？」

気付いた時には俺はそう聞いていた。

聞かれた二人はキョトンとした表情で聞き返す。

「何でだ？正義の味方の兄ちゃんは助けてくれたんだろ？」

「ダメダメなテッド兄にしては良い意見なのです。助けてくれてありがとうございますのです」

それは今までにない不思議な感覚だった。

だが、悪い物ではない、そう素直に思えた。

## 漂着

太陽が空の高い所で燦々と輝く。  
日に照らされた大地は陽射しに負けない程青々と成長した草木に覆われていた。

気温は高いが湿度は低い、そんな過ごしやすい天気であった。  
心地良い風が吹き、ザワザワと草木がざわめく。

何と良い日だろうか。

こんな日は草原に寝っ転がって昼寝でもしたい所だ。  
そんな穏やかな空に子供特有の甲高い声が響き渡る。

「ねえねえ、正義の味方の兄ちゃん、どこ向かってんの？」

「何で正義の味方やってんの？」

「テッド兄……正義の味方さんになんてプライバシーがあるのですよ。そんなに色々聞くんじゃありません」

妹のリズの方が兄のテッドを窘めるような発現をしているが、その表情には私も聞きたいです!!と大きく書いてあった。

何やら子供二人になんかかれてしまった。

これ以上関わるべきではないと思いきや去ろうとしたのだが、着いてくる。

振り切っても良いのだが、こっちはなつかれてしまったり辛い。

だから向こうから離れるように無視していたのだが一向に効果がない。

唯でさえ子供を無視することに罪悪感を感じているのに効果もないではどうしようもない。

仕方ないので話を聞いてやることにする。

「はあ、俺に着いてくるとも良いことなぞぞ」

「いいぜ(なのです)!!」

満面の笑みで断言される。

ピツタリハモらせて来るあたりは性格が全く違っても兄妹なのだなと感じさせる。

「そうか……お前らどこの出身だ？」

そう聞くと兄妹は一度顔を見合わせ、リズが誇らしげな表情で言う。

「ラボナなの！偉い神官さんとか学者さんがいっぱいなの！」

「街並みだつてスゲエんだぜ！大聖堂とか時計台もあるんだぜ！」

「へえ、ラボナの出身なのか」

これはちょうど良いと言つべきなのだろうか？

当面の目的地はラボナだ。

そして、子供達に俺から離れる意志はないようだ。

ならば、次善の策は子供達をラボナまで送って行くことだろう。

どうせ急いでないし、気を付けていればむしろ安全な筈だ。

何せ俺にとって危険だと言えるのはこの大陸に僅か47人のクレイモアとまず襲つてこない覚醒者程度なのだ。

そう言ったモノに遭遇するよりも未だに一向に減らない盗賊に遭遇する方がよほど可能性が高い。

第一俺は大まかではあるが妖気を探知する事ができるのだ。

そうそう近づけさせる事はない。

そう判断し兄妹に告げる。

「ちょうど今向かつてるのがラボナなんだ。ラボナまで一緒に行くか

？」

「「うん」」



こうして俺達の旅が始まったのだった。  
旅は順調過ぎる程順調に進んだ。  
天候に恵まれ、クレイモアにも遭遇せず、病気や怪我もなかった。  
そのためほとんど何の困難もなくラボナへと到着する。  
せいぜい途中で小規模な盗賊に襲撃された程度だ。  
当然あっさりと返り討ちにしてやった。  
盗賊の襲撃よりも撃退したことさらに高まった子供達の尊敬の  
眼差しの方がよほど対処に困ったのだが……

唯一懸念があるとすればそれはむしろ目的地であるラボナだった。  
始めはラボナに大分近づいたとある村で聞いた噂だった。

曰く、聖なる都に妖魔が出た、と  
そしてその噂はラボナに近づくに連れ信ぴょう性を増していくの  
だった。

僅かな不安を抱えながらもついにラボナへと到着する。

丘の上からラボナが一望できる。

初めて見たラボナに圧倒される。

今までこの大陸を彷徨って様々な街を見てきたが規模が違う。

今まで見た最大の街の倍以上大きい。

そしてその巨大な街を囲む重厚でありながら優美さを感じさせる  
流麗な外壁、街の中心にそびえ立つ大聖堂。

さらに歴史と市民の生活を感じさせる街並み、その全てが調和し奥  
深い美しさを感じさせる。

ただ大きいだけの街や完全に計算され尽くした計画都市からでは  
感じられない威厳のような何かを感じさせる街だった。

「へへっ、兄ちゃんどうだ!? スゲエだる俺の街!」

「別にテッド兄だけの街じゃないのですよ……私達の街によっこそなの  
です」

「ああ、よろしくな」

ラボナへと入るために門へと向かう。

門は大勢の人で賑わっていた。

そこら辺で露天を開いている商人や何やら交渉している姿が見受けられる。

どうも街へ入るために検査があるようだが、時間が掛かっているようだ。

それを待ちきれずにここで商売を始めてしまった者がいるらしい。門の外とは思えないほど賑わっている。

騒ぎを聞きつけた街の住人も参加しているらしく本格的に青空市と言った感じになっていた。

騒がしく賑やかな雰囲気、しかしどことなく不安そうな気配が感じられる。

不安を忘れるために敢えて明るくしているようなそんな気配があるのだ。

「妖魔が、居るな」

小さく呟く。

商人達の早く商品を売ってここから立ち去りたいと言う気持ちや街の住人の不安感、街への出入りに関する厳重な検査

その全てがこの街に妖魔が居ることを示していた。

そして何よりこの距離まで近づけば分かる。

クレイモアのモノとは違う荒く凶暴で洗練されていない野性的な妖気が街の中から感じられる。

正確な位置までは分からないが確実に居る。

その存在は俺に波乱を予期させるのであった。

## 奇縁

聖なる都ラボナ

ラボナはこの大陸の中心にあり宗教や文化の面においても重要な役割を果たしている。

そのため治安が悪く危険の多い旅路であるにも関わらず多数の巡礼者がこの街を訪れている。

また、巡礼者の消費を見込んだ商人が多く集まり大陸中の物が流通している。

そんな大陸でも有数の豊かさを誇る街である。

しかし、その街の豊かさと宗教的な救いを求めて貧しい人間もまた大量に流入しており街の一部はスラム化しているのであった。

だがそれでも街の治安は非常に良い。

理由は大きく二つあるだろう。

その一つは神官達が定期的かつ積極的にそう言った貧困層を救おうと活動しているからである。

そしてもう一つ、街の治安を守っている存在がある。

聖域守護兵団である。

全ての兵士が勤勉な信者の志願によって成り立っているこの兵団はその練度と規律から名前を馳せている。

資金的にも潤沢であり聖なる剣と槍それに全身鎧が全員に支給されるという。

特に大量の金属を使用し様々な技術が必要とされる全身鎧はこの街以外ではなかなか見ることのできない一品である。

ちょうど今俺が苦勞しているのもその存在 聖域守護兵団

の所為である。

話は数時間前に戻る。

俺と子供達がラボナに入ろうとした時の事である。

商人や巡礼者に混じってラボナに入りたい人々の列に並んでいたのだ。

そして、ようやく自分達の番が来たのだがこれが露骨に怪しまれた。

俺達の検査を担当した兵士にそれはもう怪しまれた。

まあ、考えてみれば当然だろう。

行方不明になっていた子供を連れ戻した怪しい男なのだ。

この段階でもう怪しいのだがさらに俺の持ち物から盗難品が出てきたのだ。

もちろん俺が直接盗んだ訳じゃない。

倒した盗賊から回収した物だ(盗賊を倒せばその所持品を自分の物にしても良い事になっているのだ)。

だから盗難品があると告げられた段階で返す、と言ってしまった。

どうもこれが不味かったらしい。

俺からすれば何時でも調達できるし、さして使い道のない物だ。

だから、持ち主が居ればいくらでも返してしまっても全く問題ない。

だが兵士からすればかなりの高額な金品をあっさりと手放すのには何か訳があるのではないか、という事らしい。

ちょうど妖魔による騒ぎが起きていた事もあり兵士達は神経質になっているようだった。

そんなこんなで俺は門の脇にある詰所で数時間取り調べを受けているという訳だ。

ちなみに子供達は両親がすぐに迎えに来たため既に居ない。

その時に兄妹の両親には何度もお礼を言われてお礼がしたいから後で家まで来てくれと言われた。

まさかこんなに時間が掛ると思っていなかったが……

「さっさと掛るじゃねえ……」

聞こえないように小さく呟く。

既に答えられることは全て答えた。

尋問役の兵士も聞くことがなくなり同じ質問を繰り返すばかりになっっている。

得る物が何も無い無駄な時間がただジリジリと過ぎていた。

高かった日が沈み始めた頃、ようやく事態が動きを見せる。

何やら誰かがやって来るらしい。

誰が来るのか知らないがこの状況を変えてくれるなら大歓迎だ。壮年に入りかけた逞しい男が入ってくる。

部屋に居た兵士達が畏まっている。

どうやら上司のようだ。

一般の兵士と違い比較的軽装な部分鎧に短めな剣は帯びている。

「？」

この男、何処かで見たことが……？

俺が知っている人物なんて限られている筈なのだが。

壮年の男が俺を驚いたようにジッと見ている。

やはり何処かで会ったことが？

「……レイ、本当にレイなのか？」

その時になってようやく俺は彼が誰なのか理解った。

それはあまりにも遠く、あまりにも予想外の再会だった。

「セネル……？」

茫然と呟く。

それはカタントの街で共に兵士をやっていた同僚の成長した姿

だった。

過ぎ去った年月が彼の顔に大きな変化を齎していた。  
よほど苦勞したのだろうか歳よりもずっと老けて見える。

彼がセネルだと理解した時、複雑な想いが胸を過る。

不安、喜び、罪悪感、懐かしさ、恐怖

何と言ったら良いのか分からない想いが溢れてくる。

それはセネルも同じなのだろうか？

セネルもまた何も言わずただ無言の時間が過ぎる。

「久しぶり、だな」

「ああ、本当に久しぶりだ」

沈黙を破ったのはセネルだった。

その目には責任感が見える。

セネルは兵士を続け、今はこの街を守っているのだろう。

何故このラボナに居るのかは分からない。

だが、この街を守るうという意志は感じられる。

「……何しろ、この街に来たんだ……？」

「そっちのヤツには何度も言ったが子供達を連れて来ただけ……剣  
が欲しいとは思っていたからちよつと良くてな」

「そっか……信じるぞ」

そう言った時のセネルの表情は忘れることができない物だった。

その反応から俺は確信する。

やはりセネルも俺が妖魔である事を知っているのだ、と

その上で俺を信じてくれたのだ。

「……故郷カタンに誓おう」

その信頼に答えるべく俺はこの世界での心の故郷に誓う。

「後で会おう」

それだけ告げセネルは去る。

セネルが言ってくれたのだろう。

それからすぐに俺は街に入る事を許されたのだった。

## 揺動

色々あったがようやくラボナの街に入ることができた俺はテッドとリズの兄妹の家を訪ねることにした。

セネルとの約束　街に入る際に伝言とメモを兵士から貰ったのだ　は夜なのでまだ時間がある。

その空き時間を利用して先に用事を済ましてしまおうという訳だ。

街に入るとよりハッキリと分かる。

今、この街には妖魔が居るのだと。

外に居た商人や巡礼者とは違い、どう見ても街の住人に活気がない。

商店は開いているし人も歩いている。

だが、他人に関わりたくないという雰囲気を感じられる。

暗い、と言うのはまた少し違う。

何というか怯えている、と言った感じだろうか？

用事がない限り外に出ない、有ったとしてもコソコソと済ます。

そんなマイナスな雰囲気は街を覆っていた。

その元凶である妖魔の気配も色濃く感じられる。

これは俺の妖気探知能力が高いからではない、この妖魔には気配を隠す気なんてさらさらないのだ。

その事が距離が近づいた事でよく分かる。

そして詳細に探れるからこそ、この妖魔がどれだけ人を襲ってきたのか分かる。

妖気に纏わり付く血の匂いとても言うのだろうか？

そう言った物が感じられるのだ。

忌々しい



そう思う。

この感じからすれば遠からず許容できなくなってクレイモアに依頼を出すことになるだろう。

例えラボナと言えどもこの選択肢以外にはない。

クレイモアがこの街にやって来るきつかけを作った事も忌々しい。

だがそれ以上にコイツから感じられる血に酔った気配、無駄な流血を好んで行うであろうその在り方が許せない。

そう思う。

しかし、今はまだ動くことはできない、べきではないと言っべきか

……

ラボナとの付き合い方が分からないのだ。

まだ時間はある筈だ。

それが分かってからでも遅くはない、そう思う事にする。

伝えられた通りに歩いて行く。

セネルとの再会も気になる所だが街に入れてくれたという事はそう悪い事にはならない筈だ。

それに今考えても情報が少な過ぎてどうしようもない。

そう半ば開き直りメインストリートを物色しながら歩く。

メインストリートを外れ職人通りとでも呼ばれそうな通りへと入る。

実に興味深い。

今は時間がないからじっくりと見ることはしないが、この場所にはラボナの鍛冶師などが集まっているらしい。

店先に並べてある物を見るだけでもその事が理解る。

明らかに質が良い。

特筆すべき点はその全ての品物の品質が良い事だろう。

粗悪品らしき物が一つもない。

こう言った場では敢えて粗悪品と一般的に量産品、それに手が出ないような高級品を混ぜて売っている事が多い。

高値で粗悪品を掴まそうとしたり、量産品を高級品と偽ったりする

のが当然だったのだ。

しかし、ここではそう言った事が見受けられない。

あくまで適正な価格で売っているように感じる。

まあ、他の街で買うよりも少し高いようだがラボナ産というプラスアルファ程度に収まるものだ。

良い物があれば買おう、そう考えてしっかりとしかし素早く剣を確認していく。

今買わずともいい店を見つければ注文する事もできるので抑えておく意味は十分にある。

一軒一軒品定めしていく。

なかなか良い物が揃っているのだがこれは、というようなモノには出会えない。

次々に店を確認していく。

行き着いたのは通りの外れの方にある工房だった。

ピンと来る物のないまま終わりが近づき、腕の良い鍛冶師を探して作って貰うしかないかなと考え始めた時の事だった。

既に半ば諦めかけていた時にその工房に入った。

店の中まで入ったのは外に置いてあった剣が何れも高いレベルで均質な良い剣だったからだ。

良い剣ではあったが求めている物とは違う。

しかし、その出来、特に複数の剣を高いレベルで同じように作る事に惹かれたのだ。

店と工房が一体となっているよく見かけるタイプの鍛冶師が営んでいる店だった。

店に入った瞬間にむわつとした熱気が襲いかかってくる。

どうやら工房と店に区別がない類の建物だったらしい。

店の奥の方に大きな炉が見える。

この大陸の物にしてはかなり大きい、個人で所有するには限界に近い大きさだろう。

その奥には何か作業をしている男の姿がチラッと見える。壁には思った通り外にあるモノよりも良い剣が並んでいる。これならば……そう思う。

「いらっしやい！……あら、来てくれたんだねえ！」

カウンターで何か書き物をしていた女性が俺に気付いたらしく声を掛けてくる。

その時になって気付く。

カウンターに居た女性に見覚えがある事に

「おや、ここがケヒトさんのお宅でしたか、良い剣に誘われて寄ったのですが」

ここはテッドとリズ兄妹の実家ケヒトさんの工房だったのだ。

ちなみにお母さんの名前はブリジット＝ケヒト

お父さんの名前はリブストス＝ケヒトという。

名乗った時に鍛冶をやっているという話は聞いていたのだがここまでレベルが高いとは正直思っていなかった。

そして、これは……ちょうど良い、のではないだろうか？

縁があると言い換えても良いだろう。

「あらあら、嬉しい事言ってくれるわねえ」

「いえいえ、本当の事を言っただけですよ」

ブリジットさんはバシバシと背中を叩きながら嬉しそうにそう言う。

「アンタァーレイさんが来たわよぉー!!」

奥からリブストスさんと子供達が出てくる。

べつやら子供達も奥に居たらしい。

「わぁー正義の味方の兄ちゃんだ！」

「テッド兄！それは秘密だって約束したのですよー！」

「いっけね、ごめんねレイ兄ちゃん!!」

子供達が俺の姿を確認すると同時に飛びついてくる。

テッドは俺の事を「正義の味方」と呼んでいた。

しかし面倒な事にしたくなかったし、そう呼ばれるに足るとも思っていないから止めさせようとしたのだが、この調子では意味がなかったようだ。

実際、噂の中身のよくに盗賊共を倒したのは俺なのだが「正義の味方」の所業ではないだろう。

片っ端から皆殺しにして来たのだから……

だからだろう。

正義の味方と呼ばれる度に微妙な気分になるのだ。

テッド達にとって俺がヒーローに見えたというのは分からないでもないのだが……

「いやはや、良く来てくれましたレイさん！あなたを歓迎します！それにしても良くぞ、良くぞ息子達を助けてくれました。あの日息子達が戻って来なかった時から方々手を尽くしたのですが手掛かりもなく絶望しかけていた所でした。本当に、本当に感謝します。ありがとうございます！」

「私からも言わせてくれよ、本当にありがとうございます」

旦那さん、リブストスさんが涙目になりながら俺にお礼を言うてる。

さつき子供達を迎えに来た時にも号泣しながら何度もお礼を言われた時には気付かなかったが、その頬は痩け眼の下にはクマが見取れる。

子供達が外で遊んでいた時に誘拐されてからまともに眠っていないのではないだろうか？

方々手を尽くしたと言っていたが本当に文字通りの意味なのだろうか。

それに比べたら俺は大したことはしていない。

その事を素直に伝える。

「いえいえ、私は大した事はしていませんよ、あなた方の努力がこの結果を引き寄せたんですよ」

「そんな事ありません！あなたが居なければ今頃子供達は……、是非何かお礼をさせて下さい!!」

「別にお礼なんていいですよ。これだけ感謝して頂いたのならそれで十分です」

「そももいかないよ、……そうだ！アンタさっき剣を見に来たって言ってたわね！」

「……そっか!!どうでしょう？私からあなたに一振り剣を送りたいのですが受け取って頂けないでしょうか？」

「そこまでして頂く程じゃ……」

何か話がドンドン上手い方向に進んでいく。

断ろうと思ったのだが、ここで受け取らないという選択肢はない事に気付く。

ここで断るとこの人達の善意を無碍にする事になる。

それはよろしくない。

実際、今良い剣を求めているのだ。

ならば気持よく善意を受け取るのが最善だと思う。

その上で別の形で返すべきだろう。

「いや、やはりここはご好意に甘えさせて貰います。是非あなたの打った剣を頂けないでしょうか？」

俺がそう言うとかヒト一家は破顔する。

ブリジットさんとリブストスさんだけじゃなく子供達も喜んでい

る。  
正義の味方の兄ちゃんが家の剣使っただって！何て無邪気に喜んで

いる。  
そしてどんな剣が良いのかと根掘り葉掘り聞かれる。

最初は要望に近い剣を持ってくるために聞いているのだろうと思っ

ていたのだが、聞いてみると当然のように今から打つ、と言われて

てしまう。  
それには少し困ってしまったがこれからの事を考えると良い物を

手に入れる絶好の機会を逃す手はない。  
ついでに短剣や欲しかった特殊な物を幾つか注文する。  
これらもタダで作ってくれると言ってくれたのだが、そこはさすが

に受けずにオーダーメイドした場合の正規の料金よりも割増してお

金を押し付けるように渡す。  
それでも剣をオーダーメイドする事を考えればまだ安いのでお礼

としては十分過ぎるのだ。  
それでも若干渋っているリブストスさんに制作風景を見せて欲し

いとお願ひする。  
正直この要望が通るかどうかは微妙だと思っていたが、リブストス

さんはあっさりとその程度で良ければ、と受け入れてくれる。  
絶対他に漏らさないようにと釘は刺されたが、まあ当然だろ

う。  
オーダーメイドする事になった剣を作るには材料が足りないらしい

いので短剣を制作してくれるらしい。  
炉の方に進むと何処からか若干黒みがかかったインゴットをリブス

トスさんが持つてくる。  
既に炉に火は入っているらしく赤い炎が燃え盛っている。  
インゴットと小さな金属片をいくつかつかるとぼの中に入れ、それを炉

の中に投入する。

長いハサミで場所を整えた後、ファイゴで風を送り込む。

火が一気に燃え上がり黄色い炎が発する熱気が頬を撫ぜる。

リブストスさん様子を見ながら風を送り続ける。

時折何か粉末状の何かをインゴットに掛けては落とすと言った作業を行なっている。

傍で見ているにも関わらず光で目が痛くなってくる。

そんな火をずっと見つめ続け、熱気を最も近くで受けているリブストスさんはどれだけ大変なのだろうか。

インゴットが完全に溶け液体のようになっていく。

十分に溶け混ざり合った事を確認し容器を取り出し、湯口から金型に流し込む。

どうやらこれで一旦は終わりらしい。

「……これで一段落ですね。後の作業は冷えて固まった後ですね」

「なるほど、溶けた鋼を型に流し込んで形を作るのですね」

「ええ、ラボナ最新の技術です。ですので他言無用に願います。」

「分かっています」

予想していた事だがこの大陸における鉄製品は軒並み鑄造らしい。鍛造品らしき物は見たことがない。

もっとも別に専門家でもないから単に見逃しているだけの可能性も高いのだが……

鍛造の方が性能が良い筈なのだがないならばどうしようもない。

自分でやるうにもさすがにそんな技術も知識もない。

唯一可能性があるとするれば”組織”だろう。

さすがに組織に剣を作って貰う訳にはいかない。

やはり何処かでクレイモアの大剣を手に入れたいものだ。

正直あの武器の性能はおかしい。

何しても折れも曲がりもしないって一体何でできているのやら

……

だが、だからこそ武器の差をなくすためにも大剣が欲しいのだ。

何処かに墓標として置いていかれた物が出回ってないかとか落ちてないかとか目を光らせているのだが今の所見つかっていない。

その後、晩御飯に誘われたが先約があると断ってケヒト家を立ち去る。

その際に子供達が行かないでと大変だった。

また明日も来ると約束してどうにか我慢して貰った。

因みに注文した物が全て出来上がるまでに一週間掛るらしい。

正直に言えば出来合いの剣を買ってすぐに街を出るつもりだったのだが想定以上に街に居なくてはいけないらしい。

そうなってくると問題になるのが妖魔だ。

関わりたくなかったのだが、関わらざる負えないのかも知れない。

最優先はクレイモアと遭遇しない事だ。

そのためであれば妖魔の排除も選択肢の一つに入れておくべきだろう。

人目がある場所で妖魔を討伐など組織に見つけられるきつかけになるだけだからやりたくないのだが仕方あるまい。

それに知らない人ならばともかく知り合ってしまったのだ。

死んで欲しくなどない。

だがそれでも俺は……

迷う心を抱えたまま、もう一つの懸案事項へと俺は向かうのだった。



## ありがとう

日も沈みきり暗闇の中を目的地に向け歩いて行く。  
既に入通りは絶えていた。

たまに見かけられるのも巡回している兵士だけだ。

その度に呼び止められるがセネルと約束があると告げるとすぐに解放してくれた。

妖魔の気配も今の所大人しい。

今宵は人を襲わないつもりなのだろうか？

その事に幾分安堵しながら目的地へと歩を進める。

20分程歩いただろうか？

目的地に到着する。

そこは大聖堂から程近い大きな一軒家だった。

一度深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

ここでこの町とどう関わるかが決定するだろう。

覚悟を決めノックをする。

するとすぐに若い使用人らしき人物が出てきてすぐに案内してくれる。

きっと事前に俺が来る事を知らせていたのだろう。

全く待つ事なく応接間らしき部屋に通される。

応接間には柔らかく質の良さそうなソファが3つと良い物と一目で分かる机だけが置いてある。

他にある物といったら落ち着いた色合いの風景画と美しい花が飾つてある程度だろう。

部屋の構造も窓はなくドアは一つのみ、そのドアもどつやら分厚く音が漏れにくい作りになっているようだ。

応接間、それも何か秘密の話をするのに向いた部屋らしい。

その事に僅かに緊張する。

部屋の中では既にセネルが待つていた。  
机に肘を付き、目を閉じジツとしている。

これから話すことでも考えているのだろうか？それとも町の事を  
？

そんなセネルの姿を見て再び不安に駆られる。

大丈夫だ

そう言い聞かせ不安をねじ伏せようとする。

案内されるがままにセネルの正面のソファに座る。

やはり良い物らしく柔らかく沈み込みながらも適度に弾力性を  
持つており包み込まれるような座り心地だ。

使用人らしき人物が優雅な仕草で退出していくのを横目で見なが  
ら話しかける。

「じんばんは、セネル……久しぶり、だな」

セネルが目を開ける。

一瞬視線が絡まる。

そこに見えたのは何だったのだろうか？  
判別できる前に視線は外れる。

「……ああ、久しぶりだな」

真っ直ぐと背筋を伸ばし相対する。

セネルも姿勢を正し、続ける。

「良く来てくれた。もしかしたら、来ないかも知れんと思っていたが

……」

「……古い友との再会だ。時間ぐらい作るよ」

セネルがふっ、と小さく笑みを浮かべる。  
その顔に重ねてきた苦勞が垣間見える。

「そうか、いやそうだな。それが普通だな」

「迷子を送り届けたら友人に再会した、俺にとってはそれだけなんだ」

言外に俺は何もする気はないと伝える。

同時にお前たちはどうするのだ？と問い掛ける。

セネルは俺が妖魔である事を知っている筈なのだ。

その上で拘束もせずに町へと招いた。

あっさりと解放されたのだからセネルが手を回したためなのではないだろうか？

だからこそ何か意図がある筈なのだ。

「助けて欲しい」

一瞬の沈黙の後セネルが絞りだすように言葉を紡ぐ。

無言で先を促す。

「……今、この町には妖魔が居る。それを倒す、いや見つけて欲しい」

お前ならできると言外に言われる。

確かに俺ならできる。

そしてここまではある意味予想通りだ。

いや、予想の中でも最良の部類に入るだろう。

どちらにしろ俺はこの町の妖魔をどうにかするつもりだったのだ。

それに要求も想像以上に穏当だ。

もっと高圧的か脅迫してくる事も覚悟していたのだが……

「何故クレイモアを呼ばない？そっちの方が良いんじゃないか？」

いくら町を救うためでも、いや救うためだからこそ妖魔である俺よりもクレイモアを使うべきな筈なのだ。

何せこっちは完全な黒、クレイモアはグレーだ。

多額のお金が掛るとは言ってもこの町であれば問題などない。

貧乏な村の全財産程度そこらの司祭が個人で所有しているのだ。

まあ、予想はしている。

金を払う事自体がダメなのだろう。

妖かしのモノに協力を願う、その行為自体が許せないのではないだろうか？

「無理だ、金が出ない」

「金が出ない？ どういう事だ？ 宗教的な物 妖かしのモノに頼りた

くない とかじゃないのか？」

「確かに教条主義な者がそう言った主張をしているが、それは多数派ではない」

どういう事だ？

聖なる都ラボナは一切の妖かしのモノを排除しているんじゃないのか？

そう言えば今までも違和感はあった。

認識の違いとでも言うのだろうか？

妖魔は最悪に質の悪い害獣でクレイモアは強欲で不気味な駆除屋、その程度の悪意しか感じなかった。

もちろん被害者やその周りにはもっと憎悪していた。

しかし、それ以外の人間からはそこまでは感じなかった。

漫画ではなく本物の世界だからこそその違いなのだと思っていたのだが、そうではないのか？

「実際私の義父 司教を務めている はそう言った主張をしている。とは言え多数の反対派を抑えきれ程強権的に振る舞う事などできない」

「……待て、お前の義父はこの町の実質的なトップ、なのか？……いや、それよりも教条主義者が多数じゃないなら一体何が問題なんだ？」

「だから、金が出ないんだ。ついでに答えておくと義父がこの町の重要人物であるのは間違いないな」

「どうして金が出ないんだ？」

セネルがどうしてラボナのトップを義父と呼ぶようになったのは非常に気になる所だが今は何故金が出ないかだ。

声を擧め、不快感を顕にしながら吐き捨てるように俺に胸糞悪い真実を教える。

「……被害者がスラムの住人だからだ」

「……邪魔な人間を殺してくれているから放置しているって事か……」

セネルが無言で頷く。

ようやく話が見えて来た。

現在妖魔がこの町に居るが被害はスラムに集中しているのだろう。

そしてスラムに住む人間はこの町にとって利益を生む人間ではない。

むしろ積極的な施しを教義に掲げている所為で負担になっているのだろう。

犯罪率も高く、益もなく負担ばかりが大きい。

そんな人間を勝手に減らしてくれるのだ。

町の有力者からすれば感謝したいような行為、って訳だ……胸糞悪い。

俺がこの町の裏事情を理解したことを見て取ったのだろう。

再びセネルが頼んでくる。

「助けて欲しい、例えスラムの住人であろうともラボナの人間なんだ

……」

「……分かった。手伝うよ」

「ありがとう、やはりお前は俺の知っているレイなんだな……あの時  
も変わってなんかなかったんだ……」

「……俺は俺だ。俺以外の何者にも成り得ないしなるつもりもない」

「そうか、そうだな……ああ、そうだ、これはもっと早く伝えるべき事  
だった」

そこでセネルは一度言葉を切る。

そして立ち上がり俺の手を取る。

「ありがとう」

その言葉には長年に渡る万感の思いが籠っているように感じた。

「お前が居なければ私は妻を永遠に失ってしまう所だった。そして街  
を守るために戦ってくれた事を感謝する」

それはこの町ラボナでの事ではなかった。

「こちらの世界での故郷カタンでの事だった。

「街の多くの住人がお前に感謝していた。そしてすまない、私達は町  
を守ってくれたお前を恐れてしまった……」

「そうか」

頬を何かが撫ぜる。

いつの間にか涙が零れていた。

今まで感じていた罪悪感が涙に洗い流されたように感じる。

「そうか」

もう一度呟く。

思いが詰まり言葉が出ない。

「ありがとう」

ようやく出てきた言葉は感謝の言葉だった。

「感謝はこっちがすべきなのだが……もう一度、いや何度でも言おう  
ありがとう、カタントを守ってくれてありがとう、そして今度もまた  
助けてくれてありがとう」

本当の意味で俺達はそこで再会したのだった。

それからの時間はあっという間に過ぎた。

話す事はいくらでもあった。

話したい事もいくらでもあった。

俺達は夜遅くまでいつまでもいつまでも語り合っただけであった。

## 鍛冶

夜遅くまで語り合い、飲み明かした俺はセネルの好意に甘え一泊していく事になった。

と言うか、この時間に開いている宿などないから他に選択肢が野宿しかなかったのだが……

場合によってはそのままこの町から出て行く事も考えていたから仕方ないと言えば仕方ないのだろう。

まあ、幸いな事に予想もしていないような豪華な部屋に泊まることのできたのだ。

役得だと思っておくことにする。

翌朝、差し込む柔らかな太陽の光と小鳥のさえずる声に優しく起こされる。

清浄な空気を胸いっぱい吸い込む、実に清々しい朝だった。

久しぶりに何の心配もなく熟睡できた俺は気持ちの良い朝を迎えたのだった。

朝食に呼ばれた俺はそこで初めてセネルの家族と顔を合わせる。

初めて会ったセネルの奥さんのカミラは嫺やかな美女だった。

白魚のような指で息子のガークを優しく抱えていた。

俺の姿を見た時、彼女から僅かな驚きと不安を感じる。

彼女もカタントの街の住人だったのだ。

当然俺の正体を知っているのだろう。

ならば事前に知らされていたとは言えこの反応もおかしくはない。

むしろ僅かな反応のみで後は柔らかく微笑みこちらに近づいてくる事の方に驚くべきであろう。

「お久しぶりです、いえ初めましてと言うべきでしょうか？セネルの妻のカミラです。主人からも聞いているとは思いますが、あの時貴方



に助けて貰いました。本当にありがとうございます」

感謝の言葉を口にするカミラ、その言葉には心が籠っていた。その柔らかい微笑みには一切の嘘が感じられなかった。

「いえ、もっと早く駆けつけられたら……と今でも思っています」

もっと早く駆けつけられたら……

あの時街から離れていなければ……

もっと沢山の人を守れたらだろうか……

アリスを、助けられたらだろうか？

後悔は先に立たない、それでも思わずにはいられない。

これまでも何度も思った事だった。

「そう、ですね……でもこの子を、見て下さい。名前はガーク、貴方が救った命です」

ガークを見る。

まだ小さな子供だった。

生意気そうな顔立ちをした男の子だった。

まだ、甘えたい盛りなのだろう。

チラツと俺を見た後はしっかりとカミラさんに掴まっていた。

歳は3歳と聞いていたが、それにしても大きい。

身長の高くないカミラさんが抱きかかえるには少し重そうだった。

俺がこの子を救った。

……本当にそうだろうか？

ガーク、彼の名前はガークだ。

そこに少し引っ掛かる。

ラボナでガーク、確証はない。

だが、原作で兵士をしていた彼の幼い時の姿なのではないだろうか

？

ならば、カタントの時に俺がカミラさんを助けなくても何らかの事情で助かったのではないだろうか？

そんな疑念が頭を過る。

「貴方は全てを救う事はできませんでした……でも、確かに救われた命があるのです。私もその一人です。貴方は確かに救ってくれたのです。その事に感謝します」

話はそこで終わり、微妙な疑念を抱きながらも朝食を共にする。

ガークは見知らぬ俺が怖いのかカミラさんにピタリくっついてチラチラと見るだけだった。

カミラさんやセネルとは拙い言葉で必死に話していたが俺が話しかけてもカミラさんにくっつくだけだった。

……もしかして俺、嫌われている？

ちなみに司教をやっているカミラの叔父　カミラの父親の兄は基本的に大聖堂で生活しているらしくめったに来ないらしい。

朝食を済ませ、セネルの家を辞去する。

妖魔を討伐する準備ができ次第連絡してくるらしいので一先ず時間があった。

「どうするかな……」

この町にしばらく滞在する事になりそうだ。

先に宿を確保するべきだろう。

そう思いセネルに勧められた宿へと歩き始めるのだった。

宿の手続きを終わらせ再び外へと出る。

昨日の約束を果たしに行くのだ。

職人通りへと足を運び、店を冷やかしながら目的地へと向かう。

やはりリブストスさんの所程目を引く物はない。

「あっ!!レイ兄ちゃんだ!!」

「あら、おはようございますなのです」

しばらく歩いていると不意に声を掛けられる。

そこにはテッドとリズの兄妹が居た。

「ああ、おはよう、リズ、テッド」

「兄ちゃん!どこ行くんだ!？」

「ん?お前達の家に行こうと思ってたところだぞ」

「そうなのかー!じゃあ、案内するぜー!」

「テッド兄、そんなに引っ張ってはダメなのですよ、さあ、出発するのです」

テッドとリズに左右の手を引っ張られる。

仕方ないなあ、そう思いながら子供達に身を任せて歩いて行く。

結局店まで引っ張られながら連れて行かれてしまった。

中に入りリブストスさんとブリジットさんに挨拶する。

「レイ兄ちゃんが来たぞー!!」

「ただいまなのです。レイ兄を連れて来たのです」

「おはようございます。またお邪魔します」

「あらあら、いらっしやい、よく来てくれたねえ」

「よく来てくれた、歓迎する」

お客さんも居らず比較的暇だったらしく歓迎される。

しばらくはお茶を御馳走になったり子供達と遊んだりして時間を過す。

そんな和気藹々とした時間が穏やかに過ぎていく。

「そう言えば鍛造は行わないんですか？」

リブストスさんにその話題を振ったのは雑談の続きだった。以前から気になっていたのだ。

この大陸に来てから鍛造による剣を見たことがなかったからだ。今までは聞く相手も居なかったしそこまで興味もなかった。しかしせっかく本職と仲良くなれたのだ、聞いておく。

「鍛造か、量産する必要のない物や簡単な物、それに修理する時は鍛造でやるね」

「剣を打つ時には使わないんですか？」

「そうだね、ちょっと形を直したい時にやるぐらいかな？基本的に鑄造のみだね」

リブストスさんはどうだい、凄いだろと言うような感じそう語る。

そこには自分の技術に誇りを持つ職人の姿を見た。

ふむ、鍛造よりも鑄造の方が先端技術扱いなのか？

「剣を鑄造で作るのは安定した質が得られるからですか？」

「そうだね、鍛造でやると質が安定しないし何より脆いからね」

「……なるほど」

どうも鑄造技術に偏って発展したのではないかと思える。

原因は何かは分からない。

採れる鉄が鍛造に向いていないのか……

もっと単純に技術が追いついていないのか……

切れ味が求められなかったのか……

「あの昨日の続きって見せて貰うことはできませんか？」

「ん？ああ良いよ、後は型を外して削るだけだから……ちょっと良い、この後仕上げをしようと思っていたんだ」

昨日とは違い見学をあつさり認めろ。  
俺を信用している、という事だろつか？  
いや、それよりもここからの工程に秘密はないという事だろつか。

リブストスさんは外していた手袋を身に着け、置いてあつた金型をハンマーを使って器用に取り出す。

そして出来上がったバリが付いたままの短剣の形をした鉄塊を炉にくべる。

軽く赤熱し始めた程度で引き上げ、長いハサミで器用にバリと湯口溶けた金属を流し込む場所を切り取る。

そして未だに赤熱している鉄塊を液体に突っ込む。

液体　おそらく油　に入った熱した鉄が急冷され液体が音を立てて弾ける。

十分に冷却された鉄塊を今度は水の入つた水槽に入れ洗う。

そして、出来上がりを確認し、ブリジットさんと呼ぶ。

何かよく分からない木製の装置　手動の研磨装置だろつか？  
の前に移動する。

「じゃあ、行くよ」

ブリジットさんが言い、両手で装置に取り付けられた紐を持ち、その一方を力強くしかし滑らかに引く。

すると、装置の一部が回転を始める。

一方の紐を引ききると逆側の紐を今度は引く。

今度は逆回転を始める。

それを一定のペースになるように何度も繰り返す。

タイミングを見計らいリブストスさんが大分短剣らしくなつた鉄塊を装置に近づける。

甲高い音が響き剣の刃を装置が削る。

それを刃全面に行なっていく。

紐を引き続けているブリジットさんから玉のような汗が湧き出る。一方そこまで汗をかくような作業でもないリブストスさんにも汗が滲む。

それだけ集中しているのだろう。

俺も息を吞んで作業を見守る。

どれぐらい時間が経っただろうか？

ようやく刃全てを削り終わる。

終わったのを見て取ったのか子供達がやって来る。

手には飲み物、両親とついでに俺にも飲み物を用意してくれたらしい。

「はい、飲み物なのです」

「父ちゃんと母ちゃんもおつかれ!!」

ありがたく頂戴する事にする。

冷たい飲み物で軽く休憩を取った後、作業に戻る。

今度は砥石を用意して研ぎ始める。

機械ではできない繊細な仕上げを手作業で行うらしい。

そして短剣の刃が出来上がる。

手早く柄と鐔を取り付ける。

短剣が完成する。

今まで見て分かった事は鑄造がメインで鍛造はほとんど行われていない事

部分的ではあるが熱処理 焼入れが が行われていた事

そして、俺の知識ではこれ以上どうすれば良いのか分からないという事だ。

刀を打つのに何度も叩いていたな、とか温度管理が重要なのだ、とか他にも何か熱処理していたなぐらいは分かる。

逆に言えば俺の製鉄に関する知識はその程度しかないのだ。

昔鉄工所を見学した程度の知識では適切なアドバイスなど不可能

だ。

結論は良い物を見つけるしかないという物だった。

「やはり、どこかでクレイモアを……」

「ん？何か言いましたか？」

「いえいえ、何でもありません。それにしても見事な仕上がりですね」

これ以上考えても仕方ないと思いを止め、ケヒト一家との雑談を楽しむ事にする。

その日は結局夕方まで子供達とせがまれるまま遊ぶことになるのだった。

## 予兆

side ジェシカ

シール山を漂ってくる禍々しい妖気を頼りに登っていく。  
妖気の間はもう程近い。

その事を覚醒者狩りのメンバー達に伝える。  
仲間達の雰囲気や厳しい物に変わる。  
当然だろう。

この中で覚醒者狩りの経験があるのは私だけなのだ。  
妖魔よりも遙かに強い覚醒者と初めて戦う事になるのだ。  
この段階で気を引き締めないような奴とは一緒に戦いたくない。

「覚醒者ツスカ、どれくらい強いんですかね？ジェシカ」  
「ハッ、覚醒者が何だっただ！どんなモンか知らねえが俺があっさり倒してやんよー！」  
「……許せない、戦士なのに……戦士だった癖に……」

今回の覚醒者狩りのメンバーが好き勝手に喋る。  
個性的な面子が揃っているようだ。

……実に不安だ。  
ちなみに素直に覚醒者の強さを聞いてきたのがナンバー17エルダで、生意気に吠えたのが最近期待のナンバー12スザンナ、ブツブツと呟いている物騒なのが印を受けたばかりのセラ、ナンバーは37だ。

通常の覚醒者狩りでは一桁ナンバーが2名以上いる事が普通なのに相性が良いとは言え非力な私のみ……  
その上エルダ以外が不安で仕方ない。  
特にスザンナだ。

最近力を付けナンバーを一気に上げたらしいのだが、その所為か驕



りが見える。

知らないからある程度は仕方ないとは言え、本当の意味で覚醒者の強さを理解していない……

最も覚醒者狩りの機会などそうはないから仕方のない事なのかも知れない。

それなりに長い事戦士として戦っている私ですら覚醒者と戦った事など両手の指で足りるのだ。

覚醒者の強さを理解しろ、という方が無理なのかも知れない。

それでも生き残るためには一人では勝てないと理解し、連携して戦うしかないのだ。

その事を口を事ある毎に伝えているのだがどうも伝わっている気がしない。

それどころかスザンナにいたっては私が怯えているのではないかと非難してくるざまだ。

……これ以上言い募っても逆効果だろう。

私にできるのは可能な限りサポートしてやる事だけだ。

直立したカブトムシに蟹のハサミを足したような異形の化物

覚醒者　と相対する。

蟹カブトムシとでも呼ぶ事にするか……カブト蟹だと何か別の物みたいだし……

戦闘は既に終局を迎えていた。

発見した直後にスザンナが独走し覚醒者に突っ込んで返り討ちにあつた以外は順調だった。

スザンナは……こう言つては何だが、自業自得だろう。

不幸中の幸いは覚醒者の動きを見られた事とエルダとセラの二人の士気が上がった事だろう。

スザンナが殺られた直後こそ驚愕と恐怖で固まっていたが、今は復讐に燃えている。

とは言え決して冷静さをなくしている訳ではない。  
若干手助けしたとは言え、最高の精神状態だと言えるだろう。

既に化け物はボロボロだった硬い外皮も繰り返された斬撃によりそこかしこがひび割れ血を流している。

スザンナを一撃で切り裂いた二対のハサミも一方が半ばから破壊されている。

蟹カブトムシは既に攻撃手段の大半を喪失している。

それでも油断せず仲間に号令する。

「止めるわよ、機を逃さないでね？」

「よっしゃー任せとけ、ジエシカ！」

「……今度は外さない……スザンナの仇!!」

「……セラも大丈夫だってさ！」

「そっじゃあ、いくわよ？」

配置に付いたのを確認し、内心の忸怩たる思いを押し隠し告げる。  
同時に自身の妖気を開放し覚醒者の妖気に同調させる。

覚醒者が何を行おうとしているのかを見極める。

そして行動とは関係のない意識の届いていない部分を操作する事で覚醒者の動きを阻害する。

妖気が圧倒的に多い覚醒者であろうとも意識していない部分であれば操作できる。

全力で殴ろうとするその動き自体はどうしようもなくとも、踏ん張っている足の力を抜く程度はできるのだ。

そして動きを止めるのであればその程度で十分だ。

一瞬でも気が逸れれば、そこから本来は干渉できないような部位にも連鎖的に干渉できる。

それを応用すれば妖力を大幅に消耗するが数秒間程度遙か格上の動きを止められる。

妖気を限界ギリギリまで開放し蟹カブトムシの動きを止め叫ぶ。

「今よ!!!」

私の声に押されるようにエルダとセラが動き出す。  
覚醒者が藻掻くようにのた打ち回る。

「クソがアアアアアアアあ!!!! コンナ所デ!!! コンナ奴等に!? コノワタシ  
ガ、破れるダト!!!!」

覚醒者が全妖力を用いて阻害を振り切ろうと足掻く。  
無駄だ。

確かに渾身の攻撃自体は逸らすことなど不可能だ。

しかし、その土台はどうだろうか？

ほんの少し腹筋を収縮させてやる。

それだけで渾身の攻撃は明後日の方向に飛んでいく。

セラとエルダが硬い外皮の隙間とひび割れた部分を狙い切り刻んでいく。

セラが脚を半ばまで切断する。

エルダの一撃が態勢を崩した覚醒者の目を貫く。

セラが残った目を攻撃しようとするも弾かれてしまう。

エルダが外皮の隙間を狙い切り裂くが浅い。

どうにも火力が足りない。

……スザンナが居れば、そう思う。

何かできたのではないか？

スザンナの事を思い悔やむ。

できる事はなかった、そう思う。

しかし本当にそうだろうか？

覚醒者の脅威を伝えられていたのだろうか？

リーダーシップを発揮できていただろうか？

飛び出す前に止められなかっただろうか？  
スザンナの行動を予測してフォローしてやる事は？  
どうしても悔いが残る。

ただ事実としてスザンナは私の言葉を無視して覚醒者に突撃した。  
そして、ハサミを見事に避け浅くとは言え外皮を切り裂いた。  
一度離脱し大したことないと言ったスザンナ

この時にもスザンナなら大丈夫だと安心しなければ防げたかも  
知れない。

そして同じように突撃しハサミを避けようとして伸びてきたハサ  
ミに掴まってしまったのだ。

両断されるスザンナを私達は見ている事しかできなかった。  
そんな中で上半身のみになったスザンナが動く。

それは一体どんな想いだったのだろうか。  
妖力を全開し手に持った大剣を覚醒者に投擲する。  
大剣は見事に覚醒者の額に直撃し、傷つける。  
だが、それだけだった。

罅こそ入ったものの堅牢な装甲に阻まれてしまふ。

「ハッ、ざまあねえな……クソ！」

それがスザンナの最期の言葉だった。

スザンナは怒り狂った覚醒者に叩き潰され死んだ。  
一瞬の事だった。

だが!! 助ける事が絶対に不可能な程ではなかった。

私は勝利のために見殺しにしたのだ。  
助けられるかも知れないという願いに間に合わないだろうという  
諦めが混ざった。

その一瞬の躊躇がどうしようもなかった。  
私は間に合わなかったのだ。

スザンナは死んだ。

これは動かしようのない事実だ。

だが、犬死だっただろうか？

否

犬死などではあつてはならない

エルダとセラに合図を出し一旦引かせる。

妖力に僅かな余力を残した状態で行動障害を解除する。

脚を断たれ目を潰された蟹<sup>覚</sup>カブトムシ<sup>醒</sup>者はまだ立ち直っていない。

身体つきが変わる程妖気を開放し地を駆ける。

空中に跳び上がり重力を加算した一撃を覚醒者に叩き付ける。

狙うは額、スザンナが残した罫だ。

相手が万全であればここまでやっても私の一撃では抜けなかった  
だろう。

果たして大剣は覚醒者の装甲を抜き脳を破壊し尽くす。

悶えるように一度大きく痙攣し覚醒者は地に倒れ伏すのだった。

戦いは終わった。

スザンナを埋めてやる。

墓標代わりに大剣を突き立てる。

涙はない。

ただ、無言で黙祷し次なる任務へと立ち去る。

夜、鬱蒼と茂った森の中、火を焚き野宿をしていた私に近づく影が  
あつた。

黒い布で全身を口元まで覆った怪しげな男だった。

名前はエルミタ、私を担当している組織の黒服だ。

いつ見ても怪しげで不気味な格好をしている。  
そんな格好で突然暗い森の中から音も立てずに近寄らないで欲しいと思う。

「次の指令だ」

エルミタはやって来て早々に告げる。

覚醒者狩りの結果も他の戦士の生死すら聞こうとしない。

昔は戦士の生死と戦闘報告程度は確認していたのだが……

これが信頼なら何の問題もない。

だが、そんな訳もないだろう。

今でも報告を要求する事がない訳ではない。

しかし、その頻度は大きく下がっている。

これが普通の妖魔狩り程度であれば気にしないのだが、滅多にない覚醒者相手なのだ。

ならば、監視されていたのだろう。

……おそらく次代の組織の眼

それが順調に成長しているのだろう。

知り過ぎている私にそろそろ死んで欲しいのだ。

そう考えると今回の覚醒者狩りの面子も怪しいものだ。

まあ、組織がそう思っている事など数年前から知っている。

最近さらに露骨になってきたが、まだ死ぬつもりなどさらさらない。  
い。

「南の地ミュシヤ、その最南端に居た盗賊を襲った妖魔を見つけろ」

「……盗賊を襲った妖魔ですって？」

おかしい指令だった。

いつもであれば何処其処の町に向かいそこにいる妖魔を斬れという形で命じられる。

それなのに今回は盗賊を襲った妖魔、そこだけでもおかしいのに斬

れではなく見つけるなのだ。

一体誰が依頼を出したというのだろうか？

盗賊？

まさか、シマが空いてラッキー程度にしか思わないだろう。

多少頭が回るのでも別の所に移動するだけだ。

依頼など出す訳がない。

近隣の町村？

盗賊が減って喜んでるんじゃないかしら。

自分の町に来たら考えるでしょうけど。

「そうだ、ミュシャでおかしな動きをしている妖魔がいればおそらくソイツだ」

「何故かしら？」

「お前が知る必要はない」

唯一見えているエルミタの目をジッと見つめながら言っ。  
依頼が出る訳がない。

ならば組織にとって何か不利益を齎したのではないだろうか？

「……邪魔になったのかしら？」

「……チツ、少し警戒しているだけだ……ソイツは偶然接触した戦士から逃げ切った」

「ふ〜ん偶然、ね？」

「もう一度言っ知る必要はない」

「……分かってるわ」

これ以上はエルミタから情報は得る事はできないだろう。

エルミタに探してみるから待つように告げる。

ここまでの情報からでも幾つか分かる事はある。

その妖魔が組織にとって目障りだという事はほぼ確定。

今、ミュシャの方は比較的安定している。

それは2週間前に確認したから間違いない。  
なのに最南端に戦士が偶然居た。

おそらく組織側で何か誘導したのだろう。

そこでケリを着けるつもりだったのに逃げられてしまったから見  
つける、という訳だ。

ここからは推測になるが、おそらくその妖魔は盗賊を殺して回っ  
ているのではないだろうか？

だからこそおかしな動きをしている妖魔、何て言ってきたのではな  
いだろうか。

基本的に妖魔は一度住み着いたらその場所からしばらくは動かな  
い。

その基本に外れた動きをした妖魔なのだろう。

……盗賊を襲う妖魔

その存在に違和感を覚える。

妖魔は差別をしない。

老若男女容赦せず、だ。

そう、狙う相手を選ぶ事などしないのだ。

だからこそ盗賊のみを狙っていると思われるその妖魔はおかしい  
のだ。

「……まさか、ね」

エルミタに聞かれないうちに小さく呟く。

私はそんな事をする妖魔に心当たりがあった。

そうであって欲しくはない。

そんな生き方をしていて欲しくない。

だが、もし彼だったら……

頭振って意識をエルミタに戻す。

「ダメね、ここからじゃ距離が遠いし妖魔の数が多すぎて分からない



「わ

「そうか……本当に見つからなかったのか？」

「どうやら疑っているらしい。」

「ほぼ確定だ。」

エルミタはその妖魔と私の繋がっていて庇っていると思っている。そう思われるような行動をしたのはあの時ぐらいだ。

とするならばエルミタはもっと別な勘違いもしているのではないだろうか？

「ええ、本当よ……人を襲う妖魔に知り合いなんて居ないわ」

「……そうか、私は知っているのだぞ」

「あら、何をかしら？」

「……まあいい、距離が遠いなら近づいて調べろ、一ヶ月以内に見つかる、見つけ次第今回のメンバーで討伐する」

エルミタはそう命じると私に背を向ける。

その背中に問い掛ける。

「妖魔に3人も戦士を使うの？」

「……4人だ、偶然接触した戦士もメンバーに入れる」

「そう」

エルミタはそのまま闇に紛れて去っていく。

どうやらエルミタはただの妖魔ではないと考えているようだ。

おそらく戦士から逃げ切った事、そして私と繋がりがあっている事からそう判断したのだろう。

組織に復讐しようとしている元戦士でも私が匿っているとでも思っているのだろう。

まさか本当に妖魔などとは思ってもいないのだろうか。

そう思うと少しおかしかった。

「さて、それはさておき任務ね……見つからない、って言うのは本当な  
んだけどね？」

彼だとしたら妖気を隠しているのだろう。

この数年間、積極的に探すことはしなかったが任務として広域の妖  
気探査は何度も行った。

にも関わらず一度も見つけていない。

遠距離からでは妖気を見つけれない程度には隠蔽が上手かった  
のだろう。

そして今回、彼を探そうと彼の妖気を探しているが見つからない。

「ふう、本当に上手くなったのね」

弟子の成長を感じ嬉しくなる。

「……でも、いつまでも見つからない、何て報告はできないわね？」

これは師匠としてプライドだろうか？

それにこれ程成長しているなら、という思いもある。

「妖気の探知も上手かったし、逃げ切れるんじゃないかしら……逃が  
す気はないけど」

確かに好ましい存在だとは思っていた。

だが、自身の命を捧げる程ではない。

任務として命じられたのなら遂行するのみだ。

「苦しまないようにはしてあげるわね？」

楽しみに晒す。

そして妖魔を見つけ出すために南の地へと向かうのだった。

## 決断

リブストスさんによる短剣の鑄造を見学した後、テッド・リズ兄妹にせがまれて遊ぶことになった。

鬼ごっこやかくれんぼをしているといつの間にも増えたのか近所の子供達も参加していた。

人数も増えたので缶蹴り　缶がないから木片だったが　なんぞを教えてみた。

実演を兼ねて最初に鬼をやったのだが、名前を知らない子が一杯居て散々振り回されてしまった。

熱くなった結果ちよつと本気を出したりしたのは俺だけの秘密だ。

この大人数で楽しめる新しい遊びに子供達は夢中になった。

ちなみにこれが後に大人の間でも大流行することになる缶蹴りの始まりだった。

「1ゲーム終わってもすぐにもう一回やる、と宣言して始めてしまうのだ。」

否応なしに付き合うことになるのだが流石に10回を超えた当たりで疲れてしまい休憩する事にする。

遊んでいた広場の隅にある木陰に腰を下ろして休憩する。

子供達が元気よく遊んでいる。

その光景はいつか見た元の世界と同じように見えた。

どんな世界であっても子供は変わらない。

自然とそう思えた。

久方ぶりにゆったりと何も考えない穏やかな時間が過ぎる。

もちろん不安や懸念事項は大量にある。

しかし、今この瞬間はその全てを置いておきたいと思ったのだ。

どれほど時間が経っただろうか？

ふと気付くと近くに人の気配があった。

殺気や悪意が感じられないとは言え一体いつから居るのかすら分からぬのは問題だった。

(流石に緩めすぎたか……)

反省し気を引き締め直す。

確認するためにゆったりと振り向く。

そこに居たのはセネルだった。

セネルもまた子供達を穏やかな視線で見守っていた。

顔には隠し切れない疲労が見える。

何か事が上手くいっていないのだろうか？

それでも子供達を見守るその表情はただ優しかった。

町の治安を守る兵士にとっても価値ある光景なのだろう。

何か用事があったのだと思う。

しかし俺達はただ静かに子供達を見守り続ける。

一人の男の子がセネルに気付いた。

「あー！セネルだー!!」

セネルを指さして嬉しそうに叫ぶ。

その声に他の子供達もその存在に気付く。

どうやらセネルと子供達は顔見知りのようだ。

それもかなり好かれていそうらしい。

子供達はキヤーキヤー騒ぎながらセネルに飛び掛っていた。

さすがのセネルも何人も子供達に飛びつかれてはふらついてしまふ。

しかしそれでも最後まで倒れずに受け止めきったのは鍛えているからだけではないだろう。

そのままセネルと俺を交えての缶蹴りがなし崩し的に始まってし

まっ。

初めての遊びにまごつくセネルをみんなで笑ったりした。

楽しい時間が過ぎる。

1ゲーム終え、セネルと俺は抜ける。

不平を漏らす子供達はセネルが説得してくれた。

どうも明日全員分の果物を持ってくる事で決着したようだ。

その表情は大分柔らかくなっており、少しは気分転換になったようだ。

楽しい時間は終わった。

ここからは大人の時間だ。

セネルに連れられて落ち着いて話ができる場所に移動する。

昨日の話の続きだろう。

俺はこの町の妖魔を見つけろ事を約束した。

その事は問題ない。

この町にいる妖魔は妖気を隠す気などない。

今も何処に居るのか大体分かっている。

すぐに動かなかつたのはつい先日妖魔の被害がばかりだからだ。

どうもこの妖魔はかなり規則的に行動しているらしくまだ余裕があるかと判断できた。

そして兵士を動かす準備ができていなかったのだ。

俺が個人で妖魔を打倒しても良かったのだが、それはセネルに断られた。

この町の問題を俺一人に背負わす訳にはいかない、とか言っていたが、どうも同族を討たせたくないとも思っているようだ。

正直見当違いの気遣いだが、そつやって気遣ってくれる事自体がありがたかった。

その事を踏まえて尋ねる。

「どうなっているっ？」

「まだ準備が整っていない。妖魔を倒せるだけの技量の者はなかなか

か、な。今回はその準備の一環だ」

セネルとの話をまとめると

現在イルデブラン大司教　セネルの義父　率いる主流派と表  
立って対立している。

そのため確証もないまま行動をして怪しまれるのはマズイ。  
だから怪しまれないように優秀な兵士をぶつける必要がある。  
それには計画を立てる必要がある。

で、計画には情報が必要だ、という事らしい。

という訳で今妖魔がいる場所へと向かう。

ある意味当然なのかも知れないが到着した場所はスラムだった。  
薄汚い如何にも適当に作ったと言わんばかりの掘っ立て小屋が立  
ち並び、生氣のない目をした人々が襤褸を纏って座り込んでいる。  
そこまでは普通のスラムと変わらない。

しかしこのラボナのスラムには他とは少しだけ違う雰囲気漂っ  
ている。

確かに生きる気力を喪ったような人もいる。

だが、それ以上に活気があるのだ。

末期的な暗さがなくとも言うのだろうか？  
ここに居る人々はまだ希望を喪っていない。  
ラボナのスラムでは人が生きていた。

「……………分かるか？」

スラムに入りしばらくしてからセネルが俺に尋ねる。

このスラムの状況の事だろう。  
そう判断し俺は頷いた。

「これがスラムの住人も守りたい理由だ」

何となく言いたい事は理解る。

普通のスラムに居る人間っていうのはもっと絶望している。

その目には生氣はなく、ただ息をしているだけで生きてはいない。そんな人間だらけなのだ。

絶望の果てにスラムまで落ちぶれる人間がほとんどなのだから当然と言えば当然なのだ。

そしてそう言う死んでいる人間を守る意味などあまりない。

感謝する事もなければ何かを生み出す事も基本的でない。

ただ消費するだけの人間なのだから。

それでも兵士はそう言った人間も守る。

何故ならそれが職務であるからだ。

そしてもし自分がそんな目に会ったらという同情と恐れだけが理由だ。

それに対し守り甲斐があるとでも言うのだろうか？

自分達の世界を守るために代わりに戦う。

そんな前向きなモチベーションで働けるのだ。

だからこそ職域を超えてもスラムの住人を助けようとしているのだらう。

だが、何故ここの住人はそうなのだらうか？

確かにラボナは聖都と呼ばれており弱者の救済にも積極的だ。

宗教と豊かさ、そして兵力、それも理由の一端だらう。

だがそれだけなのだらうか？

その答えはセネルが語ってくれた。

「シヴァさんのお陰なんだ」

シヴァとはこの<sup>スラム</sup>のまとめ役みたいな事をやっている人だそうだ。

自分達の事は自分達で、をモットーに活動して、スラム内で生活を完結できるように環境を整えスラム外へ迷惑をできるだけ掛けないような仕組みづくりを行った人物らしい。

自警団の組織や支援や寄付の一元管理と公平な分配、職の斡旋、果



ては開墾地の確保とそこを開墾すれば永住できるように交渉するなど様々な実績を残したそうだ。

セネルもラボナに来た当初は色々と相談に乗ってもらったりしたりらしい。

だいぶ高齢のためまとめ役を後進に譲り顧問のような立場に回っている。

現在はスラムから出ることもなく、スラムの住人と一緒に細々と暮らしているそうだ。

今でもスラムの住人には神様のように好かれている偉大な人物だそうだ。

そう語るセネルの表情には隠し切れない親愛の情と確固たる信頼、それに僅かな不安が垣間見えた。

……そうごく微量ではあるが不安の色があった。  
話している間にも妖魔が居る場所へと歩を進めていく。

目的地に近づくとつれセネルの表情が強張っていく。  
そして、目的地

「……レイ、本当にここなのか？」

その声には信じたくないという思いとやはりという諦念が絡み合っていた。

「ああ、ここ……間違いない。ここは居る」

「……そうか、やはりそうなのか……ここはシヴァさんの家だ」

俺もある程度予想はしていた。

とは言え俺にとっては名前しか知らない他人だ。

その他人が何を成してきたのだらうとも今は妖魔でしかない。

……だが、セネルにとっては違うのだらう。

「なあ、セネル、お前は“やはり”って言ったよな？」

「……ああ」

「何か、あったのか？」

セネルはここに着く前から不安気だった。  
目的地

おそらくシヴァが妖魔と疑われるような何かを知っているのだ。

だからこそ俺にそうじゃないと否定して欲しかったのではないだろうか？

そして否定されず妖魔だと分かったからこそやはりと言ったのではないだろうか。

セネルは小さく頷くとまた話し始める。

「目撃者が、居たんだ。シヴァさんの家に入っていく怪しい影を見たそうさ。それと血痕が残っていた。目撃者が反スラム派の過激派だった。血痕はシヴァさんの家からは少し離れていた……分かってはいたんだ。でも、それでも信じたかった」

ただ淡々とセネルが語る。

初めての確かな証拠にラボナの住人側がシヴァの身柄を要求、それに対抗するスラムの住人、そんな対立が先日あったばかりだそうさ。幸いすぐに兵士が間に入ったことで矛を交える事はなかったそうだが、この事態がきっかけとなりこれまでの不満が爆発してしまったそうさ。

この事態に上層部はスラム毎妖魔を消す事で対処する事も検討しているらしい。

セネルはそれを避けるために形振り構わず行動していた。

そんな時だったのだ。

俺がこの町にやって来たのは、藁にも縋る気持ちだっただろう。

協力を要請し、この騒動の原因たる妖魔を取り除く事で町を元の状態に戻そうとしたのだ。

さて、事情は分かった。

問題はこれからどうするか、だ。

「セネル、これからどうする？」

「……単純にシヴァさんを殺す訳にはいかない」

シヴァの人望を考えればただ単にシヴァを妖魔だから、と言って斬ったとしたらスラム住人も市民達も黙っていないだろう。

最悪対立が火を噴いて泥沼の事態にもなりかねない。

「……じゃあ、放置するの？」

「……それもしない」

妖魔として殺さない、しかし放置もしない。

これではどうしようもないだろう。

「どっつたいんだ？」

俺はセネルのワガママを通してそんな問題はない。  
所詮他人の命だ。

この町の知り合いなんてケヒト一家とセネル一家ぐらいのモノだ。  
そしてこの妖魔はスラムからほとんど出ない。

出たとしてもスラム近辺まで、中心街に近い両家にはしばらくは危険性はないだろう。

だからこそ俺はセネルの意志を問う。

「妖魔は絶対に討伐する」

「そうか」

「……だが、シヴァさんを妖魔としては殺さない」

「何を？」

「スマン、レイ酷い事を頼む……妖魔になってくれ」

セネルの計画はこうだった。

まず妖魔を事前に倒しておく。

そして俺が妖魔として兵士に見つかる。

そのまま兵士を誘導しながらも引き離してシヴァの家に突入。

この時にセネルも合流。

追ってきた兵士が突入してくるまでに妖魔化した俺がシヴァの格好をした死体を如何にも今殺した風に見せかける。

後はシヴァが殺された事を兵士に印象づけて逃走。

適当に振り切ってセネルと合流、本物の妖魔の死体と入れ替わる。

妖魔は俺とセネルが二人で倒したと報告。

シヴァさんは妖魔に殺され何処かに消えたという事になる。

目の粗い計画だった。

ちよつとした事であつさりと露見するだろう。

それでも俺はその計画に乗ったのだった。

## 布石

side セネル

とりあえず大まかな計画はできた。

レイも計画に賛同してくれた。

……また彼に押し付ける形になってしまった。

だが、妖魔の正体がシヴァさんであってはならない。

俺はもつただの一兵士ではない。

いや、そうであってはならない、と言うべきだろう。

聖都ラボナを守る聖域守護兵団の部隊長セネルなのだ。

俺は俺の意志で、この町を守る。

そのためなら何でもしなくてはならない。

例えレイに汚れ仕事を押し付けることになっても、だ。

だが、いやだからこそ快く受け入れてくれたレイのためにも最善の結果を得なくてはいけないのだ。

そのためには計画の細部を詰めたり必要な物を揃えたりと色々準備する事がある。

さすがに思いつきをそのまま実行する気はない。

もつといい案が出るかも知れないし、そうでなくとも気付かなかつた穴が幾らでもある筈だ。

その穴を一つずつ確実に潰していかななくてはならない。

この計画に失敗は許されないのだから。

そのためにもまず最初にやらなければいけない事がある。

確認だ。

ほぼ確実、とは言えシヴァさんが本当に妖魔である確認をしていないのだ。

別にレイの事を疑っている訳ではない。

だが、直接確認した訳ではない。

もしかしたら偶然訪れた客が妖魔の可能性だってあるのだ。

ならば先ずそれを確認しなくてはならない。

意を決し、シヴァさんの家へと向かう。

こちらの苦衷を察してくれたのかレイはただ黙って付いてきてくれた。

シヴァさんの家を尋ねるといつもの世話人ではない男性が対応してくれた。

生憎とその男性には見覚えがなかったのだが、相手は自分の事を知っていたらしくちゃんと対応してくれる。

何事か中に伝えた後、直ぐに家の中へと通される。

そこで俺は思いも掛けない光景を目にすることになる。

シヴァさんの家の中には十数人も人間が居たのだ。

いつもはシヴァさんと世話人のご婦人、後はたまに相談にやってくる人が居る程度で多くても4、5人ぐらいなのだ。

頼られている人物で常に人の絶えない家ではあったが流石に十数人も訪れていた事はないと思う。

それに何やら家の中の雰囲気がおかしいのだ。

いつもなら和気あいあいと穏やかな空気が流れているのだが今日は何やら剣呑で重苦しい雰囲気だ。

俺の事を睨んでいる人もいる。

そして何より全員が黙り込んでいるのだ。

明らかにおかしかった。

だが

この状況なら……

想像もしていなかったがシヴァさんの家にこれだけ人が居るのだ。

もしかしたらこの中に妖魔が居るのかも知れない。

そう思いレイに尋ねようと視線を向ける。

が、ダメだった。

希望は断たれた。

俺の考えを察していたレイがここには居ないと首を振ったのだ。意気消沈しながら先導してくれている男性の後に続く。

部屋の中に居た集団はピリピリとした雰囲気と警戒感に満ちた視線を寄越していた。

後に分かることだがこの集団はシヴァさんのシンパとも呼ぶべき人間で、シヴァさんを守るために自主的に集まっているらしい。

笑えないのは警戒している対象が妖魔ではなく市民である点だろう。

そう、彼等は妖魔だと疑われたシヴァさんを市民から守るために集まっているのだ。

だからこそ兵団の幹部でもある俺を警戒するし、見たことない余所者のレイを睨んでいるのだろう。

とは言え、何事も起こる事なく奥の部屋へと繋がる扉まで案内される。

確か奥の部屋はシヴァさんの寝室になっていた筈だ。

そう思っていると案内役が重々しく告げる。

「……シヴァ様がお会いになるそうです」

「そうですか。では失礼します」

「……失礼します」

レイの事を睨んでいる案内人を横目にレイを伴って入室する。

奥の部屋は前に見た時と何も変わっていないかった。

こじんまりとした部屋に機能性重視の家具が幾つかあるだけの殺風景な部屋。

その奥にあるベッドに目的の人物が居た。

上半身を壁にもたれかける形で起こしている老人。

老いからだろうか？若干痩せたようにも思えるがその姿はこの町にやって来た時と同じように思えた。

本当にシヴァさんが妖魔なのだろうか？

そんな風に願望に縋りたくなくなる程全く変わっていなかった。だが、この部屋にはシヴァさん以外に人影はない。

未練を断ち切るために確認を取る。

レイが小さく頷いた。

やはり間違いはないらしい。

ここまで完璧に人に成りすます事ができるのか、と感嘆する。同時に妖魔がどれほど恐ろしい存在なのかを改めて実感する。チラリと友人の表情を窺う。

僅かに緊張を感じさせるがいつも通りだ。

レイは昔とほとんど変わっていない。

視線を自分の手に落とす。

そこには皺と傷が積み重なった無骨な拳がある。

対して彼はどうかだろうか？

そうカタントの時から変わっていない

そこからレイは妖魔なのだ、と感じる。

だが、同時にこれ程に頼もしい存在も居ないとも思う。

恐れと信頼、その天秤は傾きを保ったまま揺れ動いていた。

シヴァさんが妖魔だと確認を終えた俺達はしばらく歓談した後シヴァさんの家を去る。

流石に目的を達したからと言ってすぐさま立ち去れば怪しまれるし部屋の外にいるシヴァさんのシンパ　シヴァさん曰く自分にはもうそこまで価値がないのだから守る必要等ない、雰囲気が悪くなるからありがた迷惑、だそうだ　に問い詰められる心配もある。

だからこそ表向きの用件をでっち上げたのだ。

ちなみにその用件と言うのはレイがこの町に移り住んでくるからその時はよろしく、と言う挨拶だったりする。

実際どうなるかは分からないが、これなら当たり障りない上に聞かれても問題ない。



レイを連れている理由にもなるとなかなか良い理由付けだったと思う。

それに俺は本当にこの町に留まって欲しいと思っている。妖魔であるかどうか等関係ない。

ただ、一人の友人として良い人生を送ってほしいのだ。

レイは昔と変わっていないと言ったがそれはあくまで肉体的な事、表面的な見た目だけだ。

一体どんな経験をしてきたのかは知らない。

だが、レイが疲れきっているのは分かる。

レイに今必要なのは安息の地だ。

今回の件で汚れ仕事を押し付けるのだ。

その程度の対価は得てしかるべきだろう。

そう思う。

side レイ

シヴァが妖魔だと確定した。

家の中にあんなにぎっしりと人が居るとは思わなかったが結局シヴァが妖魔だった。

あの近距離まで近づけば間違いようがない。

唯一の懸念はこちらの正体がバレなかったかだろうか？

妖気はほぼ完璧に消していたとは言え何か感じるものがあつたかも知れない。

まあ、何か気になるとかその程度だとは思つが……

無数の目に睨みつけられ続けるという居心地の最悪な家から出る。

セネルはこれから計画実行のための準備をしに行くようだ。

あれほど人目があればそうそう動けないだろうからしばらく時間がある。

だとしても急ぐに越したことはないだろう。

直ぐにでも立ち去るかと思つたがセネルが何やら言い難い事が言

わなくてはいけない事があるように立ち尽くしている。

「何か言い忘れた事でもあるのか？」

だからこちらから尋ねてみる。

意を決したようにセネルが口を開く。

「妖魔はおそらく7日後に動くだろうな？」

「？ああ、これまでの動きから考えるとそれぐらいになるだろうな……それがどうした？」

またセネルが一瞬口を噤む、が直ぐにまた開く。

「……お前は、お前は大丈夫なのか？」

その問いに僅かに目を見開く。

セネルはこう言っているのだ。

「お前はその間人を喰わなくて平気なのか」と

「……大丈夫だ、我慢する事には慣れている」

「そう、か」

大丈夫だ、と伝えた時セネルは安堵したように息を吐き出す。

果たして大丈夫じゃないと伝えた時にどうするつもりだったのか

……

そんな思いが口を滑らせたのだろう。

「できれば血液か何かがあると楽だな」

その発言に驚いたのかセネルが間抜けな面を晒す。

直ぐに表情を取り繕い鋭い視線を俺に向ける。

「…………お前だったのか」

何やら怒りを感じる。

…………だが、これは？

「カタントの頃、血液が消えるという事件があった。あの犯人はお前だったのか…………」

何やらおかしな方向に飛び火したらしい。

俺は頬を引くつかせながら言う。

「あ、ああ、そんな事もしたような気がするな？」

「確かに特に実害はなかった……………だがな、団長がな怪しげな儀式でもやっている可能性があると言いついてな？三日間ほど不眠不休で見張らされた事があってな？あれは冬の寒い日だったなあ」

確かにその頃団長を中心に何人かが動いていたような気がするがそんな事をやっていたのか…………

…………意外と危うかったんだな。

まあ、何か人の気配が多い日は避けていたからかち合う訳がないのだが…………

汗をダラダラ流しながらセネルに訴える。

「そ、そうか、大変だったんだな！すまないと思う！でも、もう……………時効、だよな？」

「問答無用!!」

セネルのボディブローが肝臓に突き刺さる。

腰の入った良いパンチだった。

腹を抱えて悶絶する。

後遺症を残さないがしばらく動く事もできなくなるようなエゲツナイパンチだった。

しばらく後、ようやく回復した俺は足早に去っていくセネルを見送る。

あの後しばらく打ち合わせを行い計画を確認する。

だが、計画はほとんどセネルが俺に説明する形で進み、勝手に修正点を見つけていた。

どうもこう言った立案や策謀は向いていないらしい。

だからこの件に関してはセネルに任せっぱなしにしてしまう。

その事に少し罪悪感を感じる。

町のために働くセネルの姿に羨望を抱くと同時にこの人のよい友人の力になってやりたいと思う。

そのためにも自分に出来る事はやっておかなくてはならない。

そう決意し、計画についてあれこれと考えながら今日もケヒト一家へと向かうのだった。

## 戯曲

風のない暗い夜だった。

生温い風が身体に纏わり付く。

太陽は既に沈みきり、月もまた天に見えない。

静まり返った町、その中を弱い灯りがあちこちで動き回っている。

町を巡回している兵士だ。

今までの規則に従えば今日妖魔が現れる。

それを警戒して兵士の数はいつもよりずっと多かった。

眼下に見えるシヴァの家を探る。

どうやらまだ動いていないらしい。

あるいはこの警戒態勢を嫌って動かないかも知れない。

そうなると計画は順延という事になる。

できれば今日動いて欲しいものだ、そんな事を思う。

計画は幾つか変更を加えていたが大きな点では変更はなかった。

俺が妖魔を演じ、あくまでシヴァはただの被害者、妖魔の正体は不

明で死体だけが残される。

要はこれだけだ。

とは言えいくつかが変更があった。

大きな所だと協力者を増やした事だろう。

流石に二人だけでは計画の実行は無理と判断して仲間を増やしたのだ。

この場合の協力者というのは計画の全貌を知らせた上で計画の立案にも関わってもらったという事である。

要するに全幅の信頼をおける人物、かつ俺の正体を知らせても良いと思えた人物だ。

その協力者の名前を修道士カムリという。

どこかで聞いた事のあるような名前だが、おそらくその若いときの姿であろう。

何でもセネルの義父イルデブラン大司教の傘下にいる修道士でセネルと親しい温和な人物らしい。

スラムの問題や妖魔の出現に心を痛めており、被害者家族に対してできる限りの支援を行うなど人格者でもあるらしい。

その上強硬派のイルデブラン大司教の派閥でありながら差別意識の少ない頼れる人物だそうだ。

実際協力を持ちかけた時、カムリは快諾してくれた。

正体を明かすかどうかは最後まで悩みに悩んだ　　実際セネルは最後まで明かすことに反対していた　　が、この事件を終わらせれば最悪逃げ出せば追ってくる事まではしないだろうと思えば正体を明かすことにしたのだ。

明かしたのは計画実行の前日の事だった。

それまでは俺が妖魔である事だけを隠してそれ以外の情報は共有して話し合っていた。

その所為でどうしてシヴァが妖魔だと分かったのか、とか妖魔に化けるってどうするのか、など肝心な所を説明できず、ただただ大丈夫だからと無理矢理進める羽目になってしまった。

それが原因で何度か口論になったりしたが、逆にそれが良かったように感じる。

雨降って地固まる、その言葉を心底実感できた。

同時に話せないことがあるにも関わらず根底には信用があるカムリに俺も信頼を寄せていた。

実際正体を明かした時も拍子抜けするぐらいあっさり受け入れてくれた。

何せあなたはこの町の住人を襲っていないのでしょうか、とそれだけ確認するとセネルさんが信頼しているあなたを信頼しています、と

宣ったのだ。

その肝の太さと度量の広さに俺もセネルも驚嘆したものだ。

もし、妖魔と一緒に戦うなど受け入れられない、それも黙っている事も認められないとか言われたときのために事件が終わるまで監禁する用意すらしていた自分達が恥ずかしくなったものだ。

最終的な計画はこうだった。

まず妖魔が動くのを待つ。

これは俺が妖魔の動きを即座に察知できる事とシヴァ宅に人が大量に居るためだ。

こちらから出向いて気付かれずに妖魔を倒すのは困難という判断だった。

だったら妖魔の方に出てきてもらおうと言うのだ。

外側への警戒はかなり厳しいようだが内側からの脱出であれば容易い。

そう言う判断だった。

後はそう変わっていない。

俺が妖魔を倒し、シヴァ宅へ突入、シヴァに変装したカムリを抱えてシヴァのシンパ共にわざと見つかりシヴァが攫われたと印象付ける。

実はカムリを仲間に加えたのはこのためだった。

妖魔は死体になると人間の姿で殺されても妖魔の状態になつてしまふ。

だからシヴァの死体の身代わりが必要だったのだ。

そしてカムリとシヴァの背丈雰囲気似ているのだ。

当初はセネルでやるつもりだったのだが明らかに体格が違いすぎたために断念した。

鏡でセネルを抱えた姿を確認したがセネル筋肉質の大男どう考えてもシやせ細った小柄な老人ヴァに見えなかったのだ。

その後人形や教会にあるミイラなど色々考えてみたのだがどうし

ても生きた人を抱えている様に見せかけられなかったのだ。

ミイラに至っては持ち上げた途端腕が千切れてしまいセネルと二人でどうにか見掛けだけ修復し慌てて逃げ出すハメになった。

その点忠実に戒律を守り清貧を心がけている修道士カムリは痩せており体格も似ていてその役目に最適だったのだ。

もちろん老人と呼ぶには若すぎるカムリには老人のような化粧をして貰うことでさらに見掛けを似せることになる。

時計に視線を落とす。

夜の闇の中かなり見づらいが妖魔の視力なら何とか時計針を判別できる。

どうやらまだ予定時間にまでは僅かに時間があるようだ。

その事を確認し、緊張で強張っていた身体をほぐす。

背中に背負ったままだった大剣を鞘ごと外し撫でる。

それは剣というよりは鉄柱とでも言うべき代物だった。

太めの交通標識、あるいは細い電柱のようだと言われれば分かるだろうか？

決して幅広という訳ではないにも関わらず極端なまでに肉厚なのだ。

リブストスさんが打ってくれた大剣だった。

妖魔を確認した日から無理を行って打って貰ったのだ。

今日の夕方に完成したばかりのできたてホヤホヤの新品だ。

十分な慣らしすら行なっていない。

扱い方を間違えれば自分の身を危うくしかねない。

一般の剣から考えられない程重いのだ。

一度振れば身体が持っていられる。

良くこんな物を作ってくれたと思う。

何せ剣を注文する際の要望が要望だったのだ。

要望はたった一つひたすら頑丈に、銀眼の魔女の大剣と打ち合っても折れない程頑丈に、だった。



重さも切れ味も全ては二の次、そんな普通ではありえない要望だった。

そしてどうやらリブストスさんはその要望を正しく叶えてくれたようだ。

人間が振るにはあまりにも重過ぎる。

ただでさえ重い通常の大ツヴァイハンダー等剣の優に5倍は重だろう。

妖魔の筋力を持つても自由自在に振り回せるとは言えない程重い。

リブストスさんの説明によると折れない事を優先した結果通常の剣よりも若干柔らかいらしい。

そのため限界を超えた負荷が掛かっても折れるのではなく曲る、あるいは凹む事で衝撃を吸収してくれるそうだ。

その分切れ味は劣悪だそうだがこれだけ重ければ多少切れ味が悪かろうと重さで叩き切れるとの事だ。

充分だ

そう思う。

むしろ過分だと思う。

リブストスさんには大分無理をさせることになってしまった。

本来妖魔程度であればこんな剣は必要ないのだ。

だから今回は注文だけしといて代わりに剣を使うつもりだったのだ。

にも関わらずリブストスさんは剣が必要なのが今日だと知ると必要最低限の仕事以外は全て放り投げてほぼ不眠不休でこの大剣を打ってくれたのだ。

多少恩があったとしてもここまでやって貰える程ではない。

純然たるリブストスさんの好意だ。

その癖良い経験になったとあくまで自分のためにやったのだ、という姿勢を崩さないのだ。

俺にできる恩返しは確実にこの町から妖魔脅威を取り除く事だ。

だからこそ失敗は許されない。

最悪自分が妖魔として討たれる事も覚悟しておいた方がいいかも知れない。

もちろん犠牲になる気はない。

ただ、状況如何によってはそう言う判断をせざる負えないかも知れない。

俺がではなくセネルが、だ。

その時は精々姿を見せ付けながらラボナから逃げ出す事にしよう。

思考が段々と暗い方に流れていた。

何者かが暗い通りから灯りも付けずに近づいて来たのはそんな時だった。

全身を黒いコートで覆い隠した見るからに怪しげな人物だった。

その怪しげな人物は俺が居る屋根の真下の辺りで何やら周囲をコソコソと伺っている。

その様子を見ていた俺は屋根から飛び降りる。

突然現れた俺の姿に怪しげな人物はビクリと身を震わす。

「いんばんは時間通りですね、修道士カムリ」

怪しげな人物はカムリだった。

実はこの時間にここで待ち合わせをしていたのだ。

「レイ、さんですか？……驚かさないで下さい、死んでしまうかと思いましたがよ」

「それはすみませんでした、とても怪しい人が居たのでこれは脅かすしかないな、と思っていましたね？」

笑って適当に誤魔化す。

そんな俺の様子に呆れたのかカムリもやれやれと言わんばかりに首を振る。

が、口の端が僅かに緩んでいるのを妖魔の視力はしっかりと捉えていた。

「それで、準備の方は大丈夫ですか？」

「ええ、万端です。セネルさんの方も準備に付いたそうです。……後は実行あるのみ、ですね」

カムリの変装などの準備ができている事を確認しつつに計画は実行される。

ノコノコと妖魔が出て来る。

とりあえずはシヴァの家からは出てきてくれた。

実はシヴァの家で妖魔が暴れる事が最大の懸念だったのだ。

何せその場合対処のしようがない。

そのまま町の中心部の方向へ向かうようだ。

こちらに気づいている様子はない。

「カムリさん、妖魔が動き始めました……計画通りです」

「そうですか……」武運を「

カムリを残し静かに気付かれないように妖魔を追いかける。

そして事前に用意してあった巡回している兵士の居ない地点で一気に近づく。

こう言った空白地点が点在するようにセネルが兵士の配置に手を加えたのだ。

シヴァが黒だと分かっているからこそできる小細工だった。

妖魔の背後に忍び寄る。

妖魔はどうやら兵士を避けながら移動したいらしくどちらに行こうか、と周囲を見回していた。

チャンスだ

そう判断し静かにしかし大胆に近づいていく。

既に5歩の間合いに入っていた。

にも関わらず未だに妖魔は気付いていない。  
流石にこれ以上は気付かれずに近づくと事にはできないと判断する。

一步

まだ気付いていない

二歩

妖魔が俺に気付く、遅い

三歩

大剣を構えさらに加速する

四歩

ようやく妖魔が動き始める

五歩

大剣を薙ぐ

妖魔の上半身と下半身が別の物体になった。

大剣が薙ぎ払った腹部は消し飛んだ。

上半身が地に落ちた。

下半身も意思を失い倒れ伏す。

が、上半身にまだ動きがある。

生きているのだ。

次の行動に移るべく態勢を立て直そうとする。

しかし、勢い良く薙いだ大剣に身体が持っていかれている。

爪が伸びてくる。

咄嗟に大剣で弾く。

返す刀で頭を吹き飛ばす。

「……………ハァ、危うかった……………コイツの扱い方、ちゃんと考えないとな」

息を吐き出し、反省する。

何も考えずに振るとやはり隙だらけになる。

さつき自分で思ったはずなのにすっかり頭から抜けていた。  
気を付けなくては……

妖魔の死体を見つからないように隠す。

幸いな事に近くに空の樽があったのでそれを利用して貰う。

急いでカムリの所まで戻る。

俺が妖魔を追い始めた時からやっていたのだろうか？

カムリは静かに神に祈りを捧げていた。

俺が来たことに気付いたのかカムリが祈りを止める。

「……首尾の方はどうでしたか？」

穏やかに微笑みながらカムリが尋ねる。

「上々です、次に進みましょう」

「承知しました」

俺は妖力を開放し妖魔の姿へと戻る。

カムリが一步後退る。

やはり恐怖があるのだろう。

「怖いですか？」

「いえ、そんな事は……いや、そうですね、私はアナタが怖いのですが大丈夫、です」

その姿にまた驚く。

恐怖を正面から見つめ受け入れたのだ。

驚いている俺にカムリが催促する。

俺はそつとカムリを小脇に抱える。

「これから激しく動くことになりましたが大丈夫そうですね？」

「あなたが離さなければ大丈夫ではないでしょうか？」

「ハハッ、そうですね……では行きますよ」

カムリが頷いたのを確認し闇へと跳び出す。

屋根から屋根へと飛び移り目的地を目指す。

シヴァの家の裏手、先程妖魔が抜け出した窓に忍び寄る。

屋根から目的地を確認する。

近くをシヴァのシンパが見回っているようだ。

が、大した問題ではない。

隙だらけなのだ。

適当に隙をみて気絶させる。

そつと窓から中に侵入する。

入り込めばもうそこはシヴァの部屋だ。

準備しておいた血糊をバラ撒いておく。

ついでに灯りも消しておく、これでパツと見ではシヴァに変装した

カムリを見分けられないだろう。

改めて窓を音を破壊する。

そして大剣で適当に部屋を斬りつける。

同時に声帯を弄って悲鳴を上げる。

一応シヴァに似せたつもりだが、一回しか聞いたことのない人物の

声などそうそう真似できるものではない。

とは言え悲鳴だけなら簡単には判別できないだろう。

部屋の外が騒がしくなる。

「シヴァ様!!どうなされましたか!？」

シンパの一人が部屋に入ってくる。

見せ付けるように血に塗れた状態で振り向く。

「ウ、ウワァァァァ!!!」

絶叫が家中に響き渡る。

それを聞きつけたのか他のシンパ共もやって来る。

徐にシヴァのベッドからシヴァに変装したカムリを抱き上げる。

「ああっ！シヴァ様が!!」

「そんな!？」

「この野郎!!!」

勇敢なシンパが踊りかかってくる。

殺さないように優しく大剣の腹で弾き返す。

そしてできる限りおどろおどろしく聞こえるように告げる。

「シヴァハモ、ラッテイ、クゾ」

カムリを抱えて窓から外へと飛び出す。

近くから警笛も聞こえる。

どうやら兵士達もこの騒ぎに気付いたようだ。

再び屋根へと上がりそこから逃げる。

が、どうやら中々兵士達の練度が高いらしい。

いつの間にもやら屋根の上にも兵士が上がっている。

当然下にも兵士が集まり始めている。

ふむ、適当に蹴散らせればどつとでもなるが、あまり好ましくないな。  
傷付けずに逃げるのが最上なのだが……

羽、はダメだな。

あれは案外準備に時間が掛るのだ。

そうでなければこの前クレイモアから逃げ出す時もクレイモアが  
来る前にさっさと崖から飛んで逃げていた。

……ならば

煙突に向かつて腕を伸ばす。

そのまま少し離れた家の煙突を掴み、そして屋根からダイブする。同時に腕を縮める。

歪な弧を描きながら離れた家へと高速で移動する。

これを連続で利用することで兵士が居る所をジグザグと避けながら移動する事に成功する。

しばらく適当に動きまわって追ってきていた兵士達を撒く。

完全に撒いたと確信できた所で人の姿に戻る。

「ふう、やっぱりこっ人のちの方が落ち着くな」

「そうですね……いやはやあそこまで引っ張り回されるとは思いませんでしたな」

散々振り回した所為でグロッキーになっているカムリが愚痴る。

「ハハッ、すみませんでした、思いの外カムリさんが大丈夫そうだったので、つい」

「はあ……ですが、うまく行きましたな」

「そうですね、後は仕上げだけです」

その後、セネルと合流しカムリと一旦別れた。

そして先程妖魔の死体を隠した場所へとセネルと共に移動し樽を破壊する事で妖魔の死体を外へ出した。

適当に現場を繕った後、セネルが警笛で兵士を集めた。

そこからは簡単だった。

ただ単に俺とセネルで妖魔を倒したと告げるだけだ。

実際直ぐそこに妖魔の死体が転がっている。

この事実があれば細かい事はどうにかできる。

そして実際どうにかなった。

集まった兵士達はただただ妖魔の危機が去った事を喜ぶだけだった。



誰一人として何かを疑う素振りすら見せなかったのだ。  
俺とセネルを英雄扱いするのだけは辞めて欲しかったが、取り敢えず計画はさしたる問題もなく成功したのだった。

## 群像

妖魔の死体が発見されて数日

レイとセネルは「英雄」となっていた。

町を妖魔の手から救った新しい英雄、その真実を知っている二人にとってその称号は少々苦味が混じった物だった。

そしてようやく後処理も一段落した事から、今まで行われていなかった葬式が執り行われる事となったのだった。

その葬式は殺された内の一人が町の顔役だった事もあり葬式と言うよりも慰霊祭とも呼ぶべき大規模な物を予定されていた。

side セネル

「慰霊祭前日、夜セネル宅

その日の夜、よつやく兵団の幹部としての雑務を終えた俺はレイを晚餐に誘ったのだった。

カムリも誘ったのだが何やら用事があるらしい。

できればカムリも一緒にこの事件の真実を知る者全員で飲みたかったのだが仕方あるまい。

晚餐は久方ぶりの賑やかで楽しい時間だった。

カミラの思いも掛けないイタズラにあたふたするレイの姿を楽しむこともできたし良い時間だったと言えるだろう。

晚餐の後、俺達は書斎で静かにグラスを傾けていた。

父が遺したワイン、カタントから持って来た数少ない私物を楽しむにはちょうど良い日だった。

たまに一言二言話しながらワインを味わう。

静かで穏やかな時間が過ぎていく。

ワインも進み酔も回ってきた時の事だった。

「“英雄”か……ガラじゃないな」

不意にレイが呟く。

その内容に僅かに顔を顰める。

この事は予想はしていたとは言え自分にとっても不本意な事だからだ。

「不本意だろうが町を救ったのは事実だ……受け入れろ」

「ハッ、そんな不満そうな顔で受け入れろ、何て言われてもな？」

なあ、もう一人の“英雄”さん」

「ふんっ、お前はともかく俺は本当に何もしていないからな」

事実だった。

この事件において俺は何一つリスクを負っていない。

それなのに名声を得てしまっている。

それに比べれば真実は捻じ曲げたとは言え確かに町を救ったレイはその名にふさわしいだろう。

「そんな事もないだろ、実際計画とか準備とか後始末は全部お前任せだったしな」

「逆に言えばそれしかやってないって事だ、俺じゃなくてもできた仕事だ」

「……だが、決断したのはお前なのは確かだろ？」

レイがそんな事を言うので俺は鼻を鳴らし、視線を逸らす。

会話が途切れ沈黙が満ちる。

用意されたワインを喉に落とす僅かな音だけが残る。

酸化してしまったのだろうか？

ワインもさつきよりもくどく味が落ちたように感じる。

どれくらい時間が経ったのだろうか？

それ程は経っていない筈だがいつの間にかグラスには何も残っていないかった。

「……出て行くつもりなのか？」

そんな事訊く気などなかったのに気付けば俺はそう尋ねていた。

「ああ」

「この町で一緒にやっついていかないか？」

レイと、友とこれからも一緒に働きたい、俺は心からそう思っていた。

だがレイは何かから逃れるように何も残っていないグラスへと顔を向ける。

「昔のようにはいかないね」

「だが!?……いや……そう、だな、昔のようにはいかないか……」

一瞬激昂しかけるがすぐに思い直す。

俺はレイの答えを知っていた気がする。

だからこそ俺は問を口にしないように逃げていたのではないだろうか？

そう納得した時、何か胸にストンと落ちた気がした。

「……なあ、レイ覚えてるか？」

それからの数時間、俺達はあるだけの思い出を語り合ったのだった。

慰霊祭前日 同時刻 大聖堂内大司教執務室

私はセネルの誘いを断ってイルデブラン大司教の執務室に居た。執務室の中には私と大司教以外には誰も居ない。

大司教は幾つもの書類を読み、時に書付やサインをしていた。

大司教に呼び出されたのだが、来た時から変わらず書類を決済していた。

友との晩餐を楽しみたかったが呼び出されたのでは諦めるしかあるまい。

「今話題の英雄……名前はレイとか言ったか、彼の者には褒章を与えねばならないと思っておる」

ようやく一段落したのだろう。

鷲の羽の一番良い部分を使用した立派な羽ペンを置いて私に尋ねてくる。

その声は良く響くバリトンで威厳に満ちていながらどこか柔らかかった。

「その通りかと思えます」

大司教の言葉に端的に同意する。

「何せ目障りな害虫の駆除を無償で請け負ってくれたのだ、少し早かった気もするが充分に報いねばなるまい」

「……その通りかと」

まるで邪気を感じさせない優しい笑顔で同意を求められる。

先程と同じように同意の言葉を返したつもりだが上手くいったかどうか？

自分に対する僅かな疑念を打ち捨て次の言葉を待つ。

「……その褒章なのだが、金だけで良い物なのか悩んでおつてな」「とおっしゃいますと?」

「うむ、あれだけの腕なのだ、これからもこの町の役に立って貰う方が互いのためになるのではないかと思つてな」

イルデブラン大司教の言葉に一瞬詰まってしまう。

もちろん彼の友人としては喜ぶべき話だと思つ。

だが、同時にあの事件の真実を知っている人間として、これから町を担つていく人間として僅かな疑念が残る。

「それは……彼の者とは些か縁がありました<sup>が友人としては喜ばしい話ですな</sup>」

「ほう、町のためにならんと思つておるのか?」

「……いえ、彼の者の武は不確定要素と成り得る物かと愚考いたしました」

そして町の人間の命を背負う者 大司教 為政者 を支える一人、ある

いはその後継者の一人としては僅かな疑念でも大きな危機に繋がらうる可能性を無視できない、いや無視してはいけない。

危険を知っているのであれば友人の事でも 否、友人だからこそ疑わなくてはならない。

その覚悟の元、大司教に進言する、が反応は意外な物だった。

「ほうほう、お主にそこまで言わせるか、面白い、実に面白いのお」

「……大司教様?」

「うむ、決めたぞ、彼奴をどうするかは実際に会つてから決める事にする」

決断は下された。

意図が正確に伝わっていない可能性もある。

眼鏡に適わなければ良し、危険を知った上で受け入れるならなお良し、誤った時はその時諫言すれば良い。  
ならば全ては大司教が自らの目で判断した後のの方が良いと判断する。

「承知いたしました」

それでその話は終わりだった。

大司教は私に細々とした雑務を命じ、退出を促す。

それに従い部屋を出てただ祈る。

どうか彼の未来に幸あれ、と

最善の未来を望みながら雑務をこなすべく歩みを早めるのだった。

side リブストス

慰霊祭当日 昼 慰霊祭会場入り口

慰霊祭は教会が主催し誰でも参加できる形で行われていた。

慰霊祭と言っても形式張った物ではなく 正しくは形式張った物は午前中に行われた 各人が自由に故人を悼む物だった。

スラムの住人は元よりラボナの一般市民からも慕われていたシヴァさんの葬式だけあって町中の人が集まっていた。

斯く言う私も彼とは少なからず付き合いがあった。

スラムの治安を守る自警団の武器の依頼主と言っただけのビジネスライクな物だから大した物ではない。

それでもその僅かな時間で彼ができた人物である事は分かった。だからこそこうして葬式に尋ねる程度には彼の死は悲しかった。

殺されたのが主にスラムの住人だっただけにスラムの人間も多く居たが、流石に今日騒ぎを起こすようなバカは居ないらしい。

故人と関係がある者が各々それぞれに故人を弔っていた。

それにしても今回の事件では一部の市民はシヴァさんが妖魔だ、何て噂に踊らされていたようだ。

もちろん私も含めて大多数の市民はそんな事を信じたりはしなかった。

実際、シヴァさんは妖魔に殺されてしまった。

妖魔は別に居たのだ。

疑いが晴れ、懸念はなくなった。

だが、同時に思う。

もっと別の結末はなかったのか、と

そんな気持ちを抱えながらもシヴァさんに別れを告げる。

シヴァさんの事は悲しい事だが、いつまでも悲しんでもいられないしそうするべきでもない。

慰霊祭の会場から少し離れた場所で宴会も行われている。

この町が妖魔の危機から救われた祝い、そして死者への饞だ。

気持ちを切り替えるように宴会場へと足向けるのだった。

宴会場には入り口からでも分かる大きな人集りができていた。

幾つかの纏まりがあるらしい。

どうやら奇術師や大道芸サーカスの連中も呼んでいるらしく中々盛況のようだ。

だが、最大の集団は別にある。

今話題の“英雄”達だ。

その片割れ、レイさんに会いに行きたい所だが流石にこの人ではなかなか近づく事もできない。

自分が作った剣が彼の役に立ったかどうか聞きたかったのだ。

むしろあんな物をちゃんと扱いきれたのか、の方がよほど気になる所なのだ……

仕方なくしばらく時間を置いてから行く事にして今は料理でも頂くことにする。

「おや、「じねは……？」



ラボナの料理自慢達によって作られた御馳走を平らげていると見たことない食べ物に行き当たる。

どうやら鶏肉を小麦粉に包んで揚げたものらしい。

まだ作られて時間が経っていないのか熱いぐらいの肉汁が噛んだ瞬間に溢れだす。

香ばしい匂いと衣のカリツとした食感、そして溢れてくる肉の旨味。

初めて食べる旨さだった。

他の料理ももちろん美味しい。

だが、この料理だけ毛色が違うのだ。

この会場に用意された料理は贅沢ではないが工夫の凝らされた物だ。

それもそうだろう。

清貧を胸としている教会関係者もたくさん来るのだ贅沢品はマズイのだろう。

だが同時に腕をアピールするチャンスである事も確かだった。

だからこそ料理人達は贅沢ではないが工夫が凝らす。

要するにここの料理は贅沢ではないとは言っても基本的には高級料理なのだ。

その中にありながらこの料理だけはどこか庶民的だ。

「あら、リブストスさん、その料理がお気に召したのかしら？」

料理に夢中になっていた私に声を掛けてきたのは子供を連れた優しそうな美女だった。

何度か見たことがある。

確か……セネル隊長の奥さんだっただろうか？

名前は、思い出せない、いや聞いたことがない、筈だ。

「ええ、初めてこんな美味しい物を食べましたよ、えっと……セネルさ

んの奥さんが作ったのですか？」

「ふふっ、カミラですわ、リブストスさん」

「そうそう、カミラさんでしたね」

そう言えば家内がセネルさんとこのカミラさんが子供をどうたらとか言っていた気がする。

「これ、唐揚げ、と言うそうなのですが、誰が作ったか分かります？」

カミラさんがいたずらっぽく笑いながら尋ねてくる。

「どう聞いてくるといふ事はカミラさんではないのだろう。」

では、誰が？

おそらく驚くような人物の筈だが……

「ふむ、カミラさんではないのですね？……まさか、大司教猥下、とか」「ふふっ、外れです……何と正解は今をときめく英雄の一人レイさんなのでした」

そこで挙げられた名前は確かに意外な物だった。

だが、同時にどこか納得のいく驚きであった。

「なるほど、レイさんでしたか、確かに彼ならば……」

思い出すのは彼の造詣の深さだ。

単に知識の量が多い訳ではない いや、確かに知識も多いのだが

何やら彼は驚くべき知恵を持っているようなのだ。

そしてそれは分野を選ばないらしい。

あの今子供達が熱中している遊び カンケリとか言っていたが  
や製鉄に関する思いも掛けないアドバイス、そして今回の料理だ。

何れも思いっければ大した事ではない。

だが、発想の転換がなければ思いっくことができない事ばかりなのだ。

「あら、リブストスさんもレイさんのお知り合いなの？」

「ええ、少しばかり縁がありましたな」

その時、会場を白い光が迸る。

驚いて振り返ると一つのとても大きな集団から大きな拍手が巻き起こる。

どうやら騒ぎの中心は奇術師の二団らしい。

いつの間にか“英雄達”の集団と合流した奇術師がとっておきでも披露したのだろう。

何が起こったのかはよく分からないがその結果今の白い光が発生したのだろう。

「びっくりしましたわ、一体何かしら？」

「何やら奇術師がやったようですな」

「ええ、そつみたいですね……そつ言えば、もしかしたら奇術師ではないかも知れませんよ？」

「と……」

そしてカミラは語りだす。

前日にあつたちょっとした騒ぎを

side カミラ

慰霊祭前日 夕刻 セネル宅

「唐揚げを作って欲しいって？」

「ええ、明日の慰霊祭に出して欲しいの」

私はそう願する。

レイさんにとっては思いも掛けないお願いだったようで鳩が豆鉄砲を食ったような表情をしていて可愛らしい。

これが今町で話題の“英雄”だととても思えない。

「まあ、別に良いけど……？」

「あら、ありがとっ、こんな事今話題の英雄さんをお願いするのはどうかと思ったのだけどね？」

「確かにカタントの祭りで一度作った事あったけど……よく覚えていたな」

「ああ、知らないわよね」

一度言葉を切り、イタズラっぽい笑顔で伝える。

「その後唐揚げがカタントで流行ったのよ」

これまた意外な事実だったのか困惑している様子のレイさん。

祭りの中で好評だったのは覚えているが軽く作った男の料理がそこまで好評だとは思ってもみなかったのだそつだ。

「実は」

それから当時の町の事を伝える。

盗賊の襲撃の際に鶏を盗もつとした盗賊が居た事。

鶏を殺されてしまった事。

持ちきれずに大量の鶏が残されていた事。

その大量の鶏をどうにか腐る前に処理しなくてはいけなくなった事。

その一環として唐揚げを作った事。

そつ言った事を伝える。

町の事を話すとレイさんは嬉しそうなよつな悲しそうなよつな不思議な雰囲気を書き交しながらもうんうんと話を聞いてくれた。

「そうなのか……いや、でも流行ったなら俺じゃなくても作れたんだろ？」

「うーん、あなたの作ってくれた物程美味しくできないのよ」

「？特別な調理なんてしてないし一緒に作ったおばさん達なら同じように作れると思うんだがな」

単に衣を作つてまぶして揚げただけ、唐揚げを作るなんてそんなに難しい事ではない。

確かにコツはあるが、所詮素人の料理だ。

むしろ料理を毎日行っている分慣れているおばさん達の方がよっぽど上手くできそうな物だ。

そうレイさんは不思議そうに主張する。

その姿に私は残酷な事を告げなくてはいけない事を知る。

だからことさら淡々とただ事実だけを告げる事にする。

「……死んだわ」

「えっ？」

「盗賊達に全員殺されたの」

「そう、か……」

衝撃だったのだろう。

レイさんは傍から見ても驚くほどショックを受けている。

もしかして死んだ人の中に誰か親しい人でも居たのだろうか？

そんな話は聞いたことがないが、他人が死んだ事を知った反応ではないように思える。

人なんていつ死んでもおかしくないし、誰だって死ぬ覚悟、そこまでは行かなくても死ぬかもしれない危惧ぐらいは持っている物だ。

だったら他人が死んだ程度でこんなに動揺してられる訳がない。

ならばきつと誰か親しい人が居たに違いない。

そして、その人の死を私が不意打ちで知らせてしまったのだ。

その姿に放っておけなくなった私は彼を連れ出すことにする。

確か、家の裏の広場で大道芸の一団が練習をやっていた筈だ。

どうせレイさんは明日まともに見ることができないだろうし、頼み込めば見せてくれるかも知れない。

そう思い、レイさんの手を引つ張つて外へと連れ出すのだった。

見学の許可は簡単に降りた。

何せ今話題の英雄なのだ。

むしろ問題は芸人達がレイさんと話をしようと思つてくる事の方だった。

たまに寄ってくる芸人に対処しながら大道芸の練習を見ている。

ジャグリングや手品、それに歌、様々な芸を練習している。

それを見ている内に少しは元気が出てきたのか興味深そうにレイさんも練習を見ている。

そうやって芸に見とれていると気付けばレイさんが居ない。

どこに行ったのかと見回すと何やら端っこの方で怪しげな格好をした男と話し込んでいるらしい。

「全く、何を話しているのかしら？」

そうぼやいてみるが口元は緩んでいる。

何せレイさんはとても楽しそうに何かを話しているのだ。

どうやら完全に元気になったようだ。

連れて来てよかった、そう思う。

「レディーを放って何をしているのかしら？」

近づいてみると怪しげな男と二人でこれまた怪しげな粉末の入った袋を幾つも並べていた。

「ああ、カミラさん、ちょっと気になる物を見つけたんです」

「……気になる物？」

「ええ、気になる物、です」

「それは一体何かしら？その粉末の事？」

「ふふ、秘密です。明日を楽しみにして下さい、きっと驚きますよ」

どつやら教えてくれないらしいが、明日分かると言うのならその言葉に従い何が起きるのか楽しみにする事にする。

きつと度肝を抜かれるに違いない。

その後しばらくサーカスを楽しんだ後、家に戻り晚餐を取る。

その中でちょっとした意趣返しを行ったがきつと許してくれるだろつ。

side リブストス

慰霊祭当日 夕刻 宴会場

「と云う事があったのですよ」

カミラさんの話が終わる。

気になる点が幾つもあったがそこは敢えてぼかしていたように感じる。

それを尋ねるのはまた今度の機会にして今は関係ある所だけ尋ねることにする。

「今の光にレイさんが関わった、という事ですか……」

「そうなんじゃないかしら？昨日レイさんと話していた怪しげな方が輪の中心にいらっしゃいますし」

どつやら私の知人は想像以上に色々できるようだ。

その事に驚く事も考える事もどつやら無意味らしい。  
取り敢えずそんな結論を出して今はこの宴会を楽しむことにする  
のだった。



## 露頭

全ての初まりはラボナにて探していた妖魔を発見した事だった。

南部ミュシャへと赴いた物の僅かな痕跡以外にはほとんど何の収穫も得ることができなかった。

数少ない収穫と言えるのは残された妖気からレイである事が確定した事、そしておそらく中央の方面に向かったであろう事だけだった。

要するに私は任務に失敗しかけていたという事だ。

事実をそのまま報告したら何らかの処罰が下される可能性もある。

ただでさえ疑われているのだ、本当の事を言っても信じてくれる筈などないだろう。

まあ、処罰と言っても普段より厳しい任務に当てる程度だろうから、ある意味今と何も変わりはないのだが……

その事実を思い出し自嘲的な笑みを浮かべる。

とは言え無駄にリスクを負う必要など微塵もない。

どうしても見つからない時は以前から目を付けていた妖魔を適当に代わりとして差し出すつもりだ。

盗賊に紛れ込んでいる妖魔がまれに居るのだがその内一体が偶然近くに居たので目を付けておいたのだ。

多少怪しまれるだろうが何もしないよりはよっぽど良いだろう。

もしバレても条件には取り敢えず合っているのだ、嫌味を言われて再搜索する事になるだけだろう。

発見したのは命令を受けてから一ヶ月、期限ギリギリの事だった。

その時主に考えていたのはどう報告すれば盗賊に紛れている普通の妖魔をそれらしく見せる事ができるか、だった。

捜査も一応は続けていたが、何かの拍子に妖気を開放でもしない限り見つけることはできないだろうと半ば諦めていたからだ。

そして発見できないまま仕方なくエルミタ黒服と合流するために拠点としていた港町に戻ろうとしていた時の事だった。

不意に中央部、一般にはトゥルーズと呼ばれる地方でレイらしき妖力を感知したのだ。

南部、ミュシヤに居たためかなり距離はあったが、搜索の限界ギリギリまで探知網を広げていたのが幸いしていた。

報告のために南部の中でも北の方に移動していた事も大きいだろう。

とにかく私はレイを発見してしまったのだ。

場所はおそらくラボナ、妖力を解放していた時間は短かったが、その間に近くに存在していた普通の妖魔の気配が消えた。

おそらくレイが妖魔を倒したのだと判断する。

妖魔が妖魔を打倒する、そんな変わった事するのはレイぐらいのものだろう。

「ふふふ、見つけたわ……」

ようやく発見した獲物に舌なめずりして合流を急ぐ。

時間が経てばまたどこに居るのか分からなくなってしまうからだ。

そして拠点となる港町に戻った私はいつも通り怪しいエルミタ黒服に事と次第を報告する。

この前言っていたように討伐隊を編成して討伐に赴くことになると思っていたがエルミタ黒服に報告した所思いも掛けない事が判明する。

何と既にラボナから依頼を受けており妖魔の討伐に戦士を一人派遣していると言うのだ。

おそらくレイに倒された妖魔を斬殺するために雇われた戦士なのだろう。

確かにそう判って妖気を探してみると戦士の一人がラボナに向かっているらしい事が分かる。

このペースで移動しているのであれば一週間もあればラボナに着くだろう。

それにこの妖気、もしかしてこの戦士は……

「マズイわね……」

「何がだ、ジェシカ？」

私の予想通りだとすれば色々マズイのだが、その全てを説明するのは愚か者のする事だろう。

情報というアドバンテージをみすみす相手に渡すことはない。

今、私がすべき事は事実の一部を隠しながら上手く危機感を持って貰うことだ。

そのためには組織にとってどんな状況が不利益を生むのかを常に把握しておく必要がある。

この場合は単にレイの脅威をちょっと煽るだけで充分だろう。

「あの妖魔、とっても隠れるのが上手いのよ」

「それがどうした」

いくら伝えていない事があるとは言え、さっきの報告の中で妖気を隠蔽している状況だと見つける事が困難な事は伝えてある。

であればこの程度でも理解してくれるかと思ったのだが……

よつするにこの男はその事実を正しく認識していないのだろう。

探知に特化した私でも近くに居るか妖気を解放していないと見つけられない、いわゆる普通の戦士はという事実を、だ。

理解の悪い上司にため息を付きたくなるがそこは堪えて丁寧に教えてあげる事にする。

「良い？あの妖魔に本気で隠れられたらかなり近づかないと私でも気付けないわ」

「ああ、でっ」

本当に頭の血の巡りが悪いらしい。

舌打ちしたくなるのを我慢しながらさらに言葉を重ねる。

「……そんな妖魔が私達組織の戦士の接近に気付いたらそつと気付かれないように逃げるに決まっているわ、そしたらまた妖気を出すまで中々見つけられないことになるわね？」

そこまで言ってようやく理解したのか怪しげなフードの中で何やらエルミタがブツブツ呟きながら悩み始める。

エルミタに伝えたのはごく単純な事実なのだ。

レイを見つけるには私、あるいは探知が得意な上位勢がそのつもりで近づく必要がある。

にも関わらず今回はごく普通の戦士が隠れる気もなく近づいているのだ。

この前戦士から逃れえた事を考えると今回も逃げられる公算が高いと言えるだろう。

「ふむ、仕方あるまい……いや、ちよつど良いのか？……ジェシカ!!」

「何かしら？」

「今直ぐこの場を出発しキュビザ及びセロクエルの村でセラとエルザに合流した後ラボナに向かう」

「到着する頃にはきつと全部終わっているわよ？」

そう最大の問題点はここから急いでも15日かそこから掛る事なのだ。

彼女はおよそ7日後にはラボナに到着するといつのだ。

即ちどれだけ急いでも間に合わない。

「それくらい分かっている」

「あら、気付いていたのね？」

つい言葉が漏れてしまった。

エルミタがギロツと睨んでくる。

が、まあ、気にする程の事ではない。

適当に肩をすくめる。

それよりも一体どうするつもりなのかが問題だろう。

「……………ふんっ、船を使う」

「船、ですって？」

「そうだ、組織の連絡船があるのだ。それを使えばラボナまで徒歩の半分程で移動できるだろう」

「へえ、それは凄いわね？」

黒服はえらく神出鬼没だとは思っていたがそんな移動法を隠し持っていたとは気付かなかった。

おそらく組織の重要な秘密なのだろう。

それを私に伝えるとは…………

それだけレイが目障りなのか、それとも殊更に秘密にするべき事でもないという事だろうか？

悩んでも仕方ないだろう。既に知ってしまったのだ。

今はただラボナに向かうことだけを考える事にしよう。

「……………この前は後一人いつか言ってたけどその娘はどうするかしら？」

「既にラボナに向かっている、現地か到着前に追いついて合流しろ」

「あらあら、今ラボナに向かっている娘が最後の一人なのね」

既に二人は出会っている。

これが一体何を意味しているのか…………

そして、もし追いつけずにあの戦士が、彼女がラボナに先に到着した場合どうなるのか、あの二人が出会うのかどうか

「間に合えば良いのだけど、ギリギリ、ね」

小ねく呟へ。

何が起るにしても急ぐに越したことはない。

## 再会

日はとうに沈みきり、雲の隙間から僅かに垣間見える満月が空高くにある。

慰霊祭も終わり、騒ぎ疲れた大部分の人は自らの家に帰っていた。それでも騒ぎ足りない一部の人間のみが残る宴会場を傍目に俺は旅立ちの用意を済ませていた。

この町に来た時には持っていなかった大剣<sup>鉄柱</sup>を背負い、ポロポロになつていた幾つかの装備を更新する事もできた。

餓別だと言つて貰ったものもたくさんある。

やった事より貰った物の方が遥かに大きい。

だから何時か落ち着く日が来たならば今度はその恩を返すために再び来よう、そう心に誓う。

遠くから酔っぱらい達の陽気な笑い声が聞こえる。

「……そう言えばカタントの時もこんな感じだったな」

ふと昔の事を思い出す。

初めて妖魔と出会い、殺した時の事だ。

その時は町を出ようとした時にジェシカに邪魔　　助けて貰った  
と言った方が正しいかも知れないが　　されたのだ。

「まあ、あんな事がそう何度も起きる訳ないな」

実際、放浪していた中で妖魔を打倒した事もある。

特に妖気を隠したりしていない時の事だったがそれでも当然何も起きなかった。

あの時と比べれば妖気の隠蔽だって遥かに上達している。  
何も起きる訳がない。

そんな事を思いながら門へ向かって歩き出す。

既に別れを告げてある。  
寂しくなるがカタントの時と違い一生の別れではない。  
会いたくなればまた訪れればいい。  
門へと歩みを進める。

一歩一歩踏みしめるように歩いていると黒い影が二つ近づいてくる。

セネルとカムリだ。

見送りに来てくれたのだ。

「行ってしまっのか？」

「ああ」

「お元気で、我が神の名において……いえ、やめておくべきでしょう。  
ただ旅の無事を祈る事にします」

カムリは俺に祝福をしようとして途中で辞め、個人として旅の無事を願ってくれる。

「ありがとう」

言葉少なにだが万感の思いを込めてそれだけを伝える。

そして再び旅立ちへと歩き出す。

セネルとカムリも付いてくる。会話はない、ただ共に歩く。

別れは既に確定している。

その事を全員が理解していた。

だからこそ共にある最後の時を噛み締めていた。

ほんの少し歩けば門が見えるくらいまで来た時だった。

門の方から何か騒ぎが聞こえる。

「……すまん、じつはら仕事らしい、旅立ちの時に騒がせて悪い」



しかめっ面になったセネルがため息を一つ付いた後そう言い、騒ぎの現場へと向かう。

「いや、湿っぽいよりよっぽどいいわ」

「これもこちらの方がお似合いだという神の思し召しでしょうか？」

この後に何が待ち受けているのか等全く知らずに俺とカムリもセネルに続く。

せつかくだから手伝ってやろう、その程度の軽い気持ちだった。

門に到着した時、俺が目にしたのは人混みだった。

家に戻るうとしていた人々が野次馬となり集まっているらしい。

何があるのか門の辺りをぐるりと野次馬が取り囲んでいるのだ。

その先では何か言い争いが聞こえてくるが野次馬のざわめきにかき消されてよく聞き取れない。

野次馬からも「何故?」とか「そんな……」とか「誰が……」と言った断片しか聞き取れない。

分かるのは野次馬が動揺している事、そしてそこに恐怖と困惑がある事だ。

何があるのか確認するために人混みを掻き分け奥へと進もうと試みる。

突然の事だった。

不意に人混みが開ける。

前に居た野次馬が何かを避けるように左右に分裂したのだ。

「……………あっ」

そこに居たのは美しい銀髪と銀眼を持った少女だった。

女性と呼ぶにはまだ若く、女の子と言つには幼さを喪っている。

目の前に居たのはクレイモアだった。  
それもこのクレイモアを見たことがある。  
盗賊を支援していた組織を襲撃した時に出会ったクレイモアだ。  
妖気を抑えているらしく、今まで気付くことができなかった。  
どうやらいつの間にか気が緩んでいたらしい。  
普段通りであればいくら妖気を隠している状態でもここまで接近  
してしまう事はなかった。  
とは言え妖気を隠蔽する技術であればこちらにも負けてはいない。  
精々妖魔の匂いが濃い怪しい奴程度で済ませられる筈だ。

何か不思議な光を湛えた銀の瞳と目が会う。

どこかで見た事がある？

目と目が会った瞬間そう思う。

何故か胸の奥から込み上げてくる物がある。

これは……懐か、しいのか？

「……レイ、お兄ちゃん」

クレイモアが俺の顔を見た途端思わずといった風に茫然と何か呟く。

うまく聞き取れなかった。

否、信じられなかった。

顔をまじまじと見つめ合う。

確かに面影が、ある。

「アリス、なのか……？」

「……レイお兄ちゃん、なのか？」

アリスが生きていた。

その事実をようやく受け入れる。

とは言えまだ受け入れただけで消化することはできていない。

アリスが生きていた事に対する歡喜

何故クレイモアにという困惑

あの時助けることのできなかつた罪悪感

どうして生きているのかという疑問

様々な感情が心の中を渦巻く。

だが、最も強いのは生きていてくれたと言つ感謝だつた。

「アリス、なのか……生きていて、くれたのか……」

アリスは黙つてこちらを見ていた。

その瞳には何と言つたら良いのか分からない色が浮かんでいた。

だが、それを振り払うように首を振るとその背に背負つた大剣を抜く。

野次馬達が悲鳴をあげる。

「……えっ？」

その事を事実として認識しても何を意味しているのか理解できない。

……理解したくなかつた、という方が正しいかも知れない。

「依頼により妖魔討伐に来た、これより任務を遂行する」

アリスは静かに宣言する。

ようやく頭が現実<sup>鉄柱</sup>に追いつく。

咄嗟に大剣<sup>鉄柱</sup>を掴む。

それよりも早かつたのか遅かつたのかアリスが地を蹴る。

一瞬で目前まで踏み込んでくる。

辛うじてアリスの大剣<sup>クレイモア</sup>を受ける。

鉄同士がぶつかり合う甲高い音が響き渡る。

受ける事はできたが態勢が全く整っていなかったために無様に吹き飛ばされてしまう。

次の行動に繋がられない尻餅をついた態勢になってしまう。

アリスが大剣クレイモアを振り上げているのが見える。

ああ、ここで死ぬのか

何故か素直にそう受け入れられた。

アリスに殺されるなら悪くない、そう思ったのかも知れない。

「待て!!この町での妖魔は既に俺とレイによって討伐されている!!」

セネルが俺とアリスの間に割って入り叫ぶ。

「うるさい!!邪魔だ、どけ!?私は、私は妖魔を斬殺しに来たんだ!!」

「……………」  
「コイツは変わってなんかいない!!……………」  
「アリスちゃん、なんだから?だったら昔みたいに……………」

俺は立ち上がりセネルを制す。

「俺達の問題だ……………」  
「セネルは、町の人を遠ざけといてくれ、きっと危ない」

「だが!？」

「頼む」

「クツ……………」  
「必ず生きて帰って来いよ!？」

セネルは俺を信じてくれたのだろう。

一度アリスと俺を見た後突然の戦闘に混乱している野次馬の避難を開始する。

アリスは、待っていてくれたらしい。

隙だらけだった筈なのに一步も動いていない。

「……私にはどうしたら良いのか分からない」

「俺にだって分からないさ」

「なら、なら！私は!!任務を全うする!!」

そう叫びアリスが突っ込んでくる。

大剣で受ける。

今度は吹き飛ばされずに受けきる事ができる。

さらに袈裟懸け、左薙、右切り上げ、唐竹と次々と斬りかかって来る。

それらを何も言わずにただ受け続ける。

反撃もせずにひたすら受け続けるだけのレイに苛立ったのか段々と剣が感情的になっていく。

大きく振りかぶられた大剣は重くはあるが、避けることはたやすい。

だがそれでもひたすら受け続ける。

「何で？」

アリスが叫ぶ。

何を意味しているのか判別できない叫び。

アリスはさらに激しく大剣をぶつけてくる。

そこには既に技工など何もなかった。

「何で助けってくれなかった!」

「何で居なかった!」

「何で……」

「何で、助けってくれなかったの……?」

魂からの叫び。

俺はようやく理解した。

あの時盗賊のボスの言うこと鵜呑みにしてアリスの生死を確認しなかった。

復讐と自分の都合だけで本当の意味でアリスを省みることにはなかった。

その事を理解したのだ。

ならば俺にはどうする事もできない。

俺は確かに助けられなかったのだ。

だから俺にできる事など……

「……すまない」

ただ謝る事しかできない。

「何で？」

「何で、変わってないのよ、私は一体何を恨めばいいの……？」

アリスは大剣を力無く下ろす。

「レイお兄ちゃん……」

まるで寄る辺をなくした子供のようなアリス。

「すまない、俺は何もしてやる事ができなかった……！」

大剣を取り落とす泣き崩れるアリス

「アリス……」

俺に一体何ができるだろうか？

否、アリスのために一体何をすべきなのだろうか？

分からない、それでも俺はアリスへと近づく。

「久しぶりね、レイ？」

突然、横合いから声を掛けられる。

その声は懐かしいモノだった。

僅かな時間ではあるとは言え共に旅をした。

様々な事を教えて貰った。

返しきれない恩があった。

「…………ジェシカ」

いつから居たのだろうか？そこには二人のクレイモアを引き連れたジェシカが微笑を湛え立っていた。

“今日”と言う日はまだまだ終わらない。

事態はさらに混迷を深めてゆくのだった。

## 再会

雲に隠れていた満月がそつと顔を出す。

その月明かりに中現れたのは懐かしい人だった。

僅かな時間ではあるとは言え共に旅をした。

様々な事を教えて貰った。

返しきれない恩があった。

「……ジェシカ」

その人物の名を呟く。

「知り合いなんですか？ ジェシカさん」

俺の声にジェシカと共に現れた二人の内の一人短髪で勝気そうな方だった。

ジェシカにしか意識が入っていなかったが見知らぬクレイモアが二人もジェシカの後ろに立っている。

即ち妖魔<sup>俺</sup>1人に対してクレイモア4人も居るのだ。

一人だけでも死にかなないのにそれが4人、何とか絶望的な気分だ。

ただでさえアリスの事で混乱しているのに追い打ちなんて掛けないで欲しい。

名前を知らないクレイモア達は適当に短髪と根暗とでも呼ぶことにしよう。

もう一人の方が小さくてやたらと暗い雰囲気を漂わせているからだ。

多分長いのにまともに手入れしてなさそうな髪が顔を隠している事が印象を暗くしているのだろう。



あんまり関わりたくない類の人間だ……  
まあ、クレイモアの段階で関わりたくなどないのだが。

それにしてもクレイモア4人って覚醒者狩りですか？  
俺は覚醒者の足元にも及ばない雑魚の妖魔なんですけど……  
そんな事を考えている内にクレイモア達の会話が進んでいる。

「ん？ああ、色々あったんだ」

ジェシカがいつも通り気軽そうにそう短髪の方に答えると

「そんな……妖魔となんて……信じられない……有罪？」

と何やら根暗がぶつぶつと呟いている。

やっぱり関わりたくない。

「ふふ、まあ、そう言うな、アリス大丈夫か？……勝手に先走って心配したのよ？」

根暗を適当にあやししながらジェシカがアリスへと歩み寄る。

当然アリスの近くに居る俺にも近づく事になるので、ジェシカの歩みに合わせてジリジリと距離を取る。

正直格上相手に距離を詰められてしまえば勝機などない。

まあ、元から勝機はないのだが、逃げることもままならなくなるのは困るのだ。

アリスを放っておくのは心苦しいがきつとジェシカが何とかしてくれると信じることにしておく。

「……はい、大丈夫です。ジェシカさん、すみませんでした」

「本当よ、強行軍で疲れて眠っている私達を置いて先行するなんて……もうしちゃダメよ？」

そう言いながらジェシカはアリスの頭を優しく撫でる。  
その様に根暗がぶつぶつと聞き取りづらい声で訴える。

「……妖魔に負けて……泣いてる人なんか放っておく……妖魔先に殺すべき」

「まあ、そんなに逸らないの、ちゃんと戦うんだから少しぐらい待ってなさいね？」

「ジェシカさん……？……この人も……やっぱり……」

「ジェシカさんがそう言うのなら、私は、いいですよ」

どうも根暗の方はかなり妖魔に対して恨みを持っているらしい。  
たまに根暗からドロっとした嫌な感じの怨念のような殺意を感じる。

それに対して短髪の方は事情を察してくれているのかしばらくジェシカに任せとこうという感じだ。

そのためか短髪はさっきから根暗が俺に襲いかからないように制してくれているらしい。

……正直ありがたい。

「改めて、久しぶりねレイ」

「ああ、久しぶりだ、ジェシカ、変わってないな」

アリスがある程度落ち着いたと判断したのだろう　あるいはこれ以上俺が離れたら逃げられると思ったか？　ジェシカが俺に話しかけてくる。

どうやらいきなり戦つつもりはないようだ。

「ふふ、そっちもね？」

「こんな懐かしい人が集まってるんだ。同窓会の噂でも聞いて来たのか？」

「あら？それは惹かれるわね？……あなたを殺しに来たのよ」

ジェシカがごく軽い調子で殺害予告してくる。  
言葉と同時に自然に大剣を向けられる。

「そうか」

「ふうくん、もっと動揺するかと思ったけどそうでもないのね？」

正直に言えば心臓が飛び出すほど恐ろしい。

だが、殺しに来る事は予想していた、覚悟していた。

ならば想定した通りに全力を尽くして逃げ延びるだけだ……想定したよりも遥かに最悪なのは気にしても仕方がないので気にしない。

「はっ、怖いに決まってるだろうが、格上が4人だぞ？……まあ死ぬ気はさらさらないが」

「ふふ、やっぱり良いわね、ここで殺さなくちゃいけないのが残念よ」

ジェシカが楽しそうに笑う。

俺もきつと引き攣っているが楽しそうに笑っているだろう。

何せ生死を掛けたゲームだ。

賭けベットする額が大きければ大きいほどギャンブルは楽しいものだ。

「なら、見逃してくれよ」

「私としては見逃してあげても良いんだけどね？」

「何を言ってるんですか、ジェシカさん!!」

短髪が口を挟む。

それまでは黙って見ていたがこのジェシカの発言は見逃せない物だったらしい。

ジェシカはこの反応も予想していたのか、チラリと短髪の方を見やると肩をすくめていけしゃあしゃあと言う。

「ちよっと他の人がね？」

「それじゃあ、仕方ないな、勝手に逃げるとしよう」

後手でバッグの中から目的の物をそつと手に取る。

いつの間にか再び陰った月明かりの他には松明程度しか灯りはない。

夜目が効いてもそうそう気付かれる事はないだろう。

会話をしながらも全員が少しづつ動いているのだ。

クレイモア達は俺を逃がさないように、俺はできる限り逃げるのに有利な位置を確保するために動いている。

ちよつとした動きは暗闇が隠してくれる。

「あら、逃げられると思ってるの？」

「まあ、厳しいが不可能じゃないだろ」

その言葉に楽しそうに笑うジェシカ。

だが、どうやら後ろの二人特に若いほうが我慢の限界らしい。

位置関係はアリス以外のクレイモアに対して一息で大剣の間合いに入るには少し遠い程度を維持している。

「さて、楽しいおしゃべりは終わりだな」

「そうね……名残惜しいわね……アリス、あなたは下がってなさい」

戦いの気配を察したのかアリスが立ち上がろうとする。

そのアリスにジェシカが下がっているように告げる。

「私も戦えますー！」

アリスが訴える。

「ここはジェシカに従いなさい。アイツとの間に何があったのかは知らない、でも今のアナタが戦えないのは分かる」

短髪のクレイモアが諭すように言う。

「でも!？」

「アリス」

「……分かり、ました」

アリスが渋々と言った感じだが後ろに下がる。

逆に短髪と根暗が前に出てくる。

「じゃ、そろそろ始めっか?」

「ふふ、アナタの成長を見せてみなさい」

宣言と同時に隠し持っていた小さな袋を投げつける。

ジェシカ達は躲すそぶりすらみせない。

当然だ、投げた先はジェシカ達ではなく俺とジェシカの間に入った松明なのだから。

一瞬ジェシカ達の意識が投擲物に行く。

その間に俺は備える。

「一体何を……!？」

白い閃光が辺りに満ちる。

遠巻きに見ていた数少ない野次馬から悲鳴が聞こえる。

ほぼ全ての野次馬はセネルによって避難したがごく一部が未だに残っていたのだ。

お手製のフラッシュ・バンド。

マグネシウム粉末と火薬の混合物が強烈な光を発する。

今は夜、効果は抜群だろう。

ジェシカ達に対して全力で全ての指を伸ばす。  
まだ閃光の影響から抜けられないジェシカ達目掛けて槍のように  
伸びていく。

何かを突き破ったような小さく鋭い音が6つ鳴る。

短髪と根暗の腹部や足などを指が貫いたのだ。

短髪は寸前で気付いたのか四肢のみ、逆に根暗の方は内蔵にも大分  
ダメージを与えられた。

死ぬ事は（多分）ないだろうが、戦線からは離脱するだろう。

ここまでは想定通りだった。

奇襲攻撃により浅からぬダメージを四肢などに与えてその間に  
さっさと逃げる。

そのつもりだった。

「おいおい、マジかよ……」

伸ばしたのは10指全て、にも関わらず音は6つ

残りの4つが狙ったジェシカは無傷で立っていた。

その顔には面白くてたまらないと言わんばかりの笑顔。

その手の中には俺の指が4本しっかり握られていた。

「惜しかったわね？でも、驚いたわ、今のあれ何かしら？」

「……企業秘密だ」

「あら、残念、他には何かあるのかしら？」

ない事もないのだが、これが一番成功確率が高かった。

所詮奇襲なのだから備えられれば効果は半減する。

「今回は、これだけだったな!!」

思いつきり指を引っ張る。

予想していた通りジェシカは離さない。

「ふふ、逃げようとしても無駄よ?」

「それは、どうかなっ、と!!」

さらに力を加えると同時に指先に近い部分の密度を下げる。それによって弱くなった部分から無理矢理指を引きちぎる。

痛覚も若干弱くなっていたとは言え激痛が全身を奔る。

それを抑え込みながら指を元に戻す。

「ッッ、どうだ!!」

「逃げられちゃった……セラ、エルダ貴方達は回復に専念しときなさい」

残念そうにジェシカが俺の指先を捨てる。

根暗がセラ、短髪がエルダと言っらしい。

ドロドロした怨念を感じるが流石に根暗の方も傷が深いのか素直に言っ事を聞くようだ。

どうやらしばらく一対一で戦ってくれるようだ。

セラとエルダが回復しきる前に逃げなくてはどっしりしようもない。

ジェシカが大剣を振り上げ踏み込んでくる。

大上段からの振り下ろし!

こちら也大剣を振るい横から撃ち落とす。

大剣を弾いた後、隙目掛けて袈裟懸けを放とうとする。

その時ようやく気付く一体いつ繰り出したのか顎にハイキックが迫っている。

咄嗟に状態を上体を逸らして回避を試みる。

蹴りが顎先数センチを掠めながら飛んで行く。

視界の隅でジェシカが一回転したのを確認する。

同時に左から薙ぎ払いの準備をしているのを見て取る。

このままでは回避不可能と判断して、さらに上体を逸しバク転をするような形で距離を取る。

着地と同時に突きを放つ。

が、あっさりと逸らされ斬り込まれる。

回避は間に合わない。

咄嗟に左手を硬化させ受ける。

辛うじて断ち切られる事はなかったが決して浅くない傷を負ってしまう。

流れる血も激痛も無視して大剣を手元に引き戻し、力の入らない左手の代わりに足で刀身を蹴り上げ斬り上げる。

ジェシカはまだ受けられたままの大剣をテコの棒の代わりにして自らを吹き飛ばす。

反動で俺もバランスを崩して二、三步たたらを踏む。

ジェシカも態勢を崩していたが間に合わないと判断し仕切り直すために距離を取る。

「変わってないのね？……でも、強くなったわ」

ジェシカは嬉しそうにそう告げる。

「そりゃどういたしまして……ジェシカこそ強くなってるじゃないか」

「あら、それはそうでしょ、年がら年中戦っていたもの」

後半は聞こえないように呟いたつもりだったが聞かれてしまったらしい。

どうやらジェシカも楽な生活をしていた訳ではないようだ。

「本当に残念だわ……逃げしてあげたいのだけだね？」

そこでようやくやくジェシカが悲しそうな顔を見せる。



「お前が居るから!!」

「セラ!?!」

そう叫びながらセラが俺に襲い掛かってくる。

さっきまで俺が与えたダメージを回復させるべくジツとしていたのだが我慢できなくなったらしい。

まだ回復しきっていない筈なのに突っ込んできたのだ。

感情任せの大振りだったが不意打ちだった事で事態は深刻さをま  
す。

突然の事に回避は間に合わず硬化させたままだった左手で再び大  
剣を受ける羽目になったのだ。

鈍い音を響かせながらも断ち切られてしまった左手を横目に俺は  
咄嗟に反撃していた。

だが、左手と一緒に僅かに切られてしまった左足が手元を狂わせ  
る。

肩口から腰に至るまで見事に切り裂いてしまったのだ。

致命傷だった。

そして致命傷を負ったにも関わらずセラは妖力を解放して俺に襲  
いかかるうとする。

この一瞬の出来事に驚いていたジェシカが慌て出し、セラを取り押  
さえようとする。

「セラ!?!妖力を抑えなさい!覚醒したいの!?!」

そんな言葉も虚しく混濁し始めた意識で若い戦士は吠える。

「妖魔、全部コロス!!ヨウマにミカタするヤツもコロス!!コロスコロ  
スコロスコロス!!!」

「セラ!?!」

「セラ、抑えなさい!!」



## 共闘

### “覚醒”

それは半人半妖の戦士がその限界を超え人から異形の化け物へと変質する事。

覚醒した者は例外なく人を守る者から人を喰らう化け物へとその本質が変質させる。

覚醒者は基となったそれぞれの戦士の特徴に沿ってその姿を大きく変化させる。

ある者は蛇のような姿に、ある者は巨人のような姿に、ある者はケンタウロスのような姿へと変化する。

そして基本的に人の数倍の大きさを誇り、その強さは圧倒的である。

そんな覚醒者へとセラと呼ばれた者はなってしまったのだ。

覚醒した瞬間から溢れ出る妖気に圧倒される。

誰もがただ茫然とセラの覚醒を見ていることしかできなかった。

逃げることも戦うことも頭の中から失われたただただ茫然としているのみだった。

予想外だったのだ。

本来組織の半人半妖の戦士は自らの覚醒が避けられないと自覚した段階で死を選ぶ。

大半が化け物としての生より人としての死を選ぶのだ。

にも関わらずセラは突如として覚醒した。

怒りと憎悪が自らの限界を見失わせたのだろうか？

俺にはむしろ全てを憎んで自ら激流に身を任せたように見えた。

……とにかくセラは制止を振り切り覚醒したのだ。

今考えるべきはこれからどうするか、だ。

最も安易な道はこの混乱に乗じて逃走を図ることだろう。

だが、それはこの町の住人を、テッドとリスの兄妹やセネル、奥さんのカミラ、それにカムリと言った人々を見捨てる事になる。

それで良いのだろうか？

俺が思いを巡らせているとエルダと呼ばれていたクレイモアがふらふらと覚醒者へと近づいていくのが目に入る。

一体何を？そんな疑問が頭を過る。

「……セラ、ラ……本当にセラ、なの？」

エルダがほぼ放心状態のままそう問い掛ける。

その声に反応するように今の今まで動いていなかった覚醒者が動きを見せる。

本当に見えるのか疑わしいがエルダの方を見たのだ。

エルダは覚醒者が反応した事を機にさらに近寄る。

「……お腹すいた」

覚醒者  
セラが一体何を見ているのか分からない目のまま呟く。

次の瞬間だった。

風切り音と共に覚醒者の長い腕が伸びる。

気が付いた時にはエルダはその場から忽然と姿を消していた。

「ガッ、ゲワァッ!!」

エルダは覚醒者の手の中に居た。

その姿は一瞬前と一点を除いて何も変わっていなかった。

ただ一点腕が存在しない事を除けば

「何これ、美味しくない……」

エルダの腕だった物が覚醒者の口の中にある。  
不味い不味いと言いながらも覚醒者は吐き出すことなくエルダの腕を飲み込む。

「……エルダ、不味い」

その一言と共に興味を失ったようにエルダを適当に投げ捨てる。  
そこまで見てようやく動き出す。  
偶然こちらに飛んで来たエルダを受け止める。

「大丈夫か？」

そう問い掛けるとどうにか、と言った風だが確かに頷く。  
エルダはガタガタと震えているがどうやら腕以外に外傷はない。  
俺がさつき貰った傷も大体治し終えている。

これならば死ぬ事はあるまい、そう判断し優しくエルダを地面に横たえる。

覚醒者へと意識を戻す。

まだ意識がハッキリしていないのか覚醒者は身を丸めるように自らを抱きしめながらブツブツと呟いている。

「……妖魔、殺す、でもお腹すいた……全部、壊す、食べたい、美味しいの……」

「レイアナタも手伝って貰えるかしら？」

いつの間に近づいて来たのかジェシカが声を掛けてくる。

ジェシカはアリスも伴っていた。

その手には2本の大剣を持っている。

エルダが落とした物を回収したのだろう。

アリスは覚悟を決めた凜々しいさと僅かな不安が混じり合った顔をしていた。

俺が言うのも何だが取り敢えずだろうがどうやら立ち直ったらしい。

「言われなくても」

ジェシカの申し出に肯んずる。

覚悟は決めた。

俺はこの町を、知り合いを友人を守る。

「アリス、悪いけど動いて貰うわ、エルダは大丈夫？」

「了解しました。ジェシカさん」

「すみません……利き腕持ってかれました……」

ジェシカ言葉にアリスは即座に返答する。

エルダもようやく落ち着いて来たのかまだ実感のなさそうな声でジェシカに告げる。

「そう、あなたは下がってなさい。再生するなら早いほうがいいわ」

「……私、攻撃型ですよ？再生なんてどうせ上手くできません、なら、少しでも……手伝います」

どう見ても戦えそうに思えなかったエルダだが自らの参戦を主張する。

実際エルダの言う通り攻撃型なら手足の再生はできないだろう。

喰われた手足が残っていればくつつける事はできたかも知れないが生憎喰われてしまった。

ならば、そう思わなくもない。

それにここは戦わせた方がエルダの精神上も良いかも知れない。

どちらにせよ戦力は僅かでも欲しいのだ。

「エルダ……分かったわ、でも無理はしないで」

エルダが頷き立ち上がる。

若干ふらついたようだが一人で立ち上がる。

そしてジェシカから大剣を受け取る。

「はんっ、クレイモアと妖魔が共闘とはね」

空元気だろぅがエルダがそう言う。

エルダはどうやら俺との共闘を受け入れてくれたらしい。

だが、アリスは俺と目を合わせようともしない。

ただ悲しそうな目でセラを見ているだけだ。

「お腹すいた……食べ物、欲しい……」

さつきからブツブツと呟くだけだった覚醒者が動き始める。

目標はどうやら俺達ではない。

別の方向へと向かっている。

おそらく先に腹を満たそうと言うのだろう。

そうさせる訳にはいかない。

俺とジェシカは頷き合う。

そして覚醒者へと向かって走り出す。

セラの覚醒体は人型に比較的近い物だった。

ただその四肢は異常に長く、小さいが丸い尻尾を持っている。

まるで針金で作った出来損ないのクモのようだ。

そして人間に近い姿をしていながら四足歩行していた。

ゆっくりと移動する覚醒者に一斉に斬りかかる。

「……邪魔……」

だが、その一言と共に四肢が縦横無尽に振るわれる。

エルダが吹き飛ばされるのが見える。

やはりまだ本調子ではないのだ。

俺は辛うじて剣で受け止めていた。

軽く吹き飛ばされるが問題はない。

アリスは見事に躲していた。

だが、猛攻に耐えかねたのか自ら距離を取る。

ジェシカは流石上位ナンバーと言った所だろうか？

回避すると同時に足首から先を切り落としていた。

これなら行けるかも知れない、そう思った時だった。

斬られた断面から糸のような物が伸び切り落とされた足首へと伸びる。

そしてくつついたと思ったたらそのまま何事もなかったようにその足も使い歩き出す。

一瞬で再生されてしまったのだ。

切り落とされた部分を回収した事を考えれば粉々にすればダメー  
ジは与えられそうだがあの再生能力は脅威だった。

どうにか覚醒者の歩みを止めようと挑むが一瞬で再生されてしま  
う。

それも慣れてきたのか斬られた瞬間に既にくつつき始めており切  
り落とす事すらできない。

「見つけた……餌、食べる、二つもある……でも小さい、足りないかも  
……」

そのまま歩みを止められないままいると俺は信じられない者を見  
つけてしまう。

そこに居たのはテッドとリズの兄妹だった。

「何故こんな所に？」



路地に置いてある樽の裏で兄妹が震えているのが見える。

その表情は恐怖に歪んでいる。

逃げるように声を張り上げるが聞こえているのかすら怪しい。

とにかく一瞬でも覚醒者の意識を兄妹から離さなければならぬ。

そのために全力で兄妹を守るために攻撃を放つ。

だが、切り裂いても一瞬で再生され覚醒者は気にもしない。

「クソっ!!!」

このままでは埒が明かない、そう判断しテッドとリズを確保して遠ざけようとする。

だが、位置が悪かった。

ジエシカとアリスは二人共逆側に居る。

エルダに至っては気絶でもしているのか先程吹き飛ばされたまま帰ってこない。

間に合わない

絶望的なまでに遠い。

普段であれば気にもならない僅かな距離が今この瞬間は遠すぎる。

「またっ！また守れないのか!?!」

無力感が俺を襲う。

それでも足を止めることなど、諦める事などできよう筈もない。

限界まで妖気を解放する。

身体が妖魔へと変化する。

それでも俺の動きは絶望的なまでに遅かった。

何故こんなに弱いのか？

何故俺は救うことができないのか？

覚醒者の長い腕が兄妹を襲う。  
目を瞑ってしまふ。

「ガアッ!!」

金属同士がぶつかり合ったような甲高い音と何かが潰れる鈍い音が響く。

そして肺の中の空気を押し出したような野太い悲鳴。

……野太い？

恐る恐る目を開ける。

そこにはテッドとリズの死体が……なかった。

そこに居たのはテッドとリズを庇い盾を構えているセネルが居た。

覚醒者の一撃を受けた盾はひしゃげ、鎧が所々破損している。

セネルも怪我を負っている。

だが、生きていた。

生きていてくれたのだ。

誰も死んでいなかった。

覚醒者は捕食を邪魔された事に苛立ったようにもう一度腕を振るう。

これならば！

棒立ちになっているセネル達と覚醒者の間に駆け込む。

しっかりと大地を踏みしめ大剣<sup>鉄柱</sup>で受け止める。

そのまま地面にめり込みそうな衝撃が大剣越しに全身を貫く。

ピシリと微かにどこかが壊れたような音がする。

だが、そこまでだった。

大剣<sup>鉄柱</sup>も俺もその一撃を受けきる。

この剣以外であればあっさりと打ち砕かれていた。

リブストスさんに感謝、だ。

まだふらつく足にむち打ちセネルとテッド、リズをまとめて抱える。

突然の事に驚いたのかセネルが藻掻くが気にせず安全な場所まで距離を取る。

「……レイ、なのか？」

「そうだ……そう言えばこの姿を見せたのは初めてだったか」

セネルが頷く。

抵抗したのはその所為だったか……

セネル達を降ろす。

セネルはどうにか立ち上がるが、子供達は腰でも抜かしているのかそのままへたり込んでしまう。

ジェシカ達と覚醒者の戦いを横目にセネルに告げる。

「テッドとリズを連れていってくれ」

「退けるか!?俺はこの町を守護する兵士だ!後ろにラボナ市民がいる限り敗走は有り得ん!!第一友を見捨てるような人間はこの兵団には居らん!!」

セネルが俺も戦う、と主張する。

俺は首を振りながら再度告げる。

「このままじゃ子供達が危ない、子供を守るのだから大切な役目だろ」  
「？」

「この子供達には自力で……」

そこでようやく兄妹の様子まで目がいったのだろう。

それまでであった勢いが失われる。

「コイツらを頼む」

「……分かった、だが避難させたら助けに来るから……死ぬなよ」

そう言つとセネルは子供達を抱きかかえる。

右手にリズを抱えた際に僅かに顔をしかめる。

どうやら骨が折れているのかヒビが入っているのか痛むらしい。

それでも取り落とすことなどなく兄妹を抱え、一度こちらを見た後走り出す。

それを確認し俺は再び戦場へと舞い戻るのがだった。

## 終演

セネルにテッドとリズの兄妹を任せ俺は覚醒者となったセラとの戦いへと再び向かう。

ジェシカ達は覚醒者の猛攻を凌ぎながら隙を見て斬りつけていた。だが、覚醒者の圧倒的な再生力の前にジリジリと傷付き疲れ始めていた。

特に片腕をなくしたエルダは既に限界が近く、そのフォローをしていたジェシカにも余裕はない。

エルダを守るために覚醒者を「止め」ているようだ。

そして「止め」るための一瞬の集中がジェシカを危険に晒している。

綱渡りのようなギリギリの回避を行っているのが分かる。

あれでは何れ終わりが訪れるだろう。

実際今もジェシカへと向かって鋭い振り下ろしが迫っている。

ジェシカへと迫る腕をぶった切る。

「待たせたー!」

「ふふ、遅いわよっ!」

「悪いな」

ジェシカはいつも通りの口調で返してくるがその額には汗が滲んでいる。

他のクレイモア達に声を掛けるが、アリスには無視されてしまう。

エルダは友軍として考えていないのか、いれば助かる程度の感覚で軽く頷いただけだった。

先程より顔から血の気が失せているから純粹に片腕では辛くて返事をする余裕などないだけかも知れないが。

ジェシカは俺の事を待っていたらしく俺が戻ってきたことを機に一気に畳み掛けることを宣言する。

「どうやら奴は一辺に2箇所しか再生できないみたいよ」

戦闘を続けながらジェシカがこれまでの戦いで分かった事を教えてくれる。

「そこで私が一瞬だけ奴の動きを止めるからアナタ達で四肢を落とすなさい」

「了解だ」

「分かりました」

「……ハア、ハア、了解ですっ」

ジェシカの指示で俺達は配置に付く。

俺は妖魔だがジェシカの指示であれば取り敢えず協力してくれるらしい。

アリスもエルダも素直に配置に付く。

準備が整ったのを確認したジェシカが一旦距離を取る。

そして、自らの妖気を鎮め、目を瞑る。

「今よ!!!」

その言葉と同時に覚醒者の動きが不自然に停止する。

自らの意志ではない停止に覚醒者はバランスを崩す。

その隙に俺、アリス、エルダは斬りかかる。

俺は右手、アリスが左手、エルダが左足だった。

3つの部位が空を舞う。

「グギャアアアアアアアアアア!!!」

覚醒者の絶叫が響き渡る。

残った右足を無茶苦茶に振り回す。



リスを吹き飛ばす。

未だに痺れて満足に動けない俺も覚醒者の背中から叩き落とされる。

……滑り落ちた、と言った方が正しいのだが。

覚醒者が今まで見せた事のない動きをする。

身体を丸め丸い尻尾のような部分をジェシカに向けたのだ。

そして尻尾から白い線のような物が吐出される。

“糸”だ。

蜘蛛のように糸の塊を飛ばしてきたのだ。

ジェシカは高速で迫る糸の軌道を見極め最低限の動きで回避しようとする。

が、目前まで迫った糸の塊は突然爆発する。

四方八方に糸が撒き散らされる。

それに巻き取られてしまうジェシカ。

どうやら粘着性も持っているらしく容易に脱出できないようだ。

硬直から抜け出した俺は時間を稼ぐために覚醒者の尻尾を斬りつける。

直前で気付かれたがどうにか浅くはない切り傷を作ること成功する。

覚醒者の傷がゆっくりと再生し始める。

今までならすぐさま再生していたのに尻尾の傷はゆっくりだ。

どうやら回復できる部分が決まっているらしい。

そこに僅かな光明を見出す。

覚醒者が四肢の再生を終え、本格的にこちらを狙ってくる。

今まで3人で捌いていた攻撃が1人に集中する。

幸いと言って良いのか、覚醒者の長い手足は1人を狙うには向いていないらしく想像程攻撃は激しくない。

それでも比べ物にならない攻撃が続く。



もうダメかも知れない……

そんな弱気が顔を出す。

それを無理矢理ねじ伏せる。

が、そんな事とは関係なく追い詰められてしまう。

回避する隙がない。

既に大剣と部分的な硬化を最大限に利用しながら辛うじて逸らしているだけだった。

覚醒者の攻撃は重く鋭い、逸らしてもなお命を削られてしまう。

「あっ……」

崩壊は突然訪れる。

回避も逸らす事も間に合わない。

防御は上から抜かれる。

そんな攻撃が来る事が分かる。

命を奪う一撃がゆっくりと迫る。

これなら間に合うかも知れないと思うが自分の動きはさらに輪をかけて遅い。

ああ、これが走馬灯なのか……

そんな諦めが身を包む。

それでも最期の足掻きとして身を振りつつ後ろに跳ぶ。

当たる直前だった。

唐突に致命的な一撃の軌道が逸れ始める。

いや、攻撃だけではな覚醒者自体が傾いでいく。

そして世界の速さが戻る。

轟音を響かせながら頭の数ミリ横を掠っていく。

掠っただけで切れてしまい血が流れる。

轟音に頭の芯が痺れている。

だが、生き残った。

原因を探す。

直ぐに分かった。

覚醒者の向こうにアリスが居る。

アリスの大剣は覚醒者の右足を細切れにしていた。

アリスが助けてくれたのだ。

アリスと二人で覚醒者に挑む。

右足を細切れにしたことで再生は遅れているが、覚醒者は未だに健在だった。

一瞬アリスと視線が交差する。

既に互いにボロボロだった。

頷き合い、同時に斬りかかる。

二人が増えても覚醒者はやはり圧倒的だった。

大きいのは尻尾の回復が終わったことだった。

攻撃のバリエーションが格段に増えたのだ。

俺とアリスは受けるだけでこちらから攻めることができない。

その時だった俺は又メツとした物を踏み抜く。

糸だ。

外れた糸がこびり付いていたのだ。

その隙を覚醒者が逃す訳はなかった。

大剣を構え、全身を硬化させ防御態勢を整える。

とんでもない衝撃が全身を貫く。

衝撃に吹き飛ばされる。

幸いと言って良いのかこの段階ではまだ生きている。

だが、完全に身体が言う事を聞かない。

壁が急速に近づいてくるのが分かる。

その時だった。

鈍い感覚の中で誰かに抱きとめられたのが分かる。

そして衝撃。

覚悟していた物よりも数段優しい衝撃だった。

「大丈夫か？」

素っ気ない声でそう尋ねられる。

反応の鈍い身体を動かしようにか声の主を見る。

そこに居たのはエルダと呼ばれたクレイモアだった。

エルダもまた傷がない部分がない程ズタボロだった。

先程の負傷だろうが特に左足が酷い。

完全に押し潰されており再生していないのだ。

「……………お陰で、な」

どうにかそう言う。

次の瞬間全身が燃えるように痛み出す。

どうやらようやく頭が痛みを認識し出したらしい。

全身傷だらけだった。

それでも立ち上がる。

この状況でも離さなかった大剣を持ち上げる。

「……………」

妙に軽かった。

そこにあっただのは刀身が半ばから存在しない剣だった。

おそらく大剣が砕けることで衝撃を吸収してくれたのだろう。

この戦いの中で何度も命を救ってくれた大剣に一瞬だけ黙祷する。

その様子に何か感じる事があったのだろうか？

エルダが告げる。

「いれ、持ってけ」

そう言って差し出されたのはエルダの大剣クレイモアだった。

「だが……」

「どうせ、」の手足じゃあな」

そう言いながらエルダは失くなった右腕と潰れたままの左足を見やる。

そしてもう一度大剣を受け取るように言う。

その言葉に俺はエルダから大剣を受け取る。

「必ず返す」

それだけエルダに告げ、エルダの大剣を手に駆ける。

そこでは驚くべき光景が展開されていた。

全身鎧を身に纏った兵士が数人居た。

その手には投槍、ラボナの兵士達が戦っていたのだ。

町を破壊しながら暴れる覚醒者に兵士達が立ち上がったのだ。

その中心に居たのはセネルだった。

大声を張り上げ叱咤しながら指揮を取っている。

俺に気付いたのかニヤリと笑い掛けてくる。

「バカ、野郎……」

泣きそうになりながら呟く。

彼等の気持ち痛みほど分かるからだ。

歯が立たないと分かっているでも町を、人を守りたい。

ただそれだけなのだ。

俺も覚醒者へと斬りかかる。

俺の姿に兵士達が僅かに動揺するがセネルの叱咤で一丸となり覚醒者へ向かう。

その中で一つの流れができる。

兵士達が気を逸し、クレイモアが一撃を与える。その繰り返しだ。

そして俺も参加したことでその流れが加速する。徐々に再生が間に合わなくなってきたのだ。

そして今度はアリスが首を狙う。

先程俺が渾身の力でも弾かれてしまったのを見ていたからである。妖力を限界近くまで解放し尚且つケーブルの隙間を狙う。

アリス渾身の突きが覚醒者に吸い込まれる。

覚醒者の断末魔を上げる。

最期の足掻きとばかりに無秩序に暴れまわろうとする。

が、四肢も尻尾もなくした状態では何程の事もできない。

俺とジェシカもアリスと同じように隙間を狙って突きを叩き込む。

それで終わりだった。

覚醒者は打倒された。

だが、被害は甚大だった。

ラボナの町の5分の1程が壊滅した。

できる限り巻き込まれないように戦った。

だが、それでも少なくない人間が巻き込まれてしまっただろう。

そして何より共に戦った兵士達だ。

全滅だった。

自らの存在を賭けて戦い、そして死んだ。

セネルも死んだ。

最後まで生き残っていたセネルは隙を作るために覚醒者の尻尾を切り裂き、そして怒り狂った覚醒者に上半身を吹き飛ばされた。

疲労でその場にへたり込む。

近づいてくる足音がある。

覚醒者との戦いは終わったのだ。

当然次は妖魔の番なのだろう。

だが、動けなかった。  
いや、動く気力がなかったと言つべきだろうか？  
また一人友を失った。  
守れた者がおり守れなかった者がいる。  
大剣が突き付けられる。

「……次は俺か？」

「そうよ……死にたくないかしら？」

「ああ、死にたくないな」

無言の時間が過ぎる。

アリスとエルダも近づいてくる。

近づいて来たエルダを見て思い出す。

「……そうだ、これありがとう、助かった」

「そう、か」

エルダに大剣を返す。

左手で大剣を受け取るがうまく力が入らないのが取り落としそう  
になっている。

これで借りていた物は返した。

未練はある。後悔もある。守れた者もある。守れなかった者もある。  
だが精一杯生きてきた。

ここでジェシカの手に掛かるのも悪くはない。覚悟を決める。  
エルダの様子を見ていたジェシカが尋ねる。

「エルダ、アナタこれから戦えるかしら？」

その間にエルダは返答に窮する。

クレイモアには2種類の型がある。

攻撃型と防御型だ。

その名の通り攻撃型は攻撃に優れる。そして防御型は再生能力に優れている。

そして防御型ならば失った手足を元の通りに再生する事ができる。だが、攻撃型は精々一般人並みの筋力の手足しか再生する事ができない。

エルダは攻撃型、即ち失われた右腕は再生できないのだ。場合によっては潰された左足も諦める必要だってあるかも知れない。

その事を一番理解しているのはエルダなのだろう。だからこそ返答に窮する。

「……元のように、は無理だと思います」

「そう……質問を変えるわ、これからも戦いたい？」

戦えなくなったクレイモアの最期は悲惨だ。

無理して戦いに出て殺されるか組織に処分されるか、だ。

負傷したクレイモアと言うのは覚醒しやすい存在だ。

覚醒者を無闇に増やしたくない組織にとって厄介者なのだ。

だからと言って逃げる事もできない。

粛清の刃が待っているからだ。

そして目の前に居るのはその粛清を最も多く行ってきた審判者

その前でエルダは本心を吐露する。

「戦いたく、ないです……!!」

そんな事情はその時は知らなかった。

だが、エルダが涙を零す姿に心打たれる。

「そうよね、よく言ったわ」

そう言いながらジェシカが優しくエルダを撫でる。

落ち着いてきた所でジェシカは俺の方に向き直る。  
そしてとんでもない事を言うのだった。

「ねえ、レイ、アナタ組織の戦士になってみないかしら？」  
「……………はい？」

そして驚愕の音がラボナの町に響き渡る。



## 顛末

side イルデブラン大司教

あの日、聖都ラボナの町は半壊した。

そして彼等は破壊だけを残し何処かへと去っていった。

幸いと言っつていいのだろうか、死者は少ない。

だがその死を忘れることはできないだろう。

娘婿だったセネルは死んだ。

幼い赤子と妻を残して死んだ。

英雄として化け物に挑み、そして虫けらのように死んだ。

町の人間は立派な息子だ、と言う。

私も理性ではそう思わなくもない。

……だが、生きていて欲しかった。

娘を悲しませないで欲しかった。

アイツは私に認められていないと思っつていたのかも知れない。

義息子とは立場の違いからよく意見が対立した。

私はこの町のトップとして、教会の指導者として軟弱な態度を見せることなどできなかつた。

だがそれでも認めていたのだ。

アイツが語るまだまだ青臭い正義を、そして理不尽な現実に立ち向かい妥協点を必死に探すその姿を……

特に先日の妖魔騒ぎを治めた事は評価していた。

アイツは気付いていないと思っつているだろうがカムリからおおよその話は聞いていたのだ。

清も濁も併せ呑み最善の結果を目指したその姿勢を評価している。

だが、あのクレイモアから生まれた化け物に殺された。

町ではあの化け物の話で持ちきりだ。私以外にも見ていた人間が居たのだろう。

今はギリギリ深刻な疑念レベルで留まっている。

だが、放っておけば事態はさらに悪化するだろう。

チラリと目の前の袋を見る。

それなりの大きさがある袋の中にはぎっしりと大金が詰まっていた。

先程全身を黒い服で覆った陰気な男が渡してきたものだ。

黒服の男はスタッフの地にある組織の使いを名乗った。

この事態の沈静化を依頼してきたのだ。

もともと依頼と言うよりは脅迫、と言った方が正しいような物だったが……

どちらにしろ私には断る理由もなかった。

元々行うつつもりだった事に金を払うと言うのだ、ありがたく貰っておくべきだろう。

これだけあれば多くの人の命が救えるのだ。

ならば金の出処など気にすべき事ではない。

真実を含んだ噂を完全に打ち消すのは困難だが、その噂の一部を利用して真実へと誘導する事は簡単だ。

その創られた真実は私がすべき事とも合致するだろう。

だが真実は慎重に扱う必要がある。

真実は諸刃の剣なのだから……

その後、聖都ラボナは教会の強力な指導の元、新たな教義が追加された。

一切の妖かしの物を排斥するようになったのだ。

その先頭に立ったのは時の大司教であり息子を亡くしたばかりのイルデブランだった。

傍らには修道士カムリの姿もあった。

彼等は民衆が求める真実を語った。

同時に義息子が求めていた難民を含めた全ての住人への救済を精力的に行った。

その裏には出処の分からない資金があったという噂も立った。しかしそれらは熱狂の中で受け入れられ町は大きく変わった。善きにしろ悪しきにしろ変わったのだ。

変わってしまった町で語り継がれる英雄譚があった。

二人の英雄、無名の剣士と聖都の兵士の物語。

化け物と戦い相打ちになりながらも町を救ったというただそれだけの物語。

それだけが一般市民にとって必要とされた真実だった。

そして真の真実は聖職者の間でのみひっそりと語り継がれる。

“殺戮の悪魔”

それは銀眼の魔女、銀眼の斬殺者、クレイモアと呼ばれる無名の戦士への嫌悪と憎悪、そして畏怖を含んだ別称だった。

聖都ラボナ、それは妖かしの物を全て排除した白い町、同時に多くの人々を救った慈悲の町。

時は流れ、妖魔による被害は留まる事を知らず人々はより心の<sup>信</sup>拠<sup>仰</sup>り所を求める。

その中でラボナは外の世界を見ることをせず、美しい世界を維持し続けるのだった。

美しい世界が崩壊するのは数十年の先の話であった。

セネルの遺した赤子が大きく成長した時再びラボナの物語は動き出すのだった。